

一般国道411号(塩山バイパス)建設に伴う

獅子之前遺跡発掘調査報告書

1991. 3

山梨県教育委員会

山梨県土木部

一般国道411号(塩山バイパス)建設に伴う

獅子之前遺跡発掘調査報告書

1991. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序

山梨県塩山市千野に所在する獅子之前遺跡は、塩山バイパスの建設に先立ち平成元年度と平成二年度の二回に分けて発掘調査が実施されました。本報告書はその二カ年にわたる調査の結果をまとめたものであります。

昨年度の調査では縄文時代前期、諸磯期の遺構・遺物が数多く発見され、東山梨郡方面では過去あまり例のなかった貴重な資料を得ることができました。また水晶の原石や石器、縄文時代前期の立体土偶など県内でもめずらしい遺物も出土して注目されました。今年度の調査では近世の青梅街道の一部と考えられる遺構が検出されましたが、これも県内では初めての道路遺構の発掘調査例で、近世の道路建設に係る土木技術の一端を知ることができました。いずれの発掘成果も今後研究を進めていくうえで良好な前例となるものと存じます。

本報告書が、多くの方々の研究資料としてご活用いただければ幸いです。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1991年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例 言

1. 本書は、山梨県塩山市千野字獅子之前404-1外に所在する獅子之前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、一般国道411号（塩山バイパス）建設に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が県土木部に依頼され、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施した。
3. 発掘調査の期間は、平成元年5月15日から同年12月4日迄と平成2年6月18日から同年7月31日迄であり、二ヶ年二度にわけて実施した。
4. 本書の執筆分担は以下のとおりである。

第1章・第2章・第3章・第4章第4節	米田明訓	（山梨県埋蔵文化財センター）
第3章・第4章第3節	高野文明	（同上）
第4章第1節	小野正文	（同上）
第2節	中山誠二	（同上）
第5節	松谷暁子	（東京大学総合研究資料館）
5. 本報告書に係るすべての出土品および図面・写真等は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
6. 発掘調査から報告書作成にいたるまでに、以下の方々および関係機関から御教示、御協力をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。（敬称略）

芦沢幸一・堀ノ内泉（塩山市教育委員会）、塩山土木事務所、秋山敬（山梨郷土研究会）、十菱駿武（山梨学院大学）、大森久雄・鶴田松男（塩山市）、岡崎完樹・芹沢広衛（東京都教育委員会）、中島庄一（東京都多摩市教育委員会）

目 次

序

例言

第1章 調査の実施と経過	1
第1節 調査の事務経過	1
第2節 調査の実施	6
第2章 遺跡周辺の環境	7
第1節 遺跡の立地と環境	7
第2節 周辺の遺跡	7
第3章 発見された遺構と遺物	10
第1節 住居址とその出土土器	10
第2節 土坑とその出土土器	43
第3節 溝状遺構	50
第4節 道路遺構とその出土遺物	55
第5節 その他の出土遺物	57
第4章 まとめ	85
第1節 縄文時代の土偶について	85
第2節 弥生時代の土器について	90
第3節 平安時代の土器について	95
第4節 近世以降の遺構について	98
第5節 獅子之前遺跡出土植物遺残について	102

第1章 調査の実施と経過

第1節 調査の事務経過

1. 調査に至る経緯

国道411号（通称『青梅街道』）は塩山市の市街地を通過し柳沢峠を越えて東京都青梅市に至る道路であるが、トラック等の貨物輸送および季節ごとのマイカーによる観光など極めて交通量の多いことで知られていた。しかし塩山の市街地は道路幅も狭く、大型自動車の余裕ある対面通行や歩行者の安全確保のため、市街地を避けて通るバイパスの建設が必要とされてきた。

昭和63年度に県土木部より塩山バイパス建設工事の事業計画が県教育委員会に提出された。バイパスのルートは旧国道20号線から塩山市市街地の東側をぬけ新千野橋の南で現国道411号に合流するものである。埋蔵文化財センターは直ちに路線予定地内の遺跡分布調査を実施したが、その結果、昭和63年度内では4箇所の新たな遺跡を発見し、翌平成元年度から本調査が開始されたわけである。その始めの遺跡がこの獅子之前遺跡であった。以後、書類手続きは下記のとおりに行われた。

- 平成元年4月19日 県文化課に発掘通知を提出（第1次）
- 平成元年5月15日～同年12月4日 発掘調査
- 平成元年12月26日 塩山警察署に埋蔵文化財発見通知を提出
以後平成2年3月末まで整理作業
- 平成2年6月14日 県文化課に発掘通知を提出（第2次）
- 平成2年6月18日～同年7月31日 発掘調査
- 平成2年8月20日 塩山警察署に埋蔵文化財発見通知を提出
以後報告書作成のため平成3年3月まで整理作業

2. 調査組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	山梨県埋蔵文化財センター主任・文化財主事 米田明訓（平成2年度） 山梨県埋蔵文化財センター主任・文化財主事 長沢宏昌（平成元年度） 山梨県埋蔵文化財センター文化財主事 高野文明（平成元年度、平成2年度）
調査作業員	雨宮ユキコ、緒方民子、緒方木水、萩原初恵、長田岩子、神津孝子、斎藤芳彦、 真田和子、塩見慶造、須江寿子、須江松子、鈴木桂吾、平重蔵、平貝寿美、 平美与枝、武井久子、田中トシ子、津野田政義、鶴田文子、手塚喜美代、 戸田ひろ、名取香、萩原文子、秦正明、林周子、広瀬和子、本多三夜子、 松崎しずえ、宮坂晴幸、村田牧子、山下好、横山敬哉
整理作業員	荒川奈津江、石原はつ子、出月満寿江、出月遊亀子、伊林佳子、梅林はなの、

江川勝子、長田明美、長田和子、長田可祝、長田純子、長田美和子、弦間千鶴、
小林敬子、小林としみ、斎藤多喜子、斎藤つね子、塩島博夫、角田寛子、
平重蔵、平眞寿美、戸田富士子、長尾美子、中込よしみ、名取理一、福沢準子、
保坂典子、矢崎ます子

第2節 調査の実施

1. 発掘区の設定と調査方法

獅子之前遺跡は、平成元年度調査区で幅約12m、長さ約240m（約9000㎡）という細長い範囲での発掘となった。まず十数箇所試掘坑を設定し人力で遺構確認面までの深さを調査した。表土は原則として重機の使用により除去し遺構確認面直上から人力で精査し遺構の検出に努めた。グリッドはセンター杭を基準に4m×4mメッシュで、東西A～D・南北1～58で設定した。

平成2年度調査区は元年度調査区の北側に連なる区域であり現道の国道411号との合流点部分である（約1,300㎡）。一部未買収の土地が存在していたうえに大半が住宅地であり住居の基礎の撤去に手間取った。住居基礎と表土は重機により撤去、以下は人力により精査し、グリッドも元年度の調査と同様に4m×4mメッシュで、東西A～H・南北1～19で設定した。

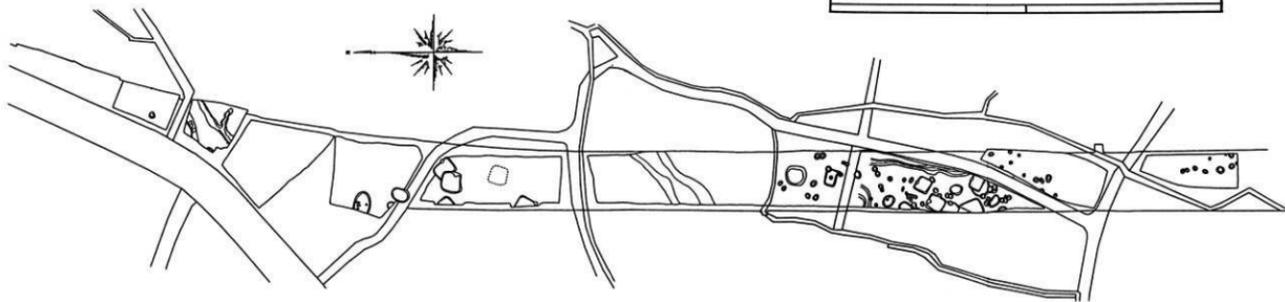
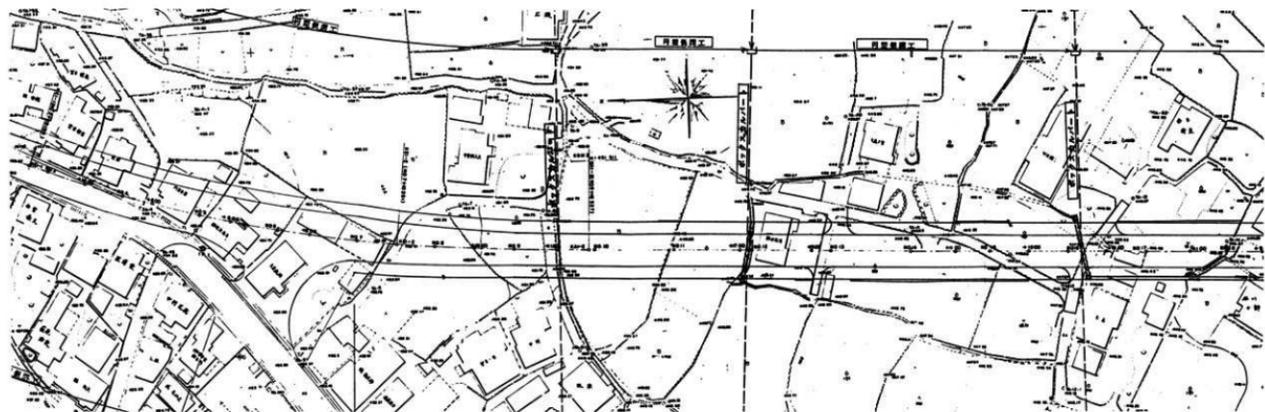
出土した遺構および遺物の記録・取り上げは以下の手順で行った。

- ①遺構確認面に到達するまでに出土した遺物はグリッドごとに一括して取り上げる。
- ②遺構確認面以下の出土遺物は原則としてレベリングおよび平面図に記録後に回収する。
- ③遺構内についてはセクションベルトを設定し、それ以外の場所を底面・床面まで遺物を残しながら掘り下げる。遺物の記録およびセクションベルトの土層の記録終了後に、ベルトも同様に掘り下げ遺物の記録を行う。

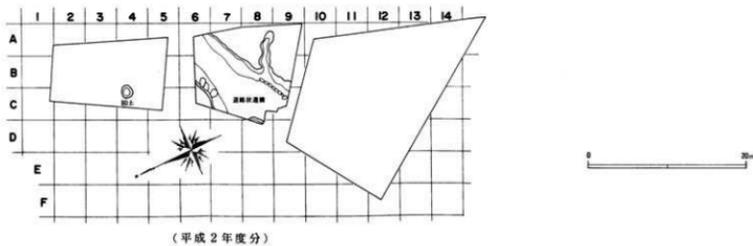
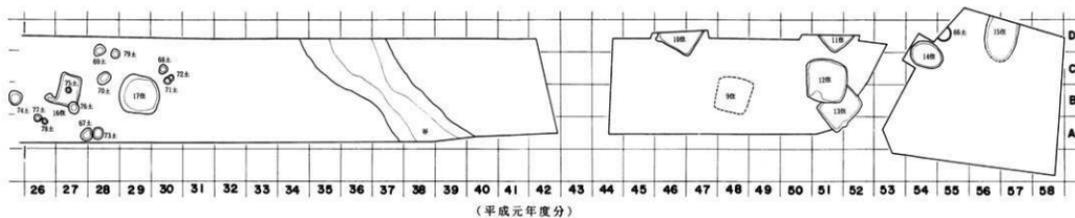
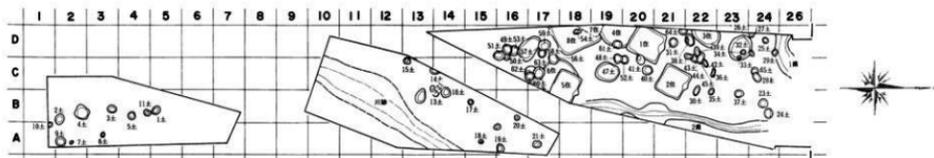
2. 調査の経過

平成元年度の調査は排土の大部分を遺跡外へ搬出できたために、調査は比較的スムーズに進めることができた。南側から北上して調査を行っていったが、調査区の南半分では縄文時代と平安時代の住居址および土坑群が入り乱れて確認され、調査は難航した。しかし北半分では土坑はほとんど姿を消し、ほぼ予定通りに調査を終了できた。なお北と南のちょうど中間部分にV字溝状の谷が検出された。

平成2年度の調査では排土を遺跡外に運び出せなかったため、表土の除去に手間取った。調査区を北の部分、中央部分、南の部分の3箇所に分け、始めに北と南の排土を中央部分に置くこととした。北の部分では弥生時代の土坑が1基と近世以降の道路遺構が1基、南の部分からは遺構は検出されなかった。最後に中央部分の土を南北に移動して、とくに道路遺構の南側へのつながりを探ったが、住宅建設のため既に一段低く削平されており遺構は残っていなかった。



第1圖 遺跡地形圖 (S=1/1000)



第2圖 遺跡全体図 (S=1/800)

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡の立地と環境

笛吹川の一支流である重川は大善壠嶺(2057m)の東麓に源を発し、塩山市の市街地北端、下栗生野で北の高芝山を源とする竹森川と合流している。その合流地点から下流へ500m、重川右岸の段丘上に獅子之前遺跡は立地する。標高はおよそ450m前後である。地番は塩山市千野字獅子之前404-1外である。

この重川の流域は花崗岩地帯であり、重川と竹森川の相次ぐ氾濫によって、段丘上にも花崗岩が風化した砂が堆積している。現在遺跡周辺は宅地化が進んでいるが、果樹栽培が盛んである。それ以前は水田地帯であったというから、花崗岩対策として近世以降大規模な開墾や土の搬入が行われたものと考えられる。遺跡で検出される遺構は花崗岩の砂層に掘り込まれているが、発掘区域北側では住宅が多く、その基礎が花崗岩砂層より深く打ち込まれており遺構の残存状態は良くなかった。

千野の地が歴史上で明確に登場してくるのは中世以降である。室町期から戦国期にかけては千野郷と呼ばれ、1380年に向嶽寺を開山した甲斐守護武田信成、またその子信春らはともにこの千野の地に館を構えている。江戸期から明治初期にかけては千野村と呼ばれ、青梅街道が村内を縦貫していた。千野煙草と呼ばれた特産品等は青梅街道の利用により江戸に出荷されていたという。塩山温泉は南北朝時代に起源をもつといわれているが、江戸時代の享保初年ころは年間1万人におよぶ湯治客があり最盛期であった。

獅子之前遺跡は現在のいわゆる青梅街道(国道411号)にはほぼ沿って存在しているわけであるが、この国道は明治時代以降に改良を繰り返されてきた道であり、江戸時代以前の旧青梅街道は現在とはやや異なったルートであったことが明らかになっている。

第2節 周辺の遺跡(第3図)

塩山市内では、過去の遺跡分布調査の結果を見ても最も目につくのは縄文時代中期の遺跡である。縄文時代中期の遺跡数は、縄文時代の他の時期および縄文時代以外の時代の遺跡の数を圧倒している。最近注目されている縄文の遺跡調査の例として、竹森川左岸の通称『水晶山』で採取した水晶を材料として石器製作を行っていた中期の集落遺跡である乙木田遺跡があげられる。獅子之前遺跡でも多量の水晶原石及び若干の石器類が出土しているが、乙木田遺跡とは時期的に少し差がある。

また塩山市には向嶽寺に代表される甲斐武田氏と強い結びつきを有する寺社が数多く存在することもあり武田氏に関連する中世以降の遺跡が周辺に分布している。また近世以降の青梅街道に関連する文化財等も所々にみることができる。

以下、獅子之前遺跡周辺に分布する遺跡を列挙してみよう。



第3圖 周辺の遺跡 (S=1/25000)

- 1 殿林遺跡（縄文時代中後期、重要文化財指定の曾利式土器が出土。）
- 2 北原遺跡（縄文時代中期、藤内・曾利が散布。）
- 3 宮久保遺跡群（縄文時代中期、曾利が主体。）
- 4 往還西遺跡（縄文時代中期、猪沢が散布。）
- 5 乙木田遺跡（縄文時代中期の水晶工房跡を検出、藤内・称名寺が散布。）
- 6 踏地遺跡（縄文時代中後期、勝坂・曾利・称名寺が散布。）
- 7 安道寺遺跡（縄文時代中期、弥生時代中期の土器が散布。）
- 8 下萩原中村遺跡（縄文時代中期、五領ヶ台が散布。）
- 9 南三宮遺跡（平安時代、土師器が散布。）
- 10 北割遺跡（縄文時代早期、繊維土器が散布。）
- 11 上宮沢遺跡（縄文時代中期、曾利が散布。）
- 12 小山平遺跡（縄文時代中期、藤内が散布。）
- 13 獅子之前遺跡（縄文時代前中後晩期、弥生時代前中期、古墳時代、平安時代、中近世の遺構・遺物を出土。）
- 14 武田信春館跡（中世、方形館跡。土塁・堀が残存。）
- 15 梅の木遺跡（縄文時代中期の土器が散布。）
- 16 於曾屋敷（中世、県指定史跡、豪族於曾氏の方形館跡。二重の堀・土塁等が良好に残存。）

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 住居址とその出土土器

1. 1号住居址（第4図～第6図）

〔形状・規模〕一辺約400cmの隅丸方形プランを呈する。遺構は花崗岩砂層に掘り込まれ、覆土は暗褐色土。

〔カマド〕北壁の中央よりやや西よりに位置する。袖石は左2枚、右3枚の平石が残存している。炊き口は幅60cm、掘り込みは12cm、掘り方は110cm×110cm。カマド内の埋土中から変形土器が1個体分出土した。また天井石が落ちたものと考えられる平石が見られる。

〔床面・壁〕壁は全体的に高さ約30cmで垂直に近い立ち上がりを見せる。床はほぼ水平であり、中央部分の所々に貼り床が見られる。

〔出土遺物〕平安時代の土師器が出土している。1は坏で内外面とも横ナデ後、内面には放射状暗文・ペン先状工具による刻みが見られ、外面下半および底部は承切り後へラ削り。胎土・焼成ともに良好で明褐色を呈する。2はカマド内出土の甕で内面横方向、外面縦方向のハケ調整。胎土は砂粒・金雲母が多く焼成は良好、褐色を呈する。3の坏は内外面とも横ナデ後に外面下半および底部にへラ削り。胎土・焼成は良好で明褐色を呈する。5の坏は内外面とも横ナデ後、内面には暗文、外面下半にはへラ削り。胎土は精選され焼成も良好。10の坏蓋は整形後に外面にへラ削り、内面はへラ磨き。胎土・焼成とも良好で明褐色を呈する。11も坏蓋で整形は10と同じで内面に一条の窪みが見られる。胎土・焼成とも良好で明褐色を呈する。12の皿は内外面とも横ナデ後、みこみ部放射状の暗文、底部には回転へラ削りが施される。胎土焼成とも良好で明褐色を呈する。

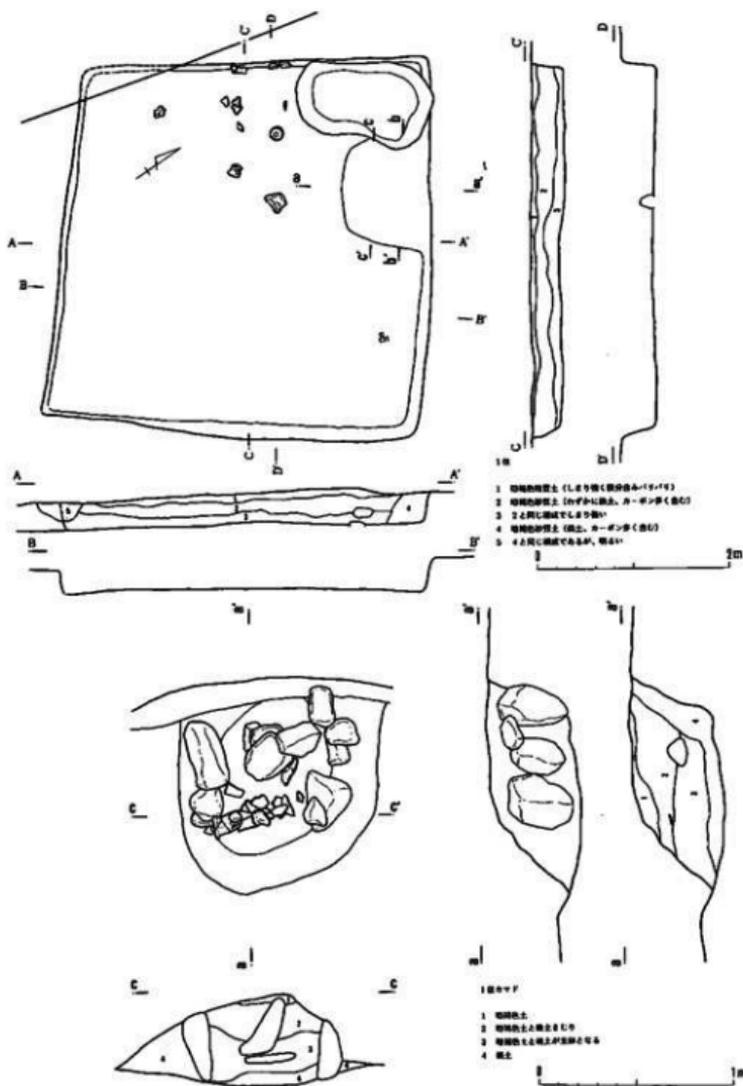
2. 2号住居址（第7図～第9図）

〔形状・規模〕東西380cm×南北350cmの隅丸方形プランを呈する。遺構は花崗岩砂層に掘り込まれ、覆土は暗褐色土。

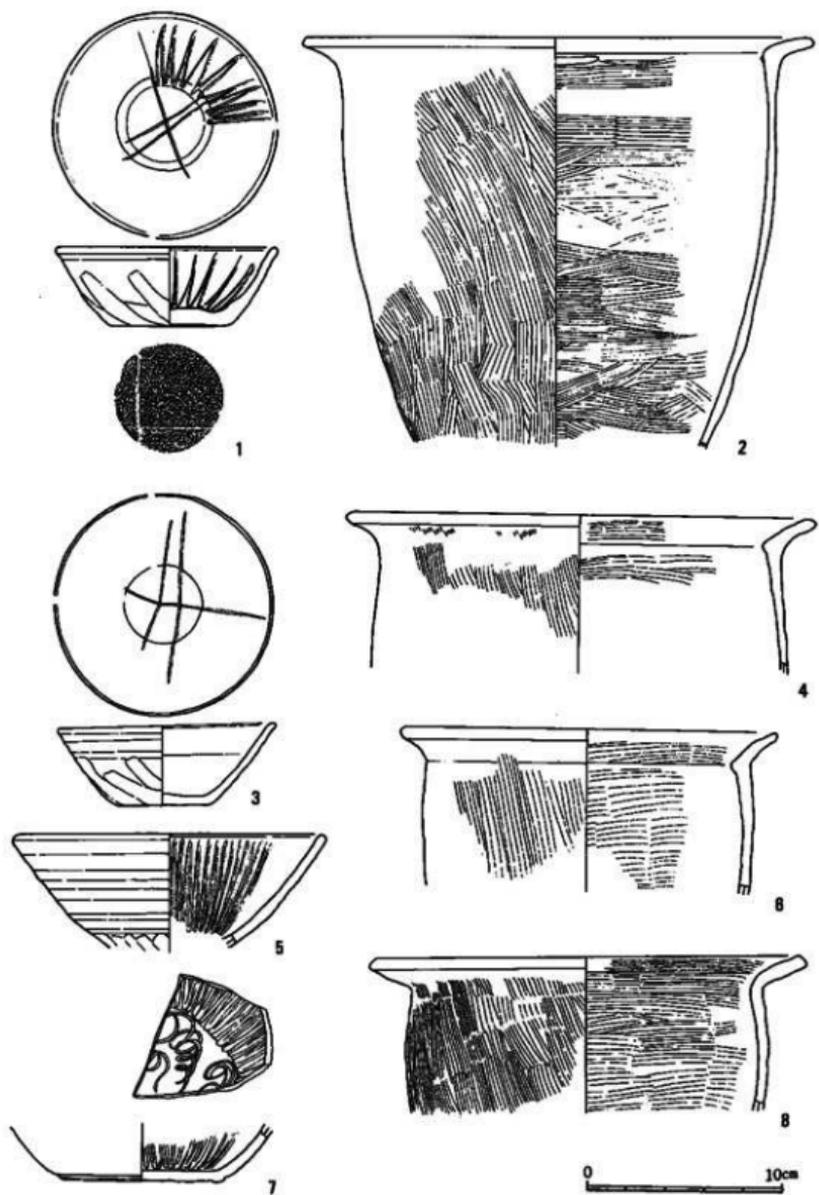
〔カマド〕北壁の中央よりやや西よりに位置する。袖石は左右とも2枚ずつ平石が残存している。炊き口は幅60cm、カマド底面には厚さ5cmほどの焼土が形成されている。掘り方は南北148cm東西80cm、深さ10cm。北側にわずかに煙道の痕跡が残る。

〔床面・壁〕床面は水平。壁高は20cm～25cmを測り、西壁・南壁はほぼ垂直に立ち上がる。

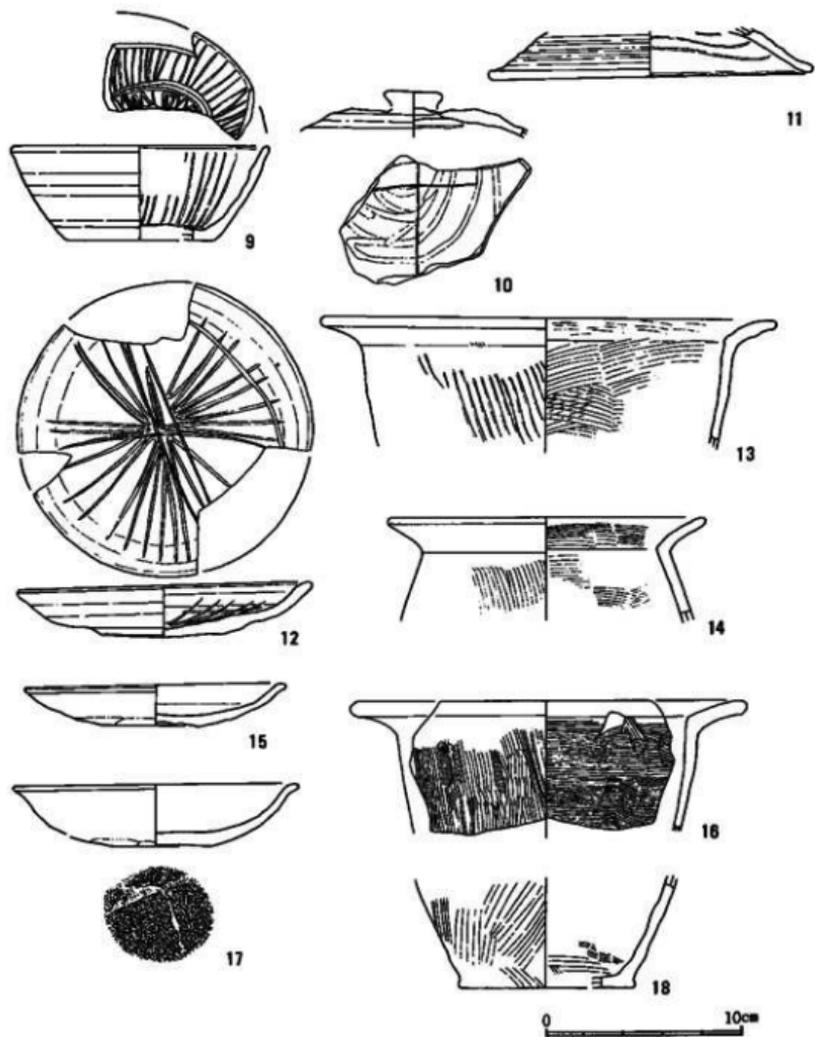
〔出土遺物〕平安時代の土師器が出土している。1の甕は内面には横方向の、外面には縦方向のハケ調整。胎土は精選され焼成も良好である。5の坏は内外面とも横ナデ調整、外面下半底部はへラ削り。胎土は赤色粒子が多く焼成は良好。6の坏は内面黒色、内外面ともナデ調整、外面下半底部に回転へラ削り。胎土・焼成とも良好である。10の坏も内面黒色。内外面とも横ナデ後、内面には放射状暗文およびみこみ部には螺旋状暗文。外面下半および底部は回転へラ削り。胎土・焼成は良好。11の坏も内面黒色で調整方法および他は10と同じである。



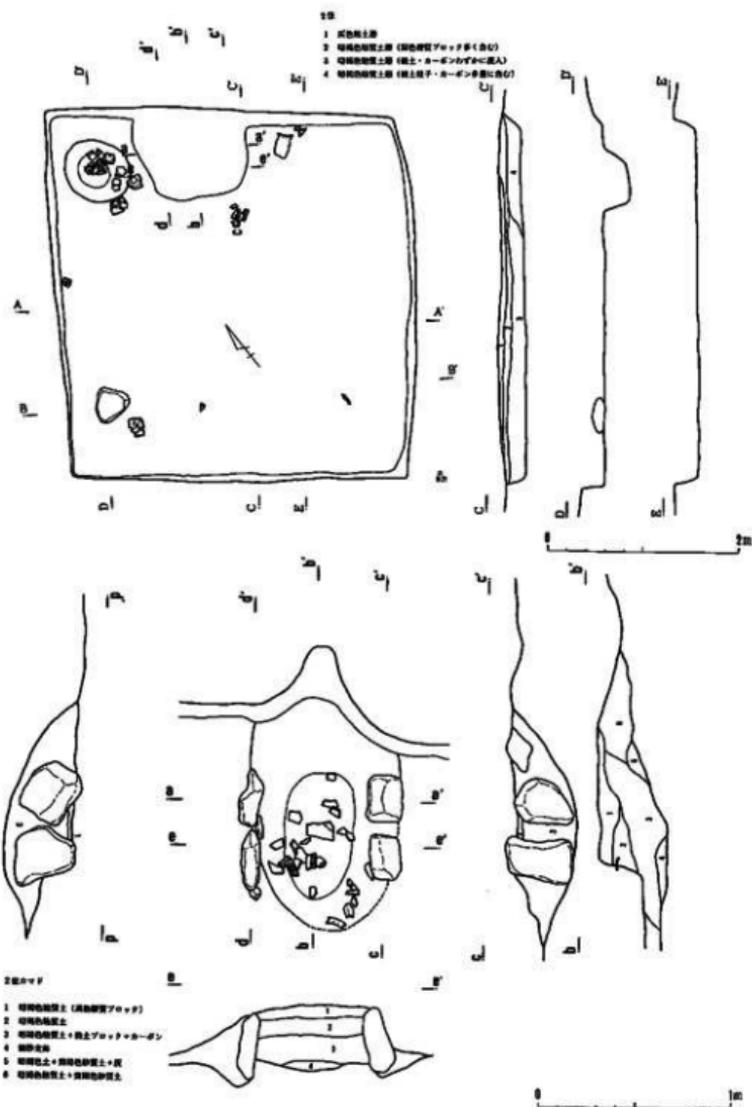
第4图 1号住居址平面图 (S=1/60)・岡カマド平面图 (S=1/30)



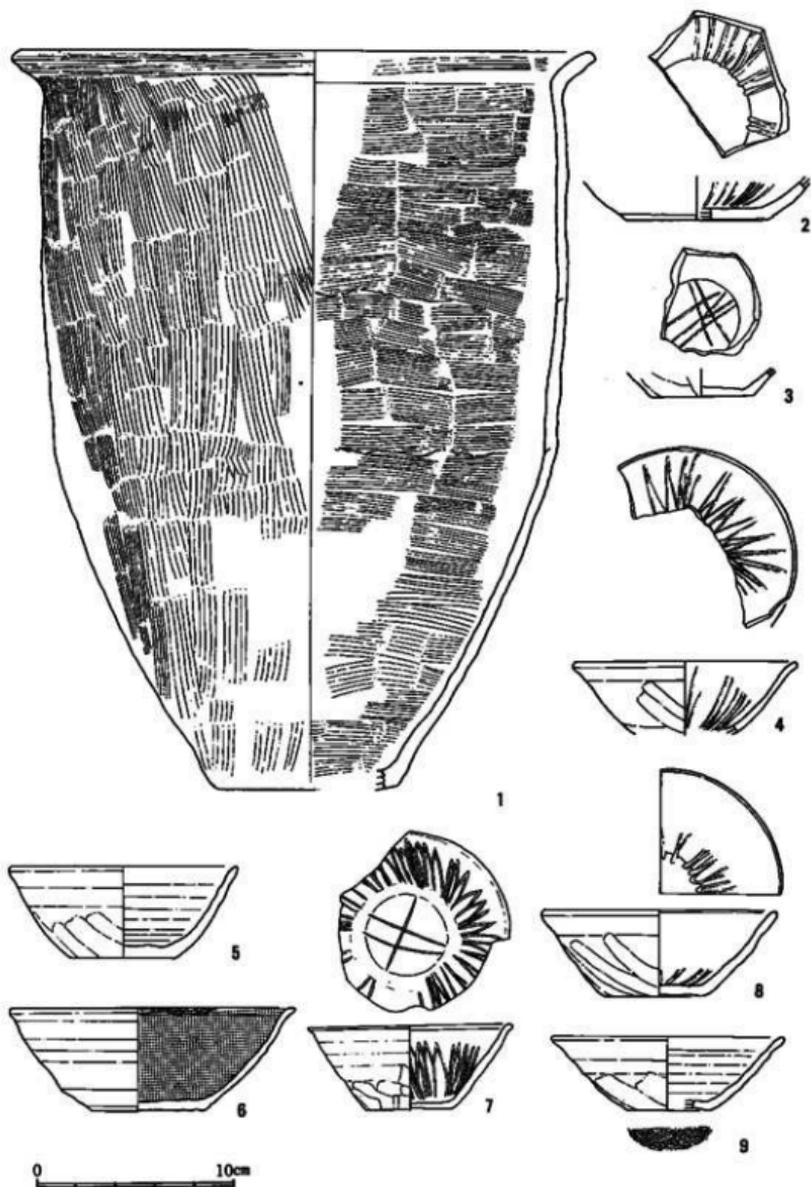
第5圖 1号住居址出土土器(1) (S=1/3)



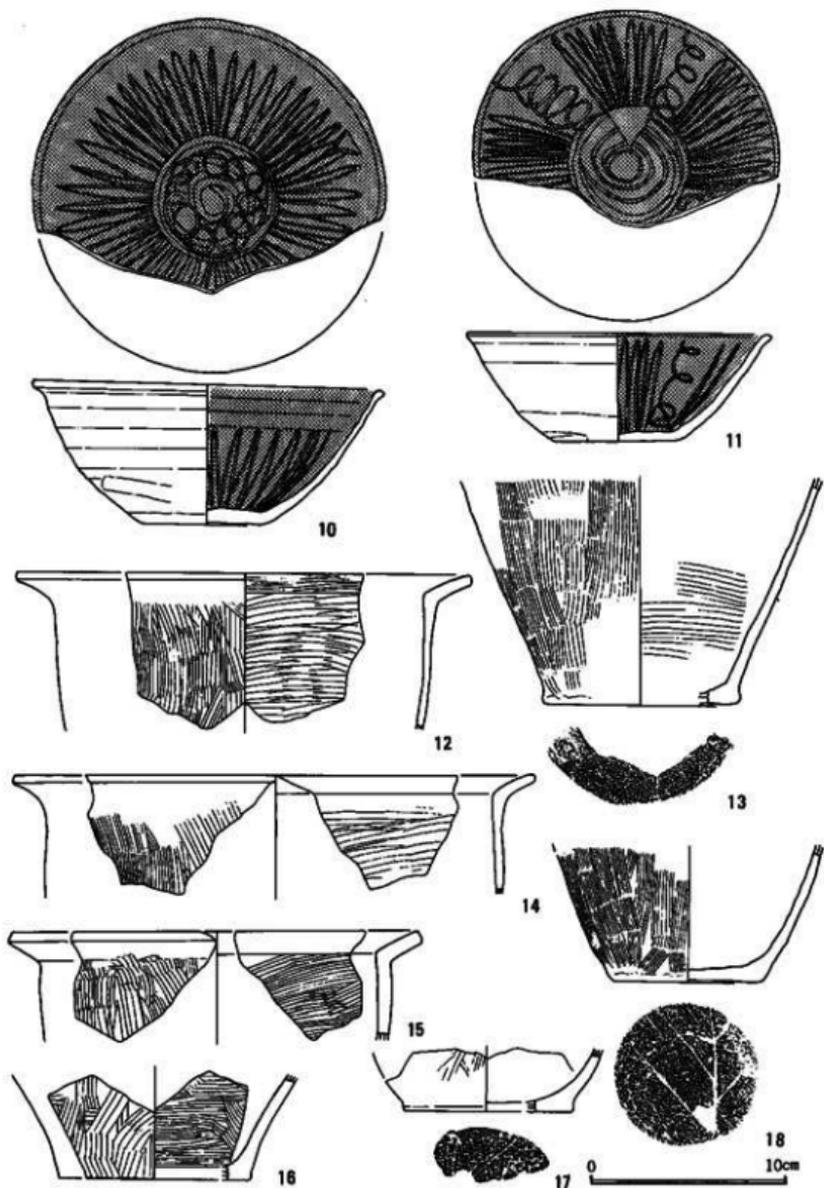
第6图 1号住居址出土土器(2) (S=1/3)



第7図 2号住居址平面図(S=1/60)・両カマド平面図(S=1/30)



第 8 图 2 号住居址出土土器(1) (S=1/3)



第9圖 2号住居址出土土器(S=1/3)

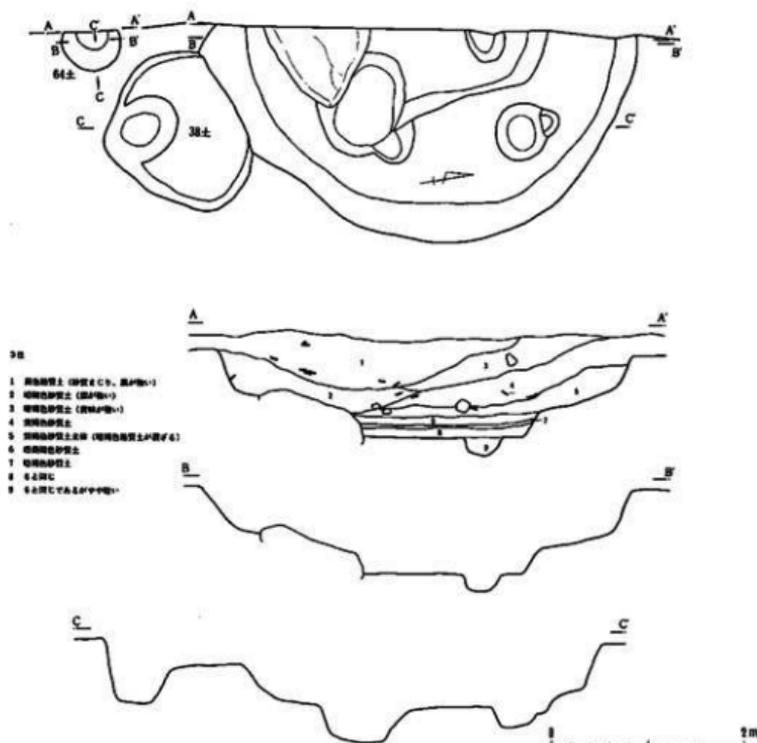
3. 3号住居址 (第10図・第11図)

〔形状・規模〕住居址の西側半分が調査区域外であるため、確実なことは不明である。発掘できた範囲で推定できるのは直径約400cmの円形プランを呈するものと思われる。

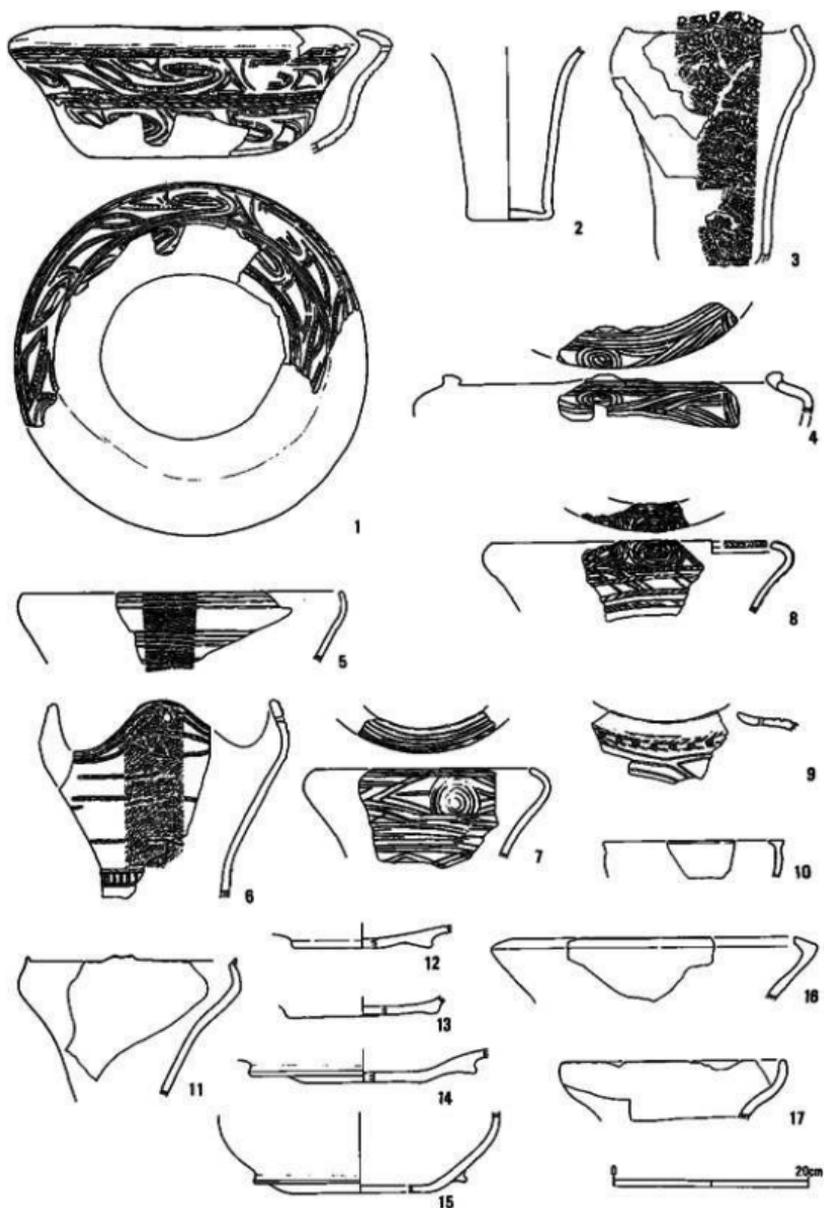
〔床面・壁〕床面は軟弱であり住居址中心部分が最も深くて壁に近づくにつれてあがっていく掘り鉢状を呈している。途中に一段テラスが見られる。しかし壁自身は垂直に近い角度で立ち上がっており約50cmの高さを測る。

〔柱穴〕柱穴と考えられるものが2基検出された。直径が約30cmのものと約20cmのものと共に深さは10cmほどであり、やや浅い。

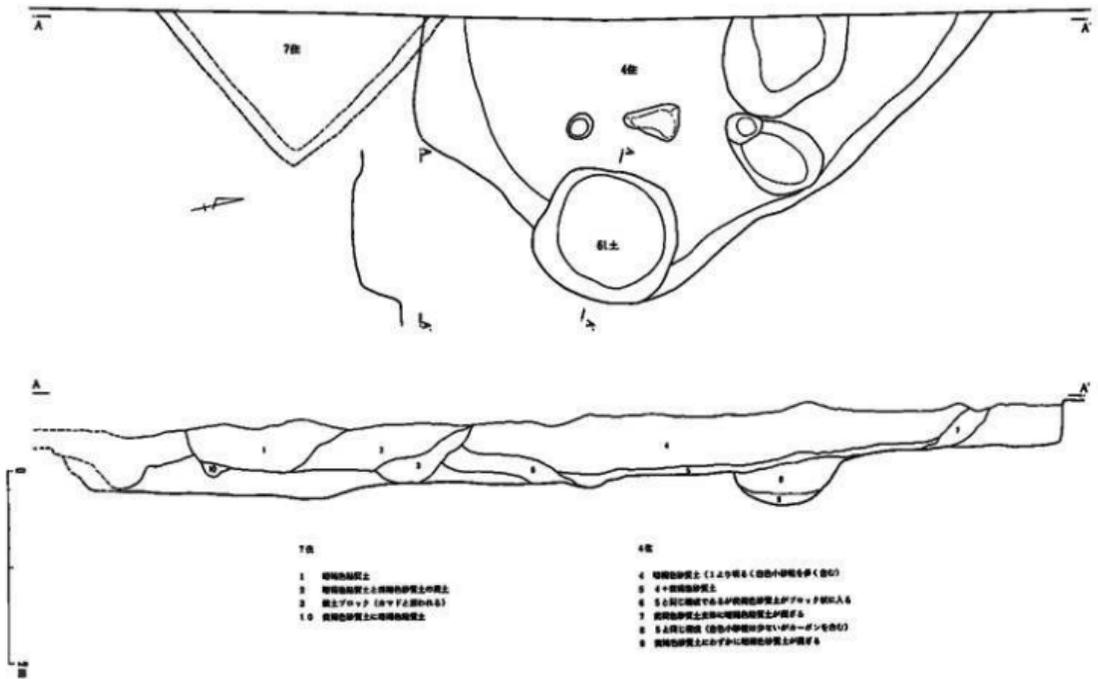
〔出土遺物〕諸磯b式土器がまとめて出土している。入組木葉文の特徴を残す有孔土器(1・9)、深鉢形土器では集合沈線文土器(4・7)、浮線文土器(6)など諸磯b式でも中間段階と



第10図 3号住居址平面図 (S = 1/60)



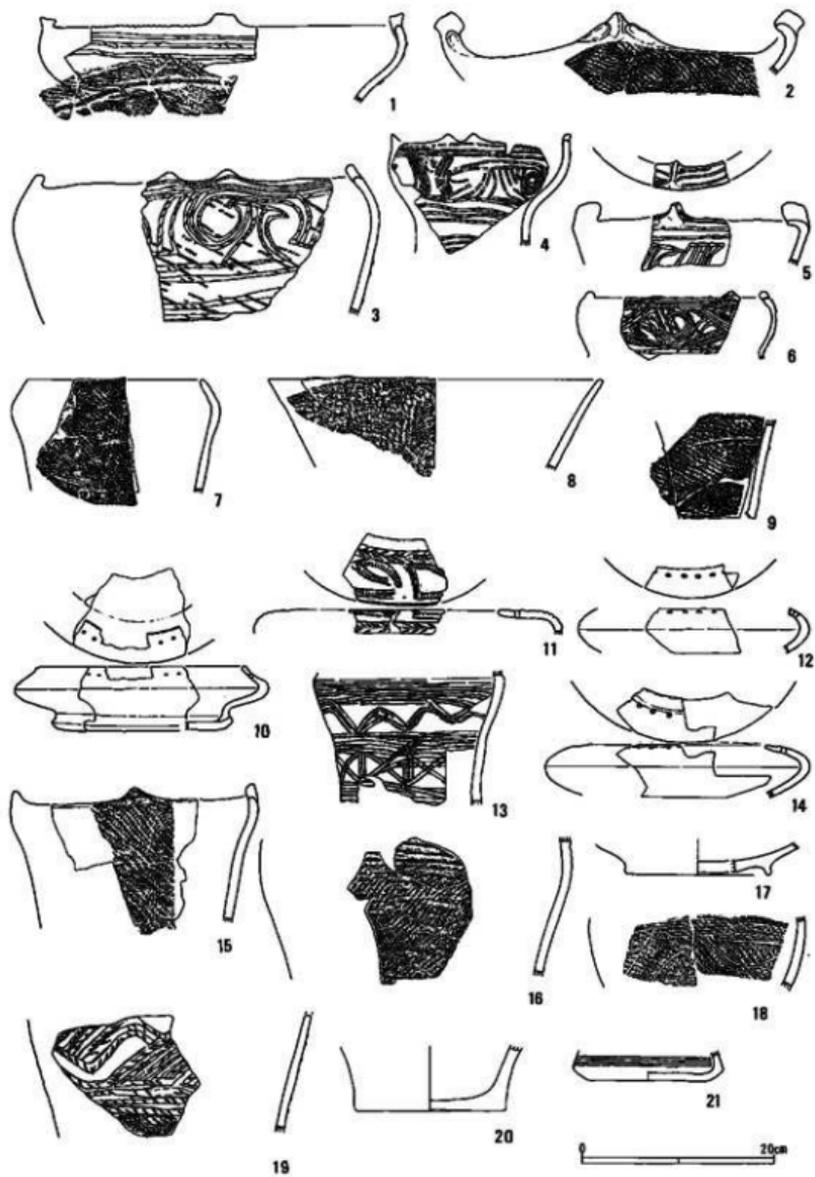
第11圖 3号位遗址出土土器(S=1/6)



第12圖 4号住居址・7号住居址平面図 (S=1/60)

- 7号
- 1 暗褐色砂土
 - 2 暗褐色砂土に暗褐色砂土の塊上
 - 3 黄土ブロック (S Y Fと類似の形)
 - 4 黄褐色砂土に暗褐色砂土

- 4号
- 4 暗褐色砂土 (1より粗く (灰色小砂粒を多く含む))
 - 5 4+黄褐色砂土
 - 6 5と同じ組成であるが黄褐色砂土がブロック状に入ら
 - 7 暗褐色砂土中に暗褐色砂土の塊が
 - 8 5より粗く (灰色小砂粒が少い) (ローレンゼン)
 - 9 暗褐色砂土にわずかに暗褐色砂土が混ざる



第13图 4号住居址出土土器(S=1/6)

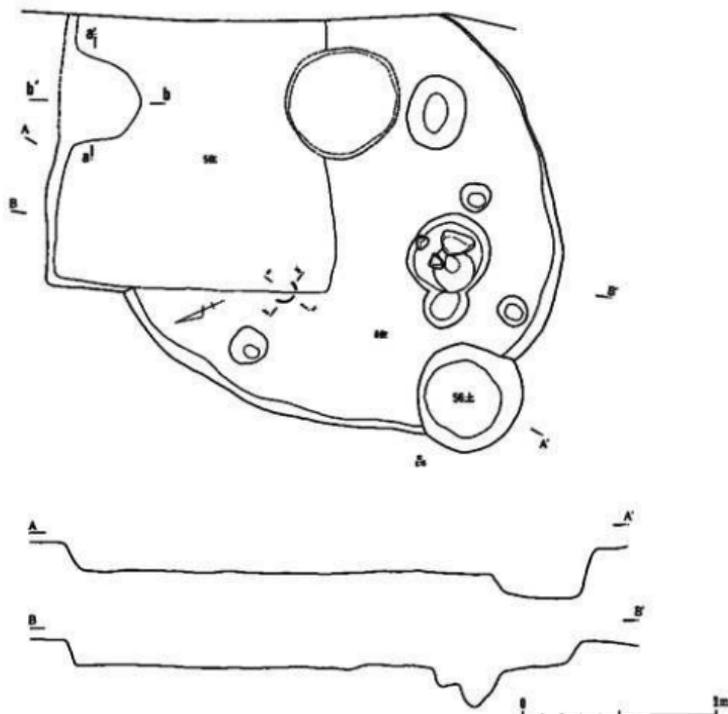
考えられている様相を示すものである。

4. 4号住居址 (第12図・第13図)

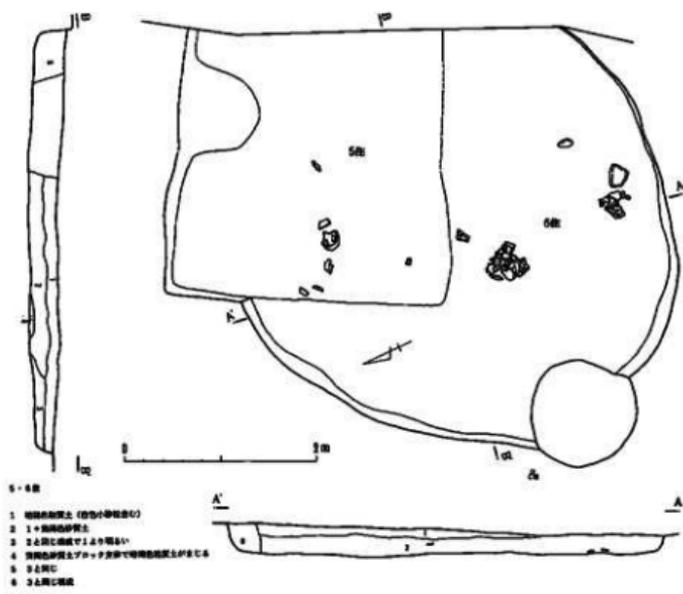
〔形状・規模〕住居址の西側半分が調査区域外であるため正確な形状は不明であるが、南北約600cm×東西約450cmほどの楕円形プランを呈するものと思われる。住居南東部分を61号土坑に切られている。

〔床面・壁〕床面は平坦でほぼ水平である。しまりはない。壁は緩やかに立ち上がり、30cm～40cmの高さを測る。

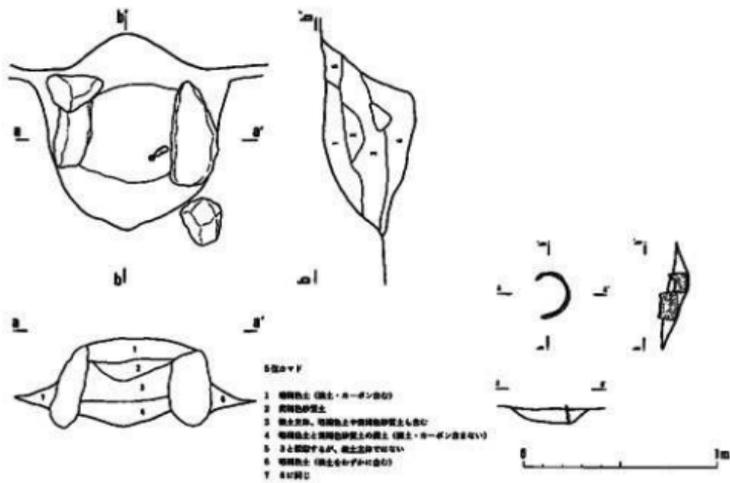
〔柱穴〕柱穴と思われるピットが2基検出された。30cm×40cmで深さが36cmのものが1基、30cm×25cmで深さが20cmのものが1基で、180cmの距離を隔てている。



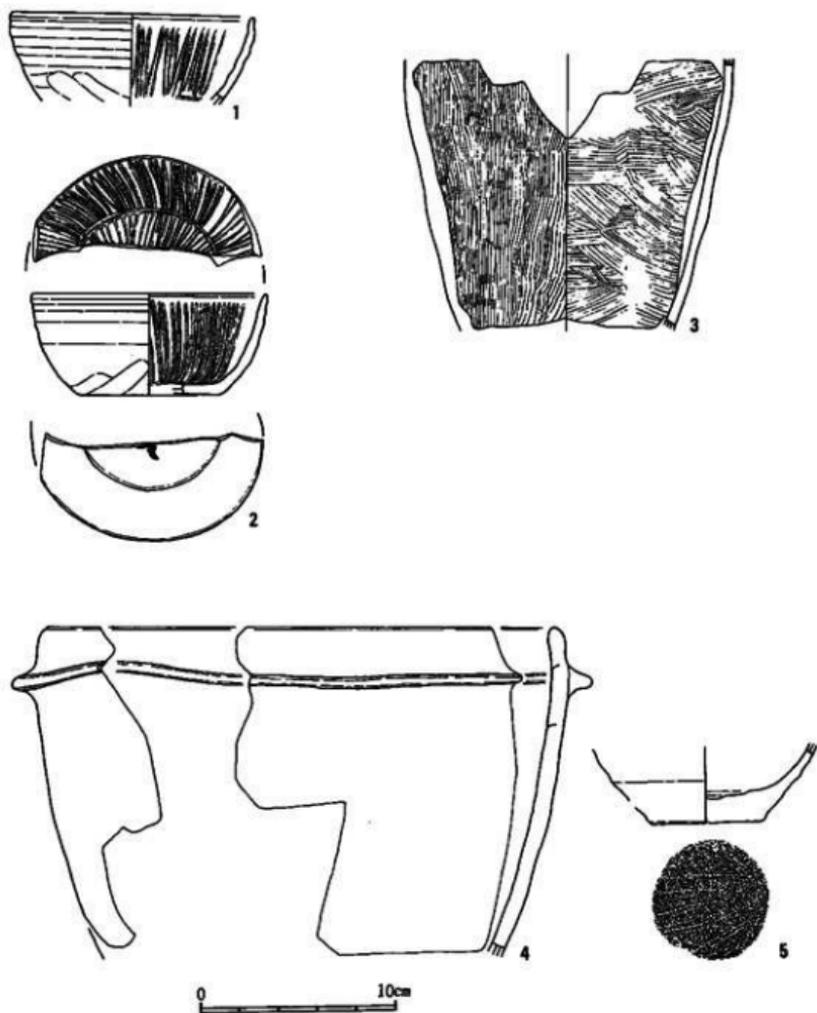
第14図 5号住居址・6号住居址平面図 (S = 1/60)



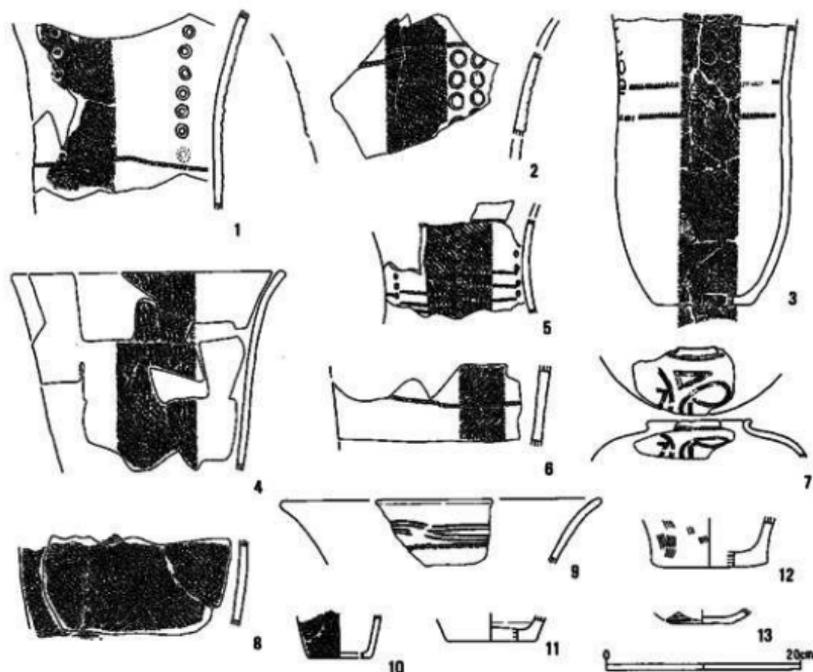
第15図 5号住居址・7号住居址遺物出土状態 (S=1/60)



第16図 5号住居址カマド平面図・6号住居址埋設土器平面図 (S=1/30)



第17圖 5号住居址(1~3)・10号住居址(4・5)出土土器(S=1/3)



第18図 6号住居址出土土器 (S=1/8)

〔出土遺物〕3号住居址と同様に諸磯b式土器がまとめて出土している。深鉢形土器は浮線文土器と有孔土器が多く見られる。有孔土器は無文のものが量的に際だっている点特徴的である。

5. 5号住居址 (第14図～第17図)

〔形状・規模〕東壁は調査区域外に延びているため未発掘。一辺300cm前後の方形プランを呈するものと思われる。

〔カマド〕カマドは北壁に設けられている。袖石は左右とも一枚の平石が良好に残存している。炊き口は幅50cmほどで、カマド全体の掘り方は100cm×90cmを測る。

〔床面・壁〕床面はほぼ水平で部分的に張り床が確認できた。壁は住居址の北壁の一部が残存しているだけであるが、ほぼ垂直に立ち上がり高さは30cmを測る。

〔出土遺物〕平安時代の土師器が出土している。1の坏は内外面ともナゲ調整、内面は暗文、外面下半にはヘラ削り。胎土も緻密で焼成も良好。明褐色を呈する。2の坏は内外面とも横ナゲ後、内面は非常に細かい暗文、外面下半はヘラ磨き。底部には判読不明の墨書。3はカマド内出土の甕で、内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整。胎土・焼成とも良好で褐色を呈する。

6. 6号住居址（第14図～第16図・第18図）

〔形状・規模〕住居址の東側が5号住居址により切られているとともに、調査区域外に延びているため全体の正確な形状・規模は不明である。南北軸より東西軸が長い楕円形プランと予想される。南北軸は450cmを測る。

〔床面・壁〕床面は花崗岩砂層のため不明瞭である。壁高は5cm～20cmを測る。

〔柱穴〕柱穴と思われるピットが2基検出されている。40cm×50cmで深さが40cmほどのものと、40cm×35cmで深さが40cmのものである。

〔出土遺物〕諸磯a式土器がまとめて出土している。円形刺突文の深鉢形土器が特徴的である（1～3・5）。器形については、いずれも口縁がラップ形に開くものであると推測される。諸磯式には例が少ない壺形土器(7)も見られる。

7. 7号住居址（第12図）

調査区域外の土層断面観察中にわずかな範囲に貼り床が確認され住居址の存在が明らかになった。遺物も平安時代の土器の小片が出土したのみであった。プランはすべて推定である。

8. 8号住居址（第19図・第20図）

〔形状・規模〕住居址の西半分が調査区域外のため未発掘である。完掘されている東壁から推定すると一辺約650cmの隅丸方形プランを呈すると思われる。

〔床面・壁〕床面はほぼ水平であり、貼り床は認められなかった。壁高は約30cmであり、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。

〔柱穴〕主柱穴と思われるピットが3基確認されている。それぞれ直径は約60cm前後、深さは約60cm～90cmを測り、途中に段を持つ。他に南壁の中央部分の側に住居入り口に関連があると思われるピットが2基存在する。

〔出土遺物〕いずれも破片資料であるが、諸磯a式を多く出土している。口縁に半截竹管状の施工具によって押引連続刺突文が施されるもの(8)が特徴的であり、その他口縁以外にも施文される(6・7)。平行沈線間に爪形文を埋める例もある(10)。

9. 9号住居址（第21図）

〔形状・規模〕430cm×300cm前後の長方形プランを呈する。

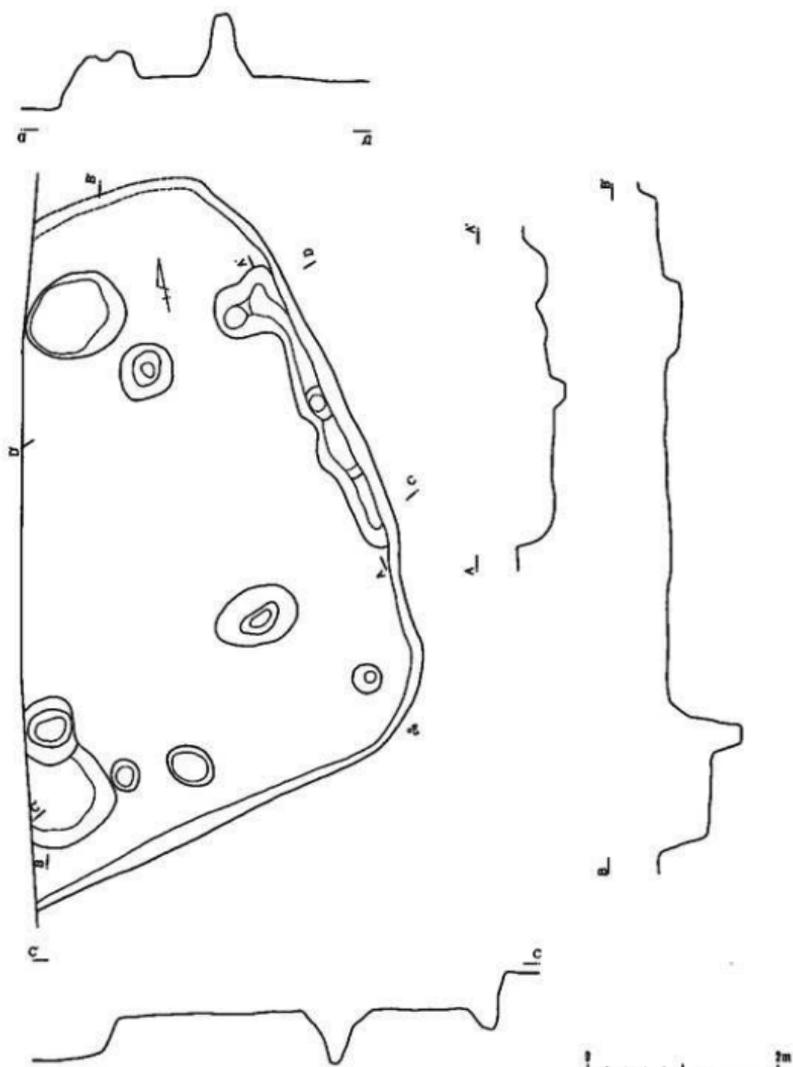
〔カマド〕確認できなかった。

〔床面・壁〕全体的に攪乱が著しく、壁は5cm～7cmの高さでしか確認できなかった。床面も住居址中央部分に貼り床が残るのみである。

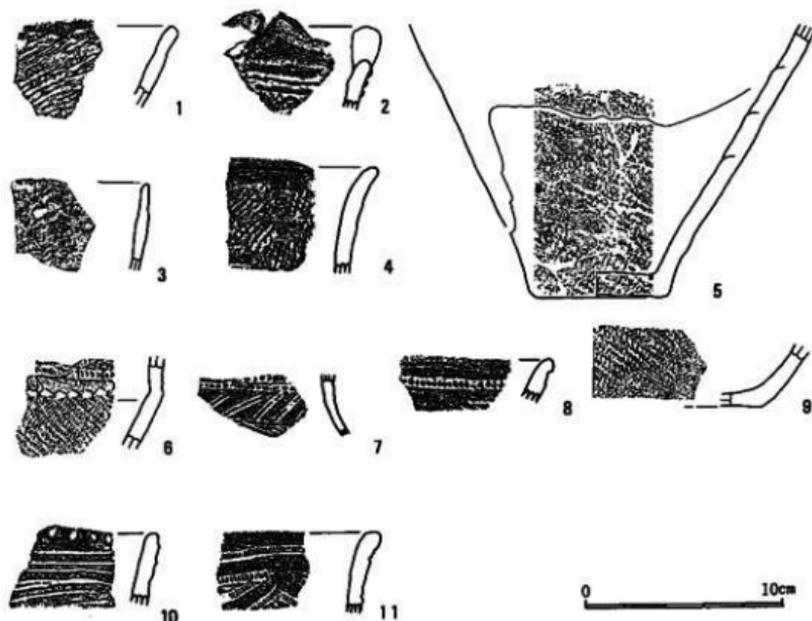
〔出土遺物〕平安時代の土師器の細片のみ出土している。

10. 10号住居址（第17図・第22図）

〔形状・規模〕西側半分が調査区域外のため未発掘である。東壁から推測すると一辺約420cmの



第19图 8号住居址平面图 (S=1/60)



第20図 8号住居址出土土器 (S=1/6)

隅丸方形プランを呈するものと思われる。花崗岩砂層に掘り込まれている。

〔カマド〕住居址の南東隅に設けられている。数多くの石と多量の粘土を使用している。左袖石や少し移動しているものの天井石がよく残っている。底面には厚さ10cmほどの焼土が形成されており極めて硬く焼けている。覆土中からクリの炭化物を出土している。

〔床面・壁〕カマド付近に貼り床がみられる。床面はほぼ水平で軟弱である。壁高は30cm～35cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。

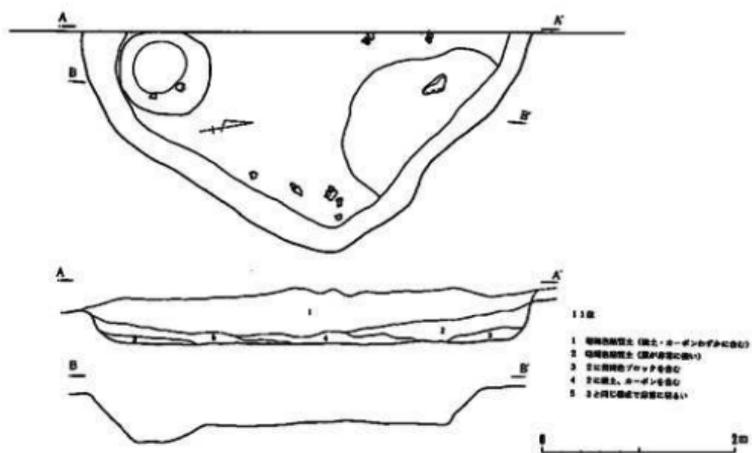
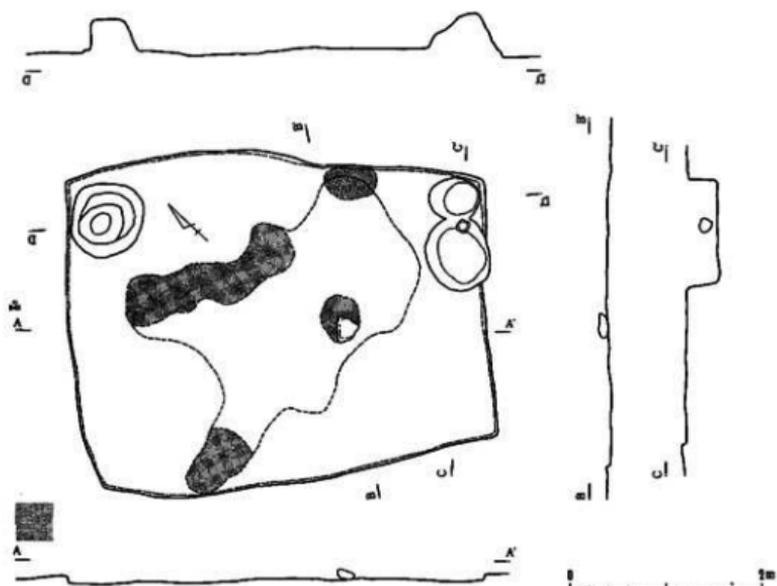
〔出土遺物〕平安時代の土器器が出土している。4はカマド内出土の羽釜。内外面は横ナゲ調整、胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で褐色を呈する。5は坏の底部。内外面とも横ナゲ調整、胎土はやや粗く砂粒が多く焼成は良好。

11. 11号住居址 (第21図・第28図)

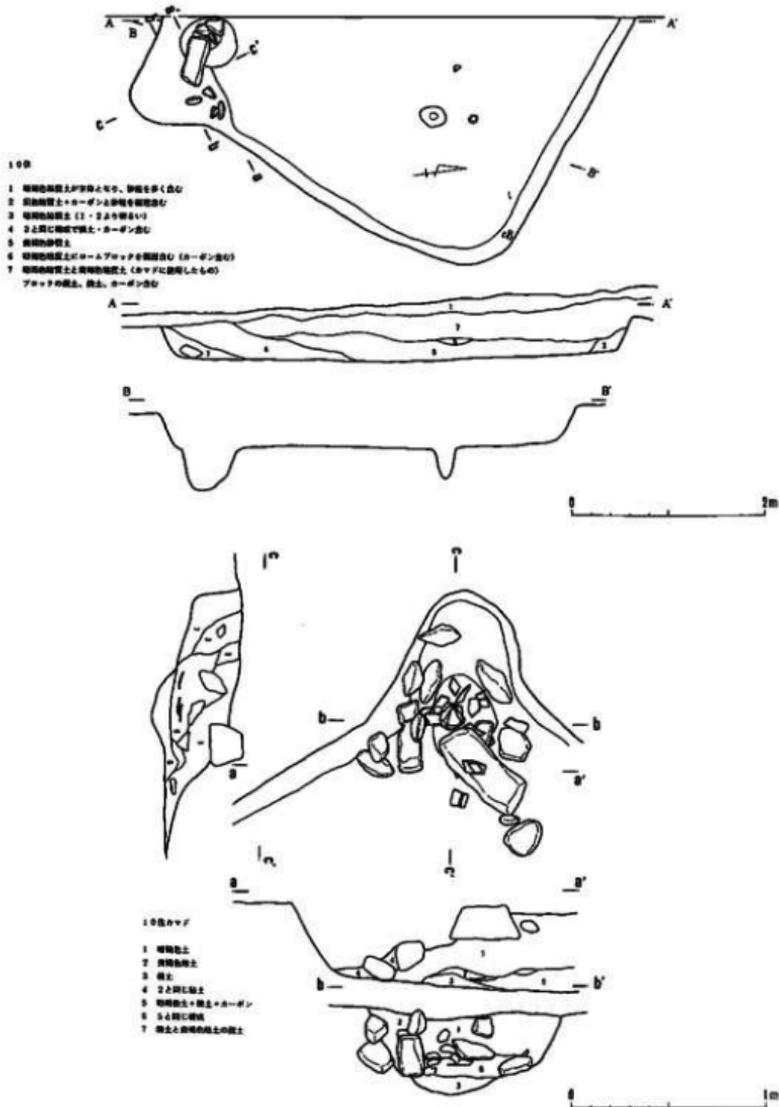
〔形状・規模〕西半分が調査区域外で未発掘であるため、南東方向の壁から推測すると、一辺約370cmの隅丸方形プランを呈すると思われる。遺構は花崗岩砂層に掘り込まれる。

〔カマド〕北東方向の壁のほぼ中央に設けられている。袖石と覆土はほとんど残っていない。140cm×95cmの範囲で10cmほどの厚さの覆土が残存している。

〔床面・壁〕床面はほぼ水平である。壁高は40cmを測り緩やかに傾斜している。



第21圖 9号住居址(上)・11号住居址(下)平面圖 (S=1/60)



第22図 10号住居址平面図 (S=1/60)・同カマド平面図 (S=1/30)

〔出土遺物〕平安時代の土師器が出土している。1の坏は内外面横ナデ調整、外面下半および底部は回転ヘラ削り。胎土焼成とも良好で明褐色を呈する。2の坏は内外面に横ナデ調整、外面下半はヘラ削り、底部は糸切り後ヘラ削り。内面には放射状の暗文がみられ、胎土・焼成とも1と同じである。3は小形の甕で内外面はナデ調整、胎土・焼成とも良好で丁寧な作りである。

12. 12号住居址（第23図～第25図・第28図～第30図）

〔形状・規模〕一辺約500cmの胴張り隅丸方形プランを呈する。13号住居址を切っている。

〔カマド〕カマドは東壁の中央より南側に設置されており、残存状態は良好である。袖石は左右とも数個の平石を利用したもので、天井石も壁際の一部分が残存している。炊き口の幅は80cm、カマドの中心部分に60cm×40cm、深さ8cmの掘り込みがみられる。

〔床面・壁〕床面は貼り床であり、ほぼ水平でしっかりしている。壁は北と西が垂直に近い角度で、東と南が緩やかに立ち上がる。壁高は25cm～50cmを測る。

〔出土遺物〕平安時代の土師器・須恵器を出土している。2の坏は内外面ともナデ調整。内面は暗文、外面および底部はヘラ削り。胎土は砂粒が多いが焼成は良好である。16は皿で内外面にナデ調整、内面みこみ部に放射状の暗文、外面下半および底部は回転ヘラ削り。胎土・焼成は良好で明褐色を呈する。19は甕で内外面ともナデ調整、内面はヘラ磨き。胎土・焼成は良好。21は甕で内面口縁部に横方向、外面は縦方向のハケ調整。胎土・焼成は良好で褐色を呈する。27は置きカマド破片で内面横方向、外面縦方向のハケ調整。胎土は砂粒を含み内面は褐色、外面は明褐色を呈する。28は須恵器四耳壺体部破片で内面横ナデ調整後ハケ削り、外面はタタキ。胎土は砂粒を僅かに含み、焼成は良好、褐色を呈する。

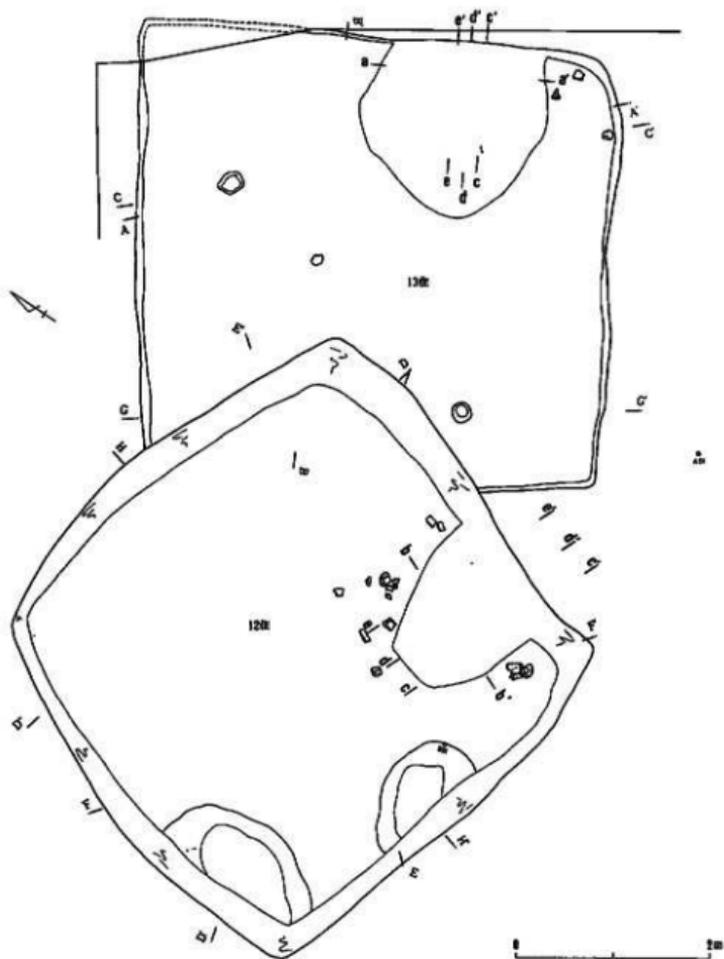
13. 13号住居址（第23図・第24図・第26図・第31図）

〔形状・規模〕住居址の北隅のわずかな部分が調査区域外にかかるとともに、南西部分を12号住居址に切られている。500cm×470cmほどの方形プランを呈する。南隅は直角コーナーであるが東隅は丸みをおびている。

〔カマド〕北東壁の中央よりやや南側に設けられている。袖石等の残存状態は良くない。掘り込みも浅く床面とほとんど同じレベルである。底面に厚さ約10cmで焼土が形成されている。

〔床面・壁〕床面は貼り床で、ほぼ水平。壁高は25cm～30cmを測り、比較的急な立ち上がりを見せている。

〔出土遺物〕奈良時代の土師器を出土している。1の坏は内外面横ナデ調整後、外面下半部および底部はヘラ削り。胎土・焼成は良好で明褐色を呈する。3の坏は内外面横ナデ調整後、内面は暗文、外面はヘラ磨き。胎土・焼成は良好で明褐色を呈する。8の高台坏底部破片は削り出しの高台で外面および下半部は回転ヘラ削り。胎土・焼成は良好で明褐色を呈する。10の甕は内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整。胎土は砂粒を多く含み焼成は良好、褐色を呈する。13の甕は内面はナデ調整、外面は縦方向のハケ調整。胎土は白色粒子を多く含み焼成は良好。



第23图 12号住居址(下)・13号住居址(上)平面图(S=1/60)

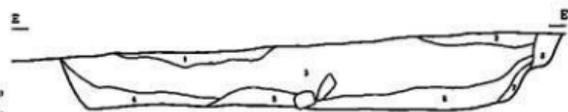
128

- 1 房基遗址 (M-128)
- 2 1层灰土墙, 夯土中夹草
- 3 2层灰土墙, 夯土中夹草
- 4 房基遗址 (M-128)
- 5 房基遗址 (M-128)
- 6 房基遗址 (M-128)
- 7 房基遗址 (M-128)
- 8 房基遗址 (M-128)



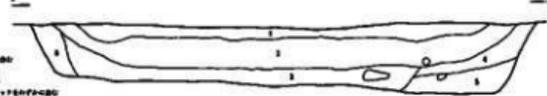
129

- 1 房基遗址
- 2 房基遗址
- 3 房基遗址 (M-129)
- 4 房基遗址 (M-129)
- 5 房基遗址 (M-129)
- 6 房基遗址 (M-129)
- 7 房基遗址 (M-129)
- 8 房基遗址 (M-129)

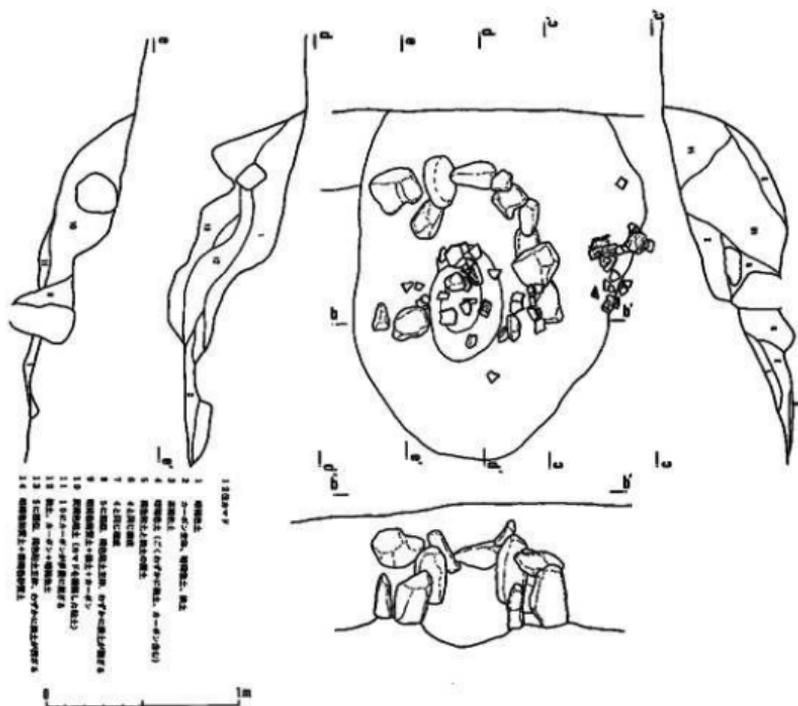


130

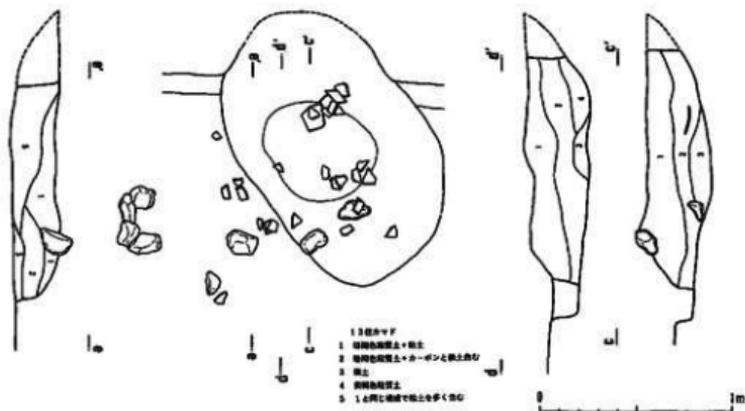
- 1 房基遗址
- 2 房基遗址
- 3 1层灰土墙, 夯土中夹草
- 4 房基遗址
- 5 1层灰土墙, 夯土中夹草
- 6 1层灰土墙, 夯土中夹草



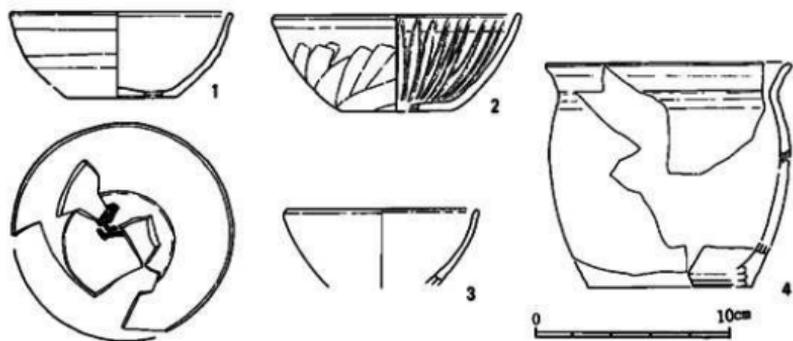
第24图 12号位居址·13号位居址断面图 (S=1/60)



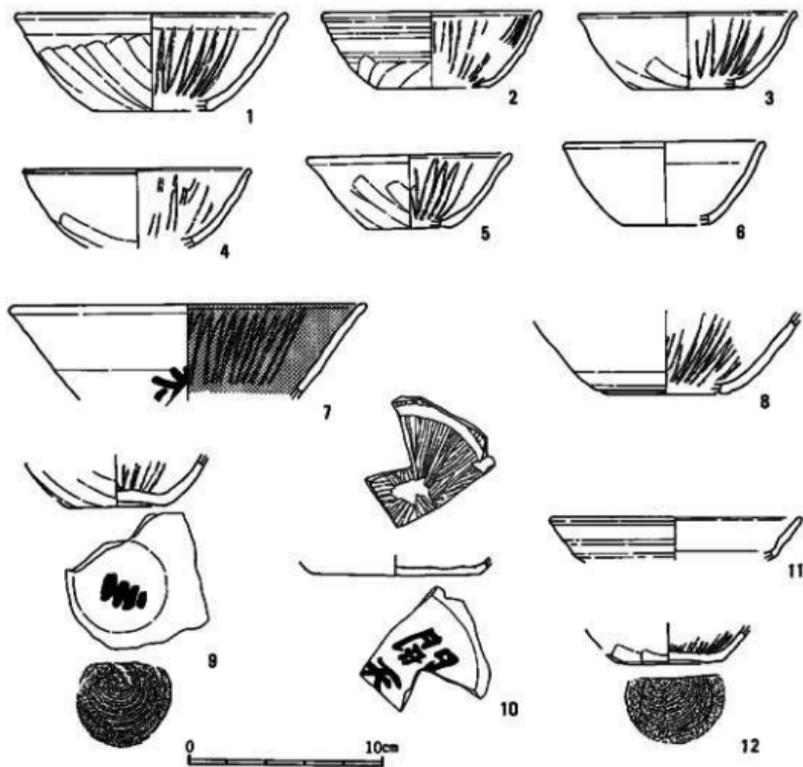
第25図 12号住居址カマド平面図 (S=1/30)



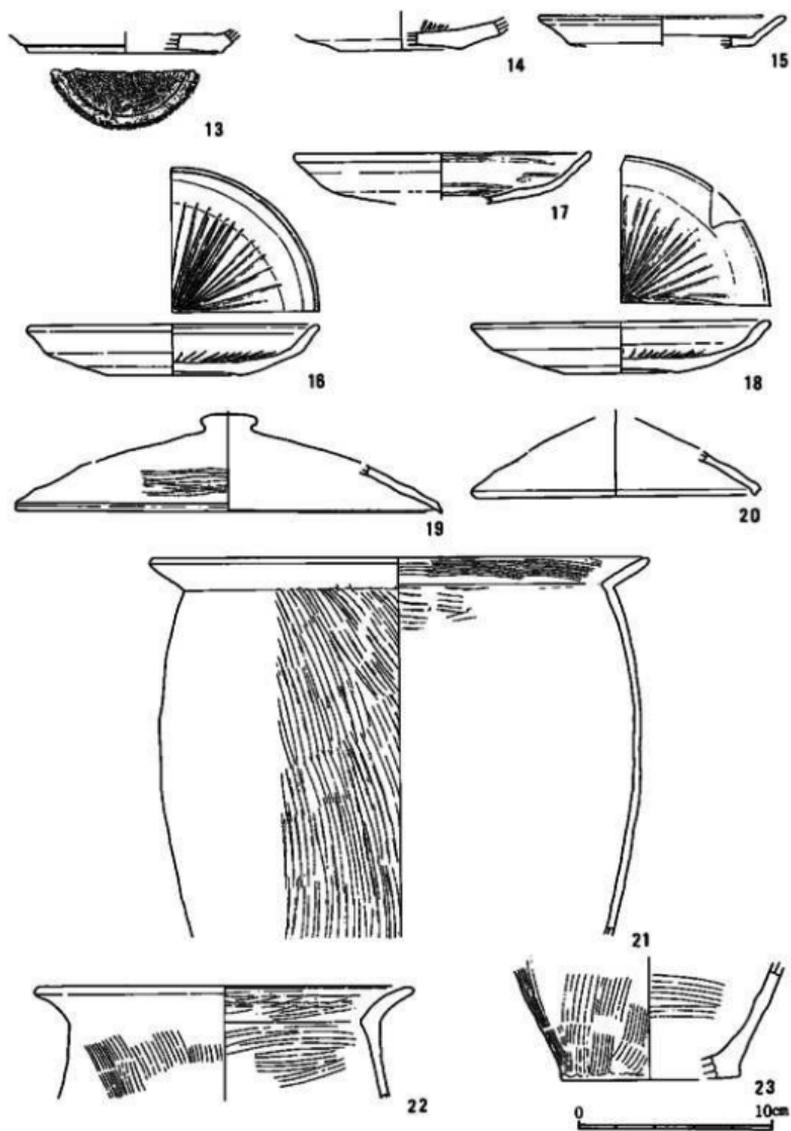
第26図 13号住居址カマド平面図 (S=1/30)



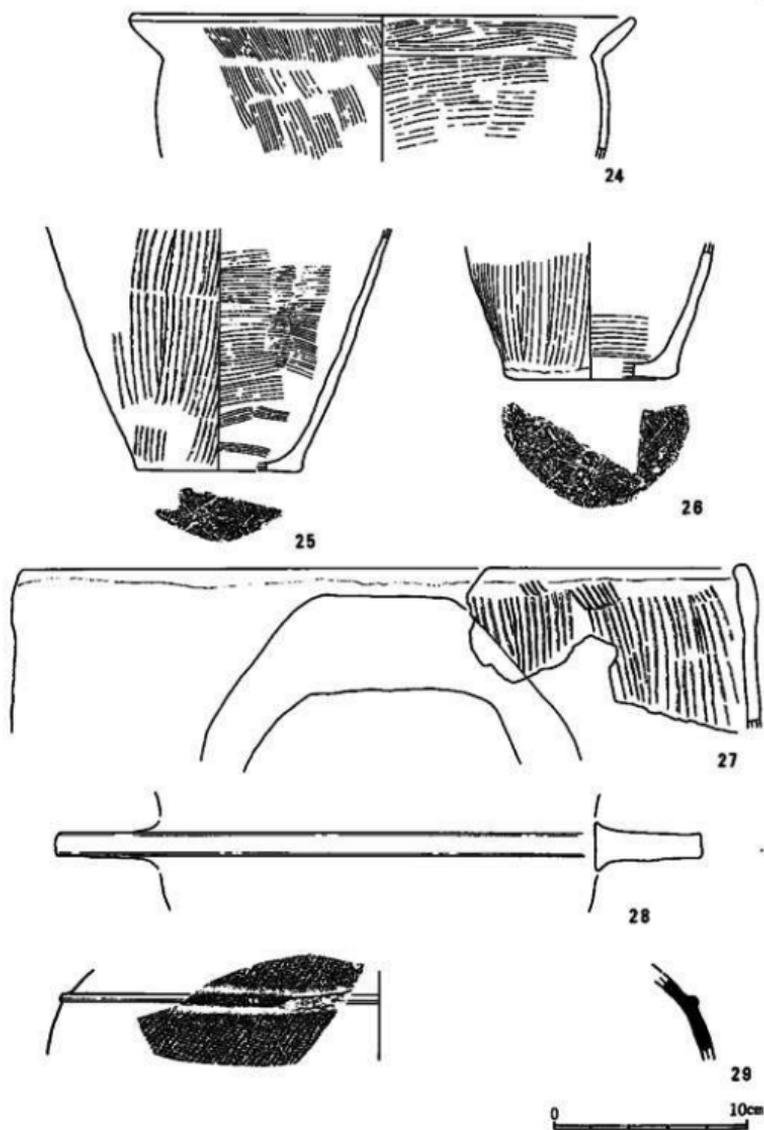
第27图 11号住居址出土土器 (S = 1/3)



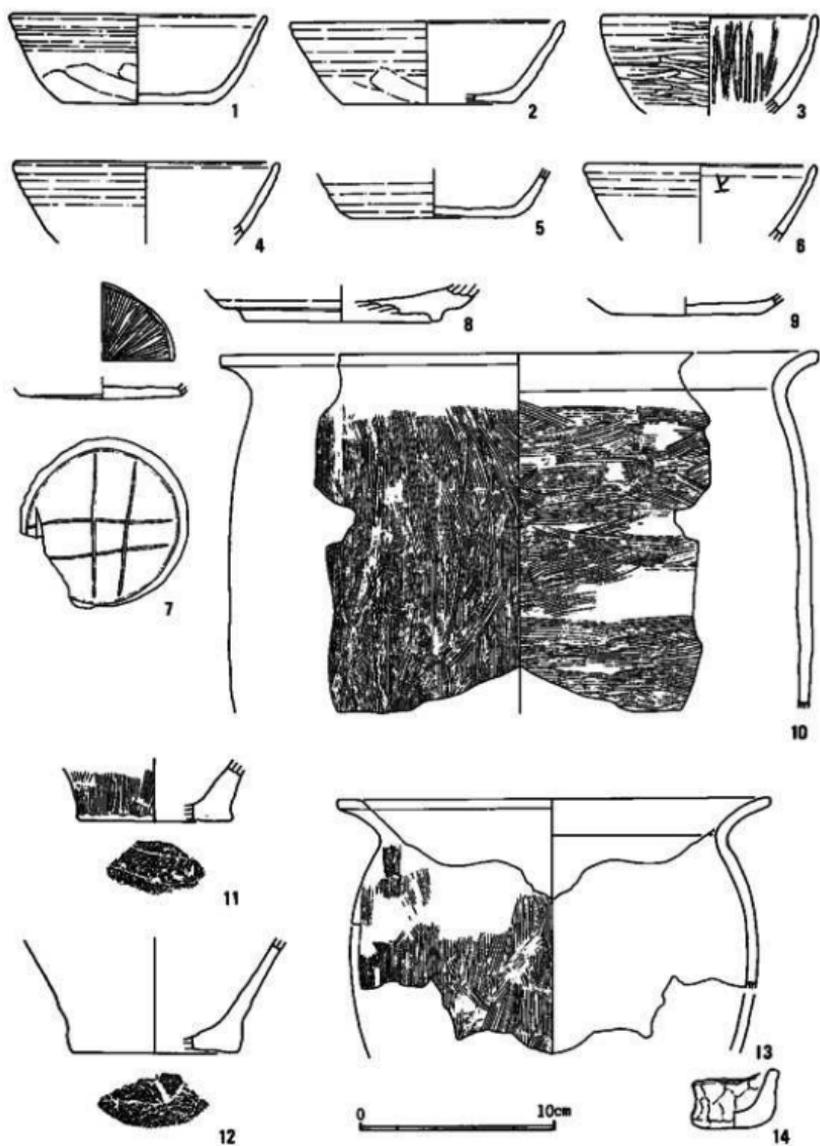
第28图 12号住居址出土土器(1) (S = 1/3)



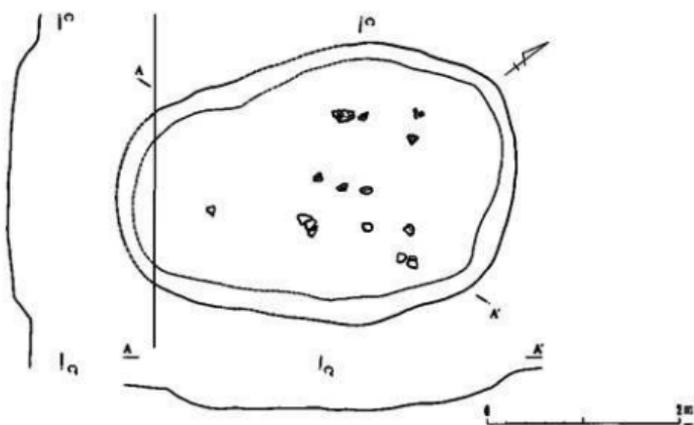
第29图 12号住居址出土土器切(S=1/3)



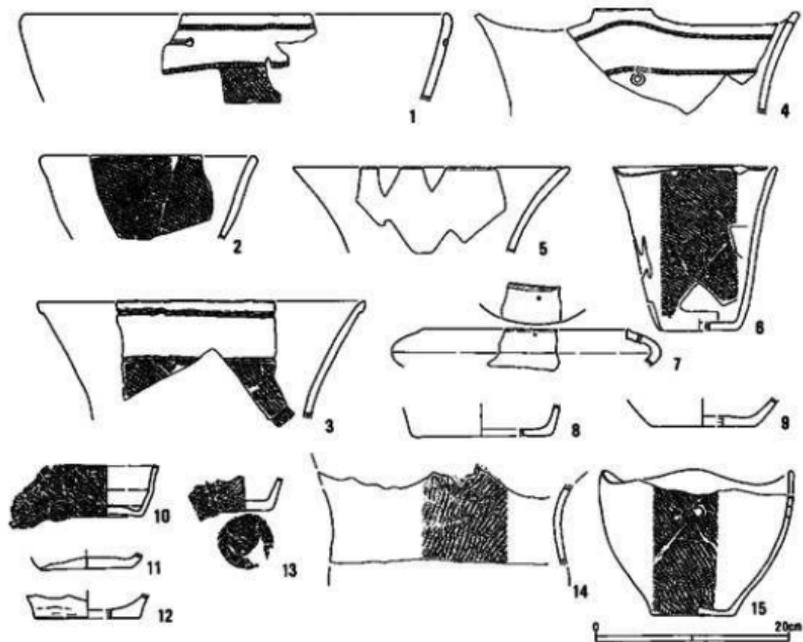
第30图 12号住居址出土土器(3) (S=1/3)



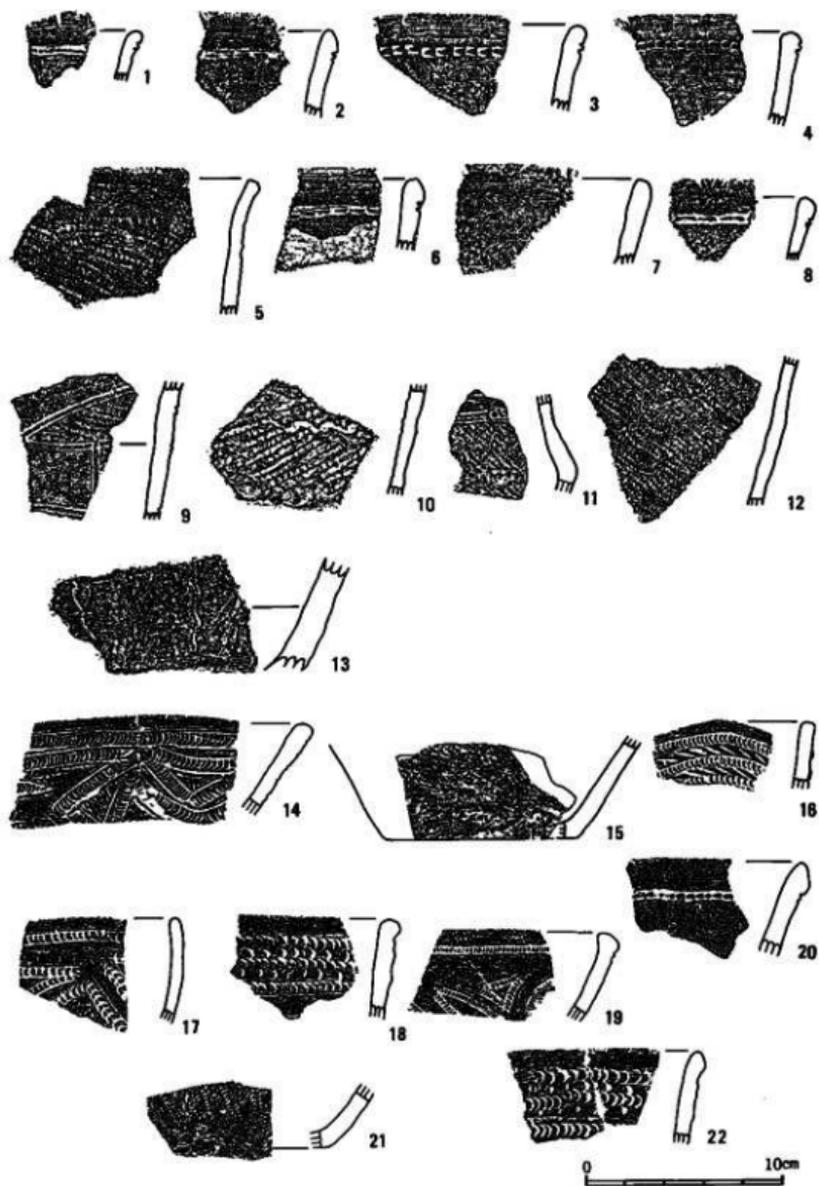
第31圖 13号住居址出土土器(S=1/3)



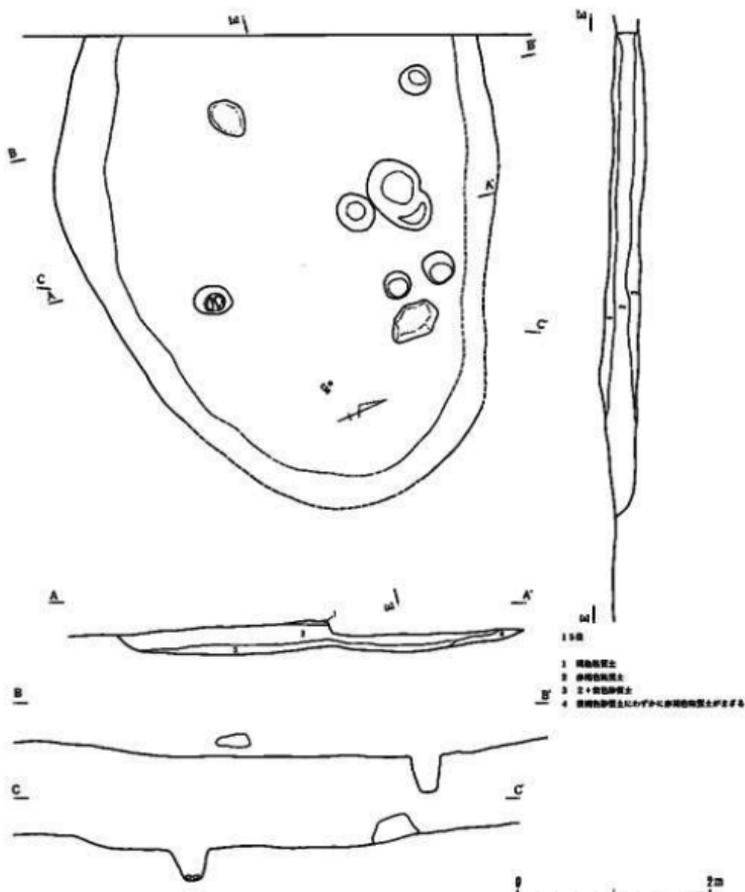
第32图 14号住居址平面图 (S=1/80)



第33图 14号住居址(1~9)·17号住居址(10~15)出土土器 (S=1/6)



第34图 14号住居址(1~13)·15号住居址(14~22)出土土器(S=1/3)



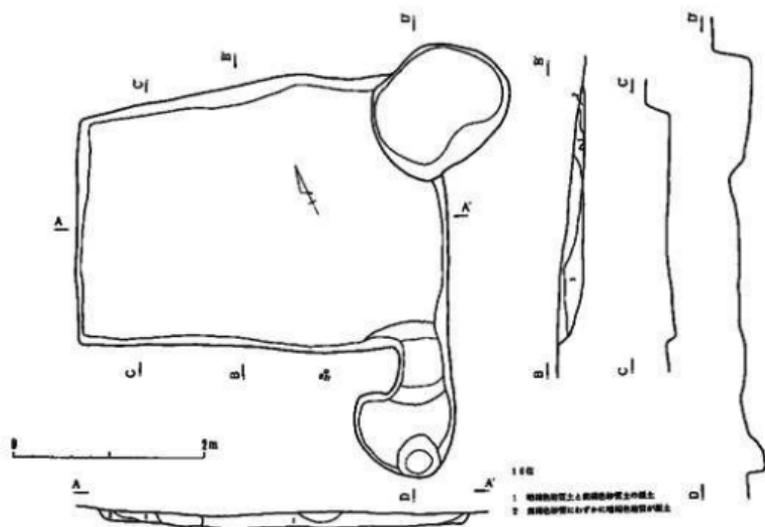
第35圖 15号住居址平面図 (S=1/60)

14の手捏ね土器は整形は雑で口縁は平坦ではない。内外面とも指頭による調整で、胎土は小砂粒を多く含む焼成は良好、褐色を呈する。

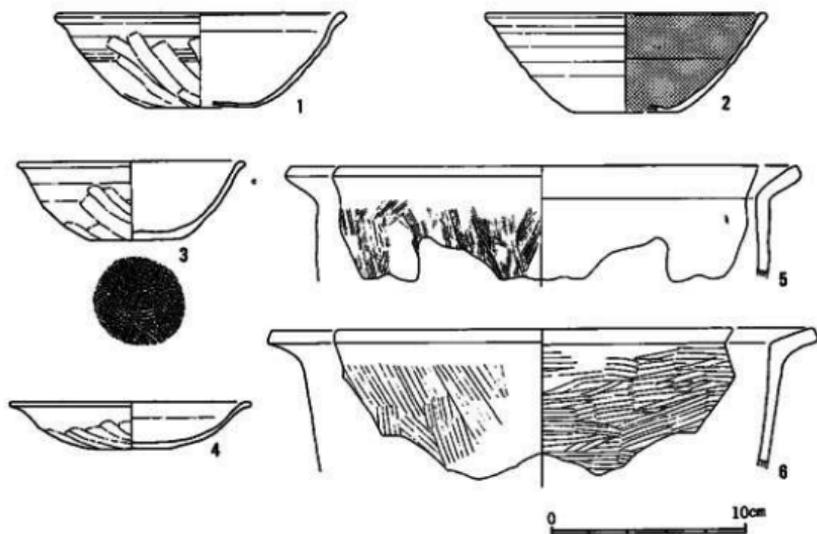
14. 14号住居址 (第32図・第33図)

〔形状・規模〕住居址の南側は市道建設等により削平・攪乱を受けているが、一部に壁が残り、おおよそのプランは確認できた。南北約400cm、東西280cmの楕円形プランを呈するものと思われる。

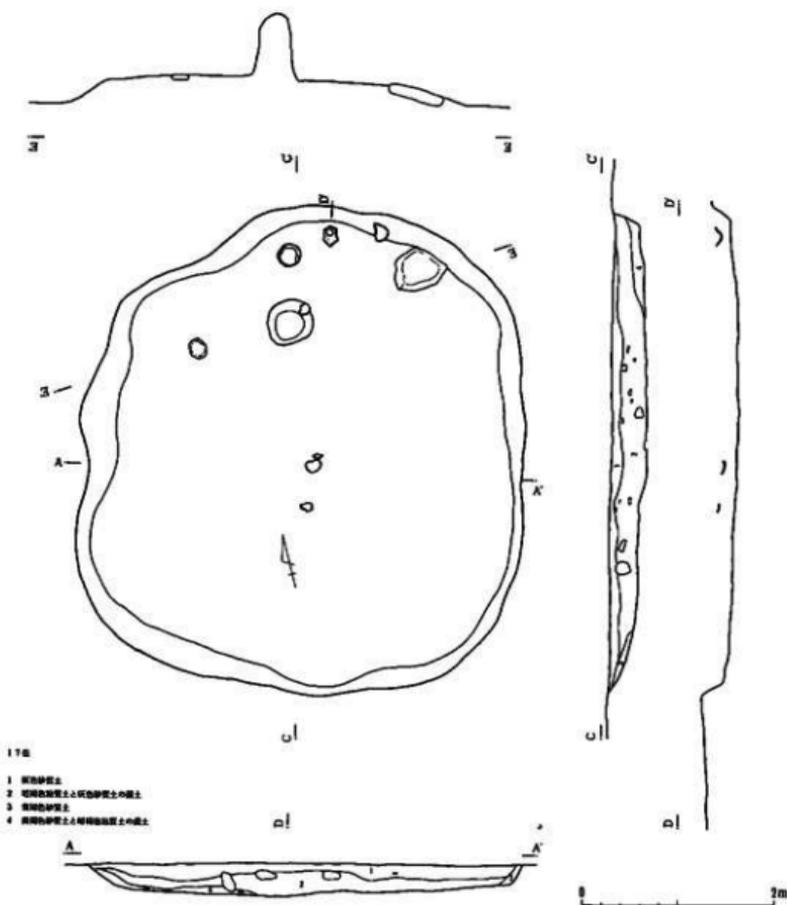
〔床面・壁〕床面は花崗岩砂層であるため、踏み固められた痕跡は確認できなかった。面も浅い皿状で住居址の中心が最も深い。壁は緩やかに立ち上がり高さは20cmほどである。



第36圖 16号住居址平面圖 (S=1/60)



第37圖 16号住居址出土土器 (S=1/3)



第38図 17号住居址平面図 (S=1/60)

〔出土遺物〕簡磯 a 式土器を出土している。浮線文による施文は全く見られず、施文は縄文及び半截竹管状施文具による沈線文のみで表現されている。口縁に半截竹管状施文具で押引連続刺突文を施すものが圧倒的に多い (第33図 1・3・4、第34図 1~4・6・8)。

15. 15号住居址 (第34図・第35図)

〔形状・規模〕周囲の擾乱が著しく正確なプランは不明であるが、長径550cm、短径450cmほどの楕円形プランを呈するものと思われる。

〔床面・壁〕床面は住居址中心部分が最も低く、外側へいくにしたがって徐々に高くなってお

り、壁と床面の境は明確ではない。床面は踏み固められた跡はなく、締まりはない。

〔柱穴〕柱穴と思われるピットが6基検出された。直径は35cmから60cmほど、深さは30cmから50cmを測る。住居址の一番南側に位置するピットには底面に15cm大の礎が2個見られた。あたかも人為的に並べられているようであった。

〔出土遺物〕踏碓a式土器を出土している。平行沈線間に爪形文を施すものが圧倒的に多い(14・16・17・19)。単純な爪形文(22)や押し連続刺突文(20)も存在している。

16. 16号住居址(第36図・第37図)

〔形状・規模〕東西約400cm、南北約300cmの長方形プランを呈するものと思われるが上部での攪乱が著しく推定の域をでない。北東隅で縄文時代の76号土坑を切っている。南東隅は攪乱により破壊されている。

〔カマド〕確認できなかった。

〔床面・壁〕床面はほぼ水平である。壁は攪乱により高さ10cmほどしか検出できなかった。

〔出土遺物〕2の坏は内面黒色で内外面とも横ナゲ後、外面下半部および底部にヘラ削り。胎土は精選されている。3の坏は内外面とも横ナゲ後、底部は糸切り後ヘラ削り。胎土は赤色粒子を多く含むが精選されている。4の皿は内外面横ナゲ、外面下半と底部はヘラ削り。胎土は精選され焼成も良好。6の壺は内面横方向、外面縦方向のハケ調整。胎土は金雲母を多く含むが精選されており、焼成は良好で明褐色を呈する。

17. 17号住居址(第38図・第38図)

〔形状〕不整形円形プランを呈しているが、隅丸方形ともとらえられる。直径あるいは一辺の長さは500cm前後である。花崗岩砂層に掘り込まれている。

〔床面・壁〕床面はほぼ水平で砂層を床面をしているため柔らかく締まりがない。壁は緩やかに立ち上がり壁高は25cmから30cmを測る。

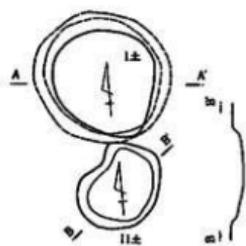
〔柱穴〕住居址中心からやや北よりに直径約45cm、深さ70cmのピットが存在するが、他には確認できなかった。

〔出土遺物〕踏碓a式土器と思われる土器を出土している。縄文による施文の土器のみが確認されている。

第2節 土坑とその出土土器

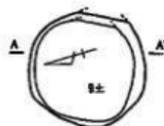
1. 土坑の時代(第39図～第47図)

獅子之前遺跡では77基の土坑が発見されているが、時代別では縄文時代が75基、弥生時代が1基(80号)、平安時代が1基(54号)である。



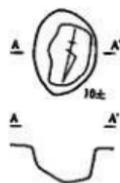
1土

- 1 埴輪造砂土 (彩色小砂粒)
- 2 埴輪造砂土 (埴輪造砂土の層上)
- 3 埴輪造砂土と埴輪造砂土の層上
- 4 2と埴輪の間にあり、2より粗い (埴輪造砂土の間にあり)
- 5 4と同じ。

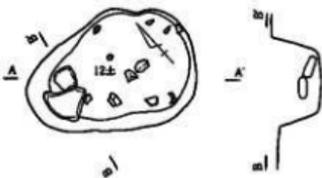


8土

- 1 埴輪造砂土
- 2 埴輪造砂土 (1より粗い)
- 3 埴輪造砂土
- 4 埴輪造砂土

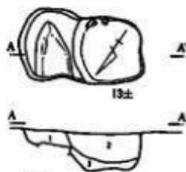


10土



12土

- 1 埴輪造砂土 + 埴輪造砂土
- 2 1と同じ (1より粗い)



13土

- 1 埴輪造砂土 + 埴輪造砂土
- 2 1と同じ粗度であるが埴輪造土
- 3 1と同じ

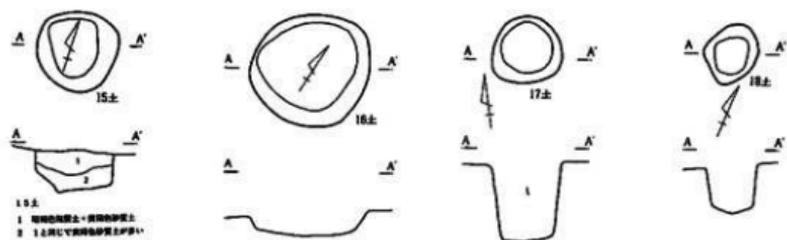


14土

- 1 埴輪造砂土 + 埴輪造砂土
- 2 埴輪造土
- 3 1と同じ粗度であるが埴輪造土の層上 (一處に、埴輪造のフツフ入る)

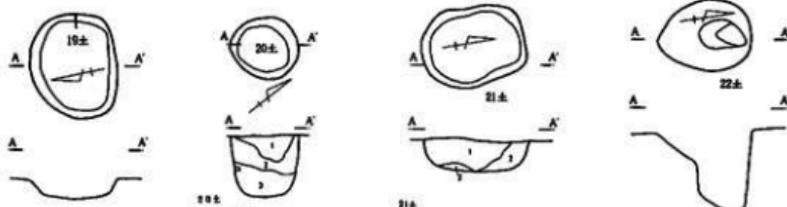
2m

第39圖 土坑平面圖(1) (S1/60)



15土

- 1 埴輪砂質土・埴輪砂質土
2 1土層にて埴輪砂質土が厚い

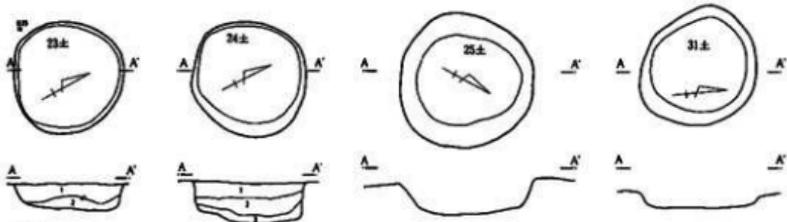


19土

- 1 埴輪砂質土
2 1・埴輪砂質土
3 2土層間の隙間であるが、埴輪砂質土が主層

21土

- 1 埴輪砂質土・埴輪砂質土 (全部にFやGの跡がある)
2 1と同一層式であるが埴輪砂質土が厚である



23土

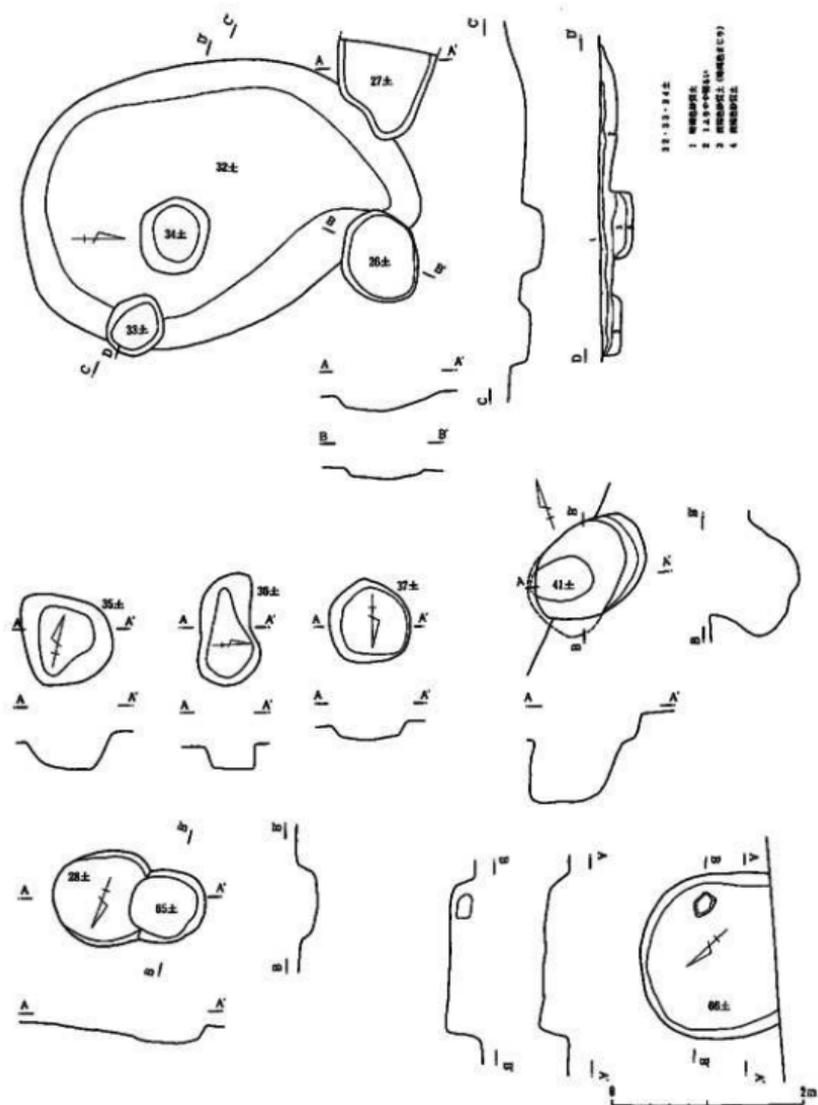
- 1 埴輪砂質土・埴輪砂質土
2 埴輪砂質土

24土

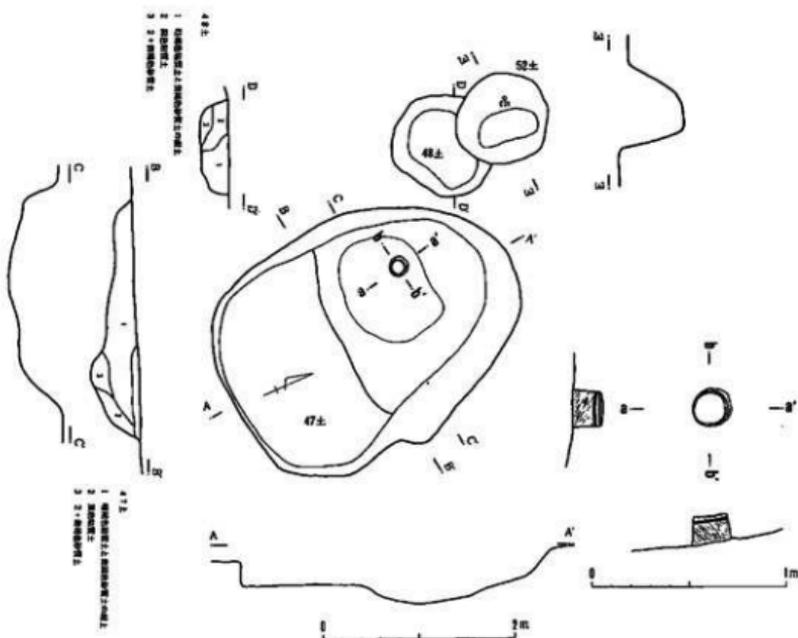
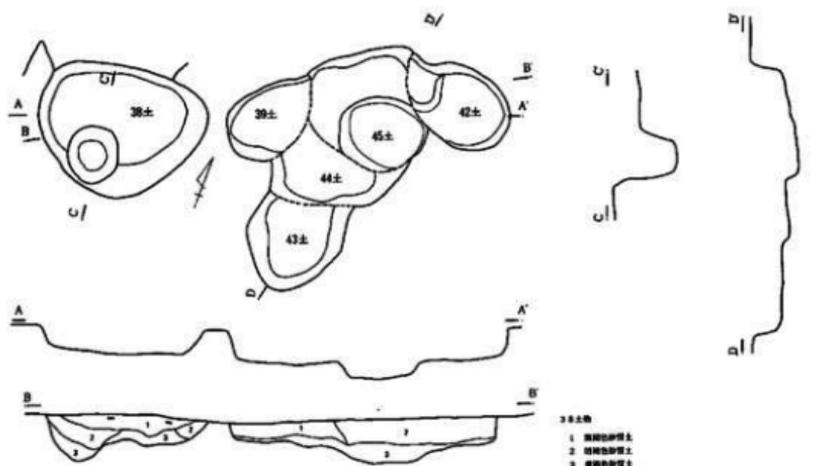
- 1 埴輪砂質土 (FやGに埴輪砂質土が主)
2 埴輪砂質土
3 埴輪砂質土・埴輪砂質土

0 1m

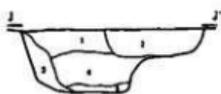
第40圖 土坑平面圖(2) (S=1/60)



第41圖 土坑平面圖(3) (S=1/60)

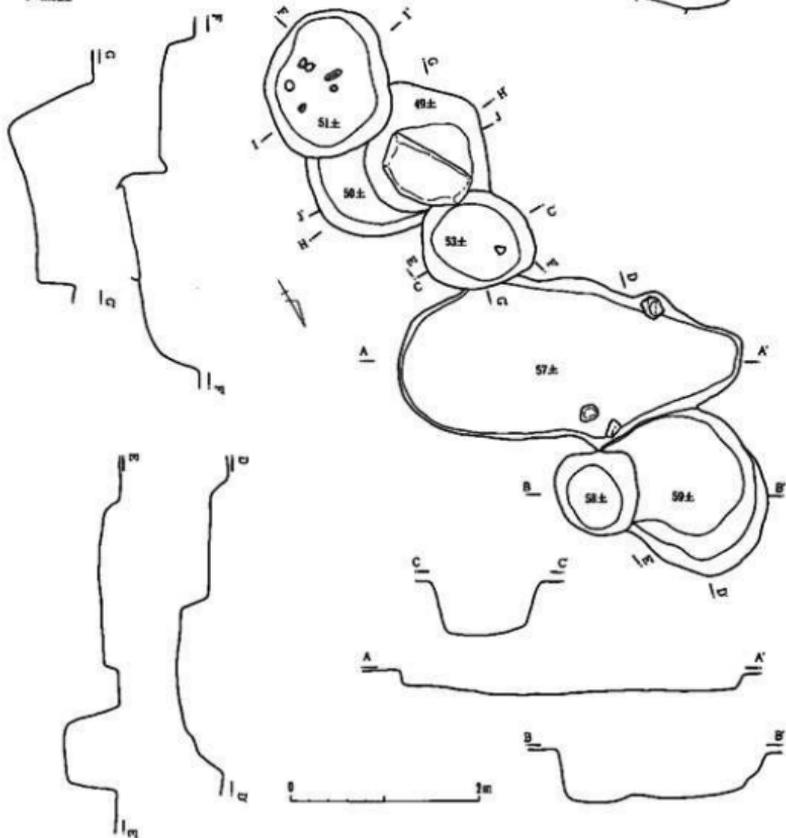


第42圖 土坑平面圖(4) (S=1/60)

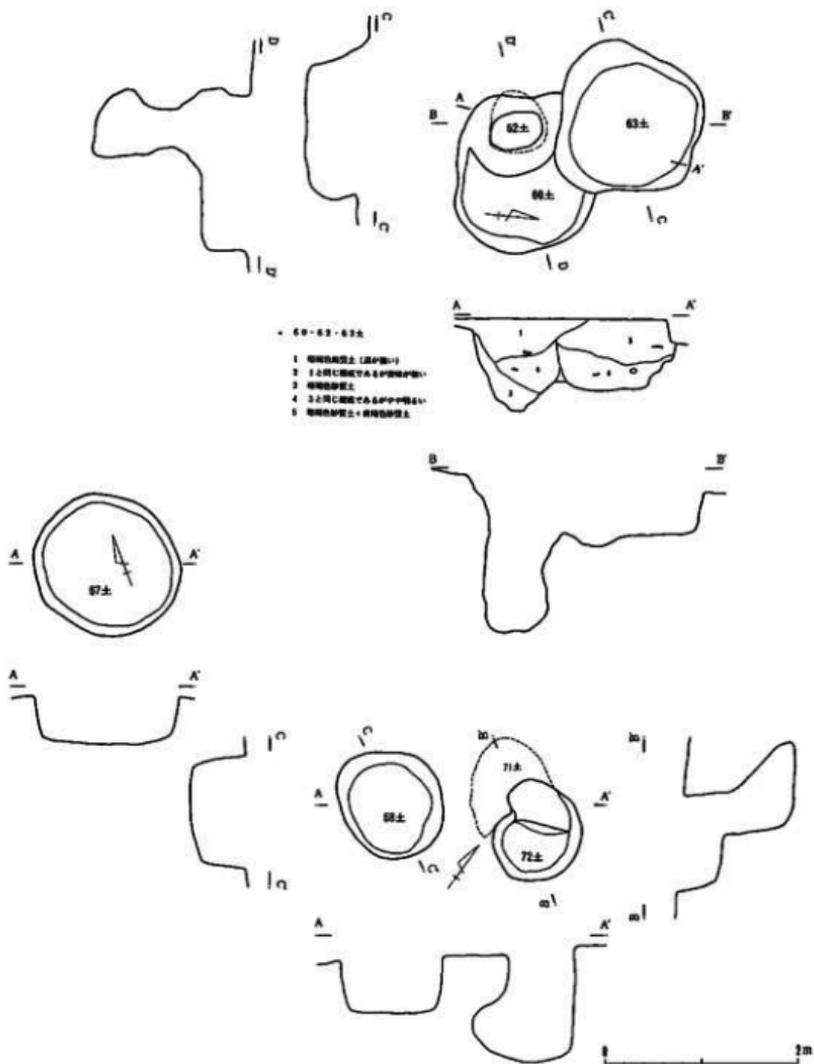


49・50止

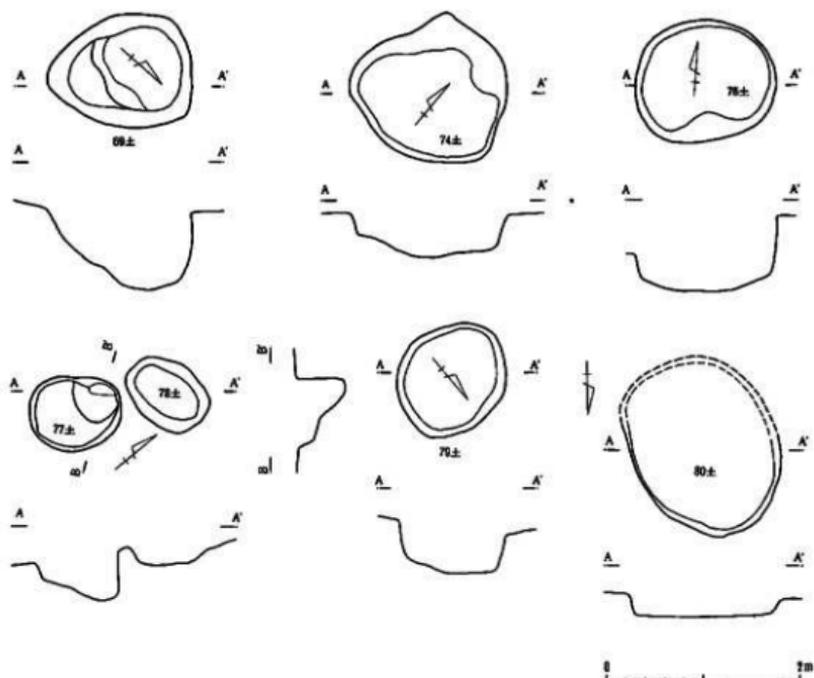
- 1 腐植土層
- 2 赤土層 (土層が厚い)
- 3 腐植土層上に腐植土がまじり腐植土が厚い
- 4 3と同じで腐植土が厚い
- 5 腐植土層



第43圖 土坑平面圖(5) (S=1/80)



第44圖 土坑平面圖(5) (S=1/60)



第45図 土坑平面図(7) (S=1/60)

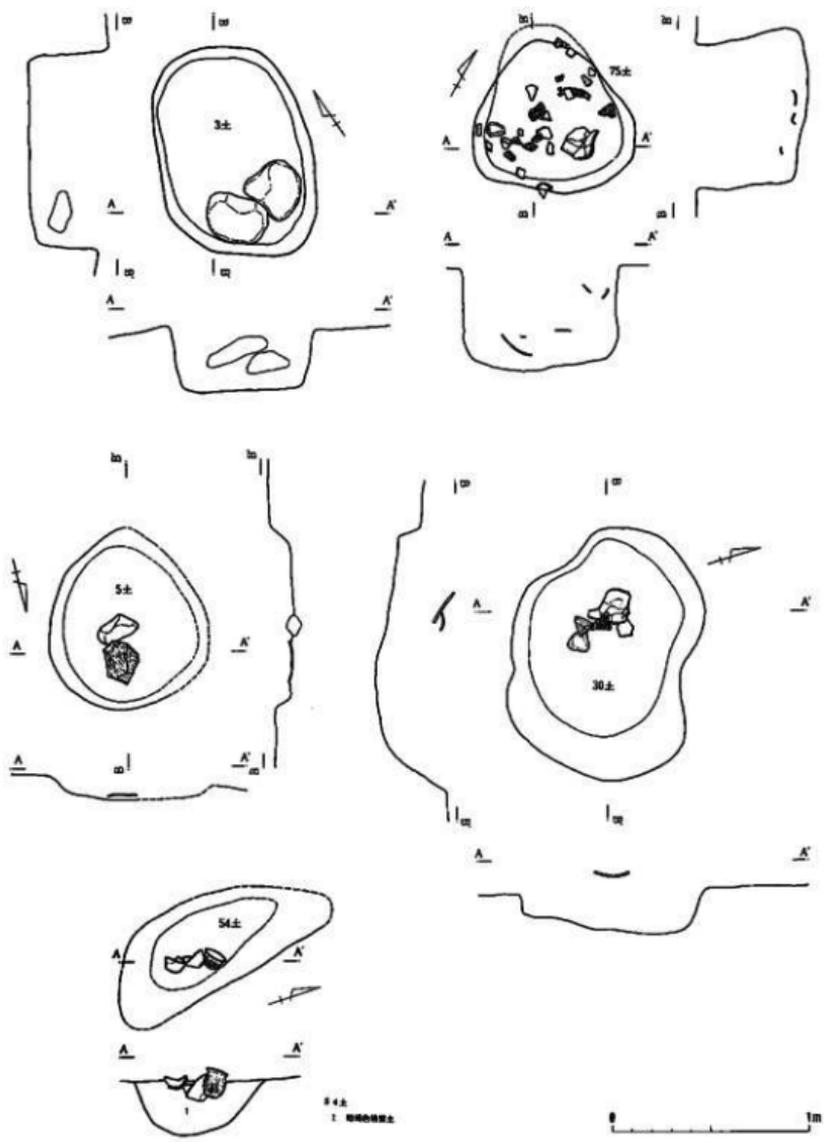
2. 土坑の出土遺物 (第48図・第49図)

1は2号土坑、2は3号土坑、3は5号土坑、4は9号土坑、5は30号土坑、6は32号土坑、7~10は40号土坑、11は53号土坑、12は57号土坑、13は63号土坑、14は70号土坑、15と16は75号土坑から出土している。7は諸磯b式ではめずらしい把手付きの土器である。弥生時代の土器は前期末~中期初頭の土器が出土しているが詳細については「第4章 まとめ」を参照されたい。平安時代の土坑1基からはまとまった土器群が出土した(第49図)。1~3の坑はほぼ同様な整形方法をとっている。底部だけは1と3は糸切り痕が残り、2はヘラ削りされている。

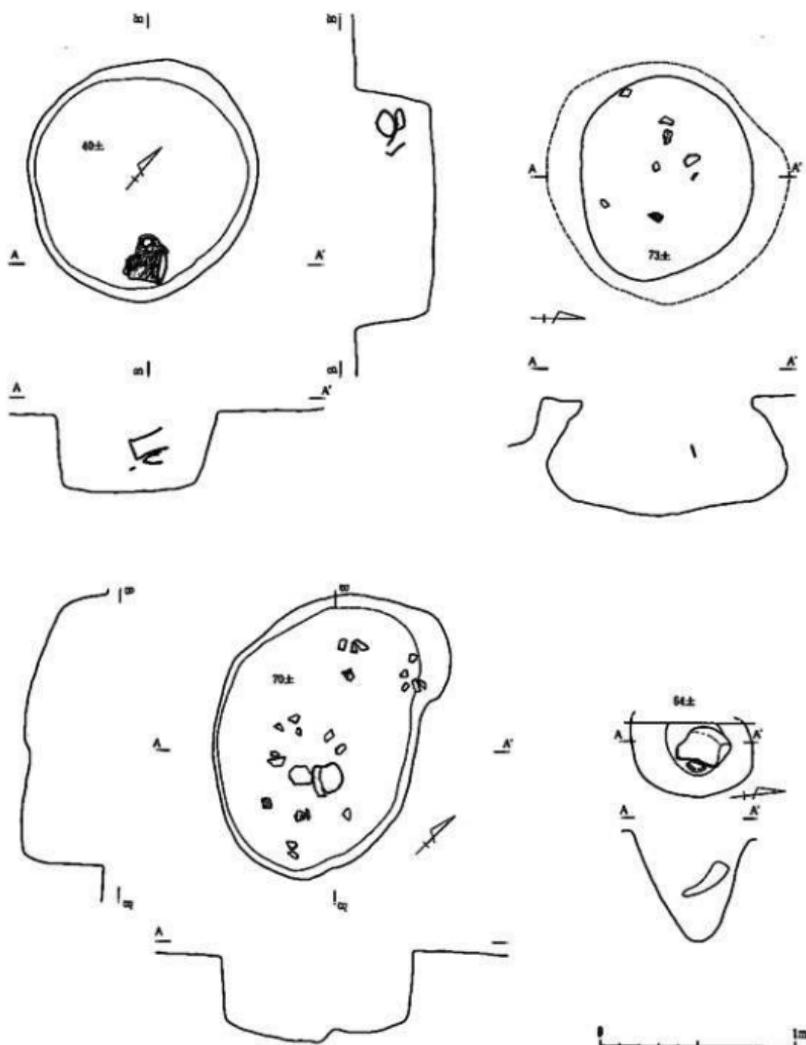
第3節 溝状遺構

1. 1号溝 (第50図右上)

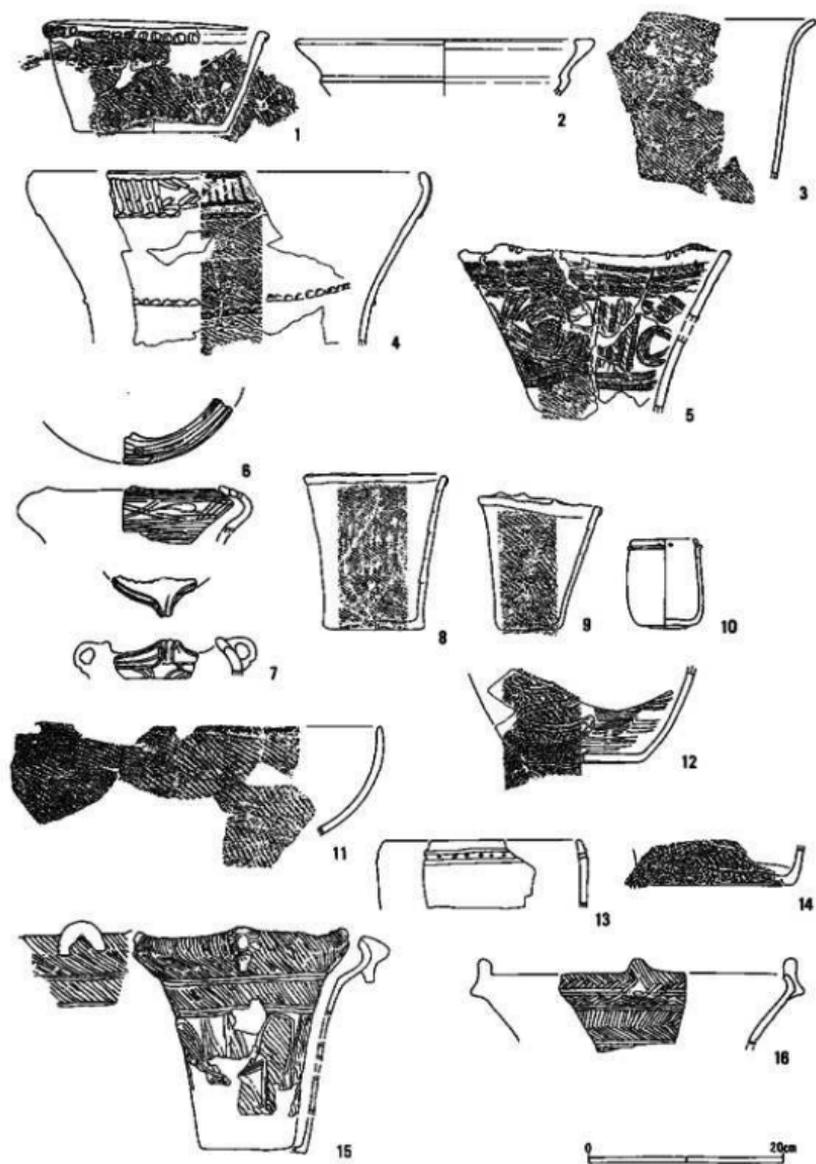
幅2m前後、長さ4mほど、深さ20cm前後の規模で確認され、全体の姿は不明である。屈曲



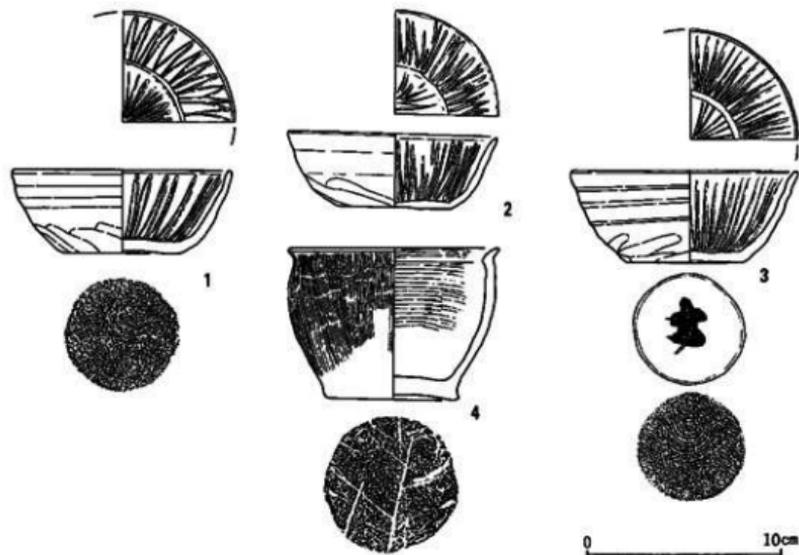
第 46 图 土坑平面图例 (S = 1/30)



第47圖 土坑平面圖(例) (S=1/30)



第48圖 土坑出土土器 (S=1/6)



第49図 54号土坑出土土器 (S=1/3)

部と思われる。平安時代の土器片が出土している。

2. 2号溝 (第50図中央)

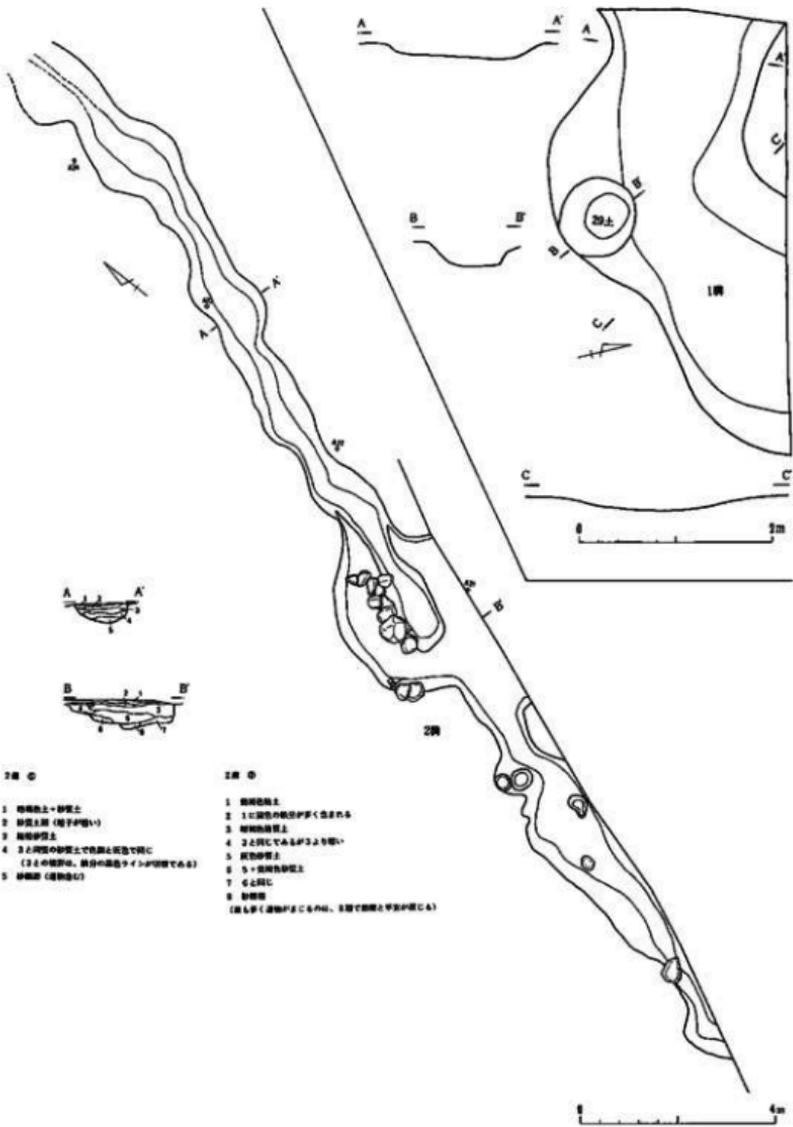
幅1.5m前後、長さ26m、深さ60cm前後の規模で確認され、北側では強く消失しており、南側では調査区域外へ延びている。全体の姿は不明であるが、かなり規模の大きい溝である。平安時代の土器片が出土している。

第4節 道路遺構とその出土遺物

1. 道路遺構の形状・規模 (第51図・第52図)

平成2年度分調査区域の北側で近世のものと考えられる道路遺構が検出された。現地表から30cm～40cmの厚さの表土・攪乱層を除去すると、東西に長く走る幅6m前後の落ち込みが検出された。この覆土は軟らかく締まりがない。その上、土中から縄文土器片を多量に出土した。この状況から推測できることは、この細長い落ち込みが、それほど古くない時代に埋め立てられたものということである。つけ加えればこの埋土は他の縄文時代の遺跡が存在する所から搬入されたものであろう。

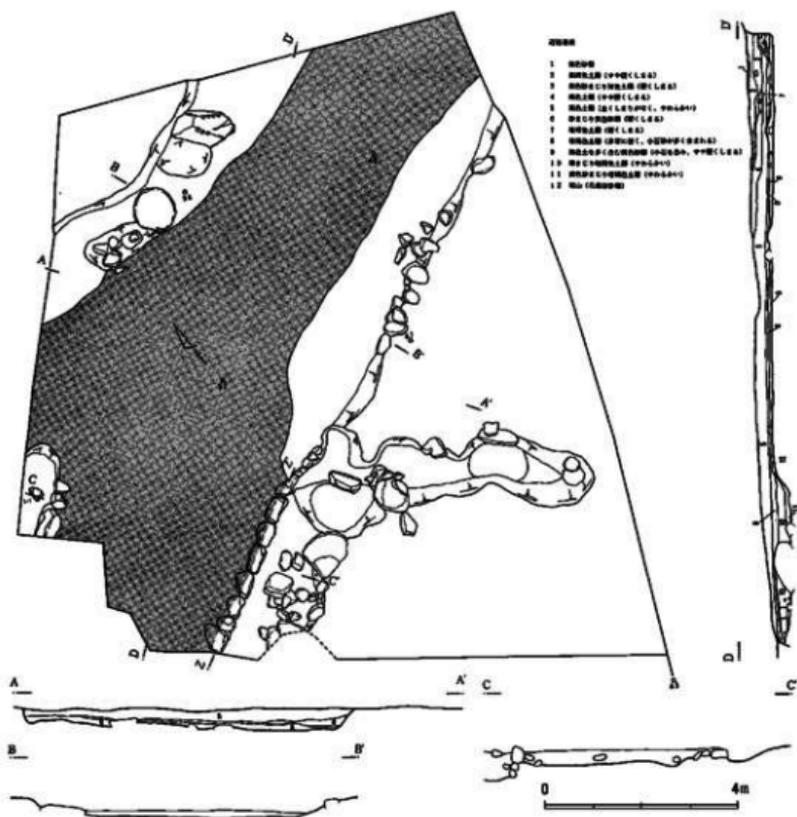
落ち込みを掘り下げると約30cmほどで極めて強く締まった平坦な面に到達する。この堅い面



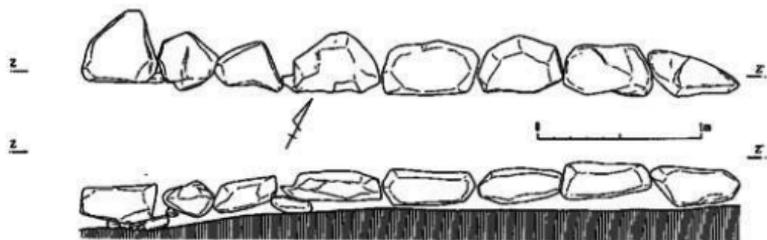
- 2号①
- 1 粘板土・砂質土
 - 2 砂質土層 (粘土が混じり)
 - 3 粘板土層
 - 4 3と同様の粘板土で粘板と泥で固く (3上の粘板は、粘土の混入が少く固く)
 - 5 砂層 (埋没物)

- 2号②
- 1 粘板土層
 - 2 1に泥質の粘土が混入する
 - 3 粘板土層
 - 4 2と同じであるが少し厚い
 - 5 泥質土層
 - 6 5と粘板土層
 - 7 6と同じ
 - 8 砂層 (埋没物)
 - (埋没物より下の層は、3層で粘板と砂質土層)

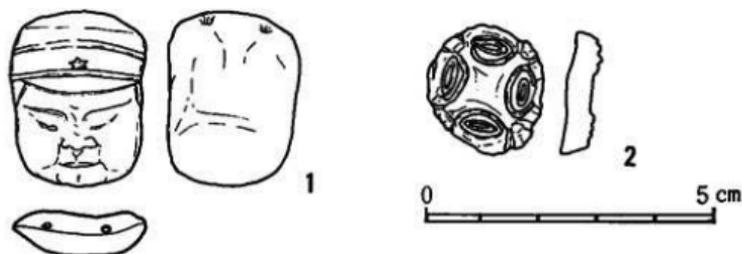
第50図 1号溝平面図 (S=1/80)・2号溝平面図 (S=1/120)



第51圖 道路遺構平面圖 (S=1/120)



第52圖 道路遺構石列平面圖・正面圖 (S=1/35)



第53図 道路遺構出土遺物 (S=1/1)

は落ち込みの中心部分ほど堅く、中心から離れるほど軟弱になってくる(第51図中のスクリーントーンの範囲)。堅い面の幅は3m~4mで東側は調査区域外の重川方面へ向かって続き、西側では北西方向と南西方向の2方向に分かれているようである。最も南側では南に面を向けた石列が長さ約4mにわたって確認された。そのうえ堅い土の面はこの石列の北側半分ほどを1cm~2cmほどの厚さで覆っていた。

堅い面は地山の花崗岩砂層の上に5cm~10cmの厚さで堆積しているが、小石と砂が混ざったものである。人為的に故意に固められたものか、人の歩行により固められたものかは断面からは判断できなかった。

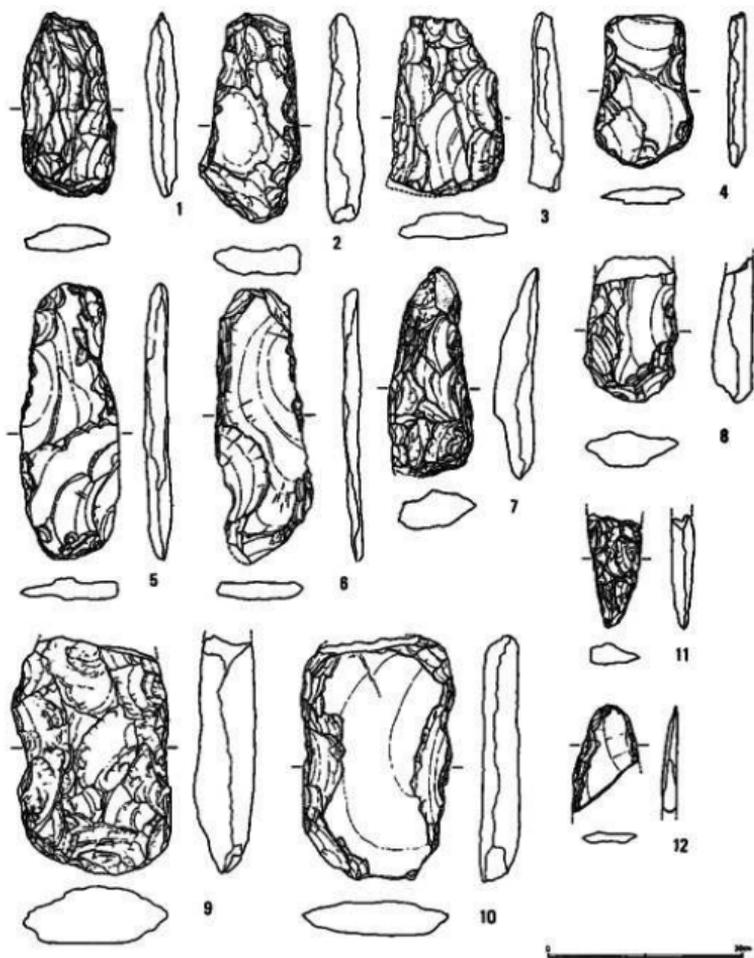
2. 道路遺構の出土遺物(第53図)

堅い面を除去した際に、明治時代のものと思われる土製品が2点出土した。1は兵士の顔と思われる。星のマークの付いた帽子を着用しており、裏側に2箇所小さな穴がある。レンガ色を呈する。2は一見花柄のような土製品である。やはりレンガ色を呈する。

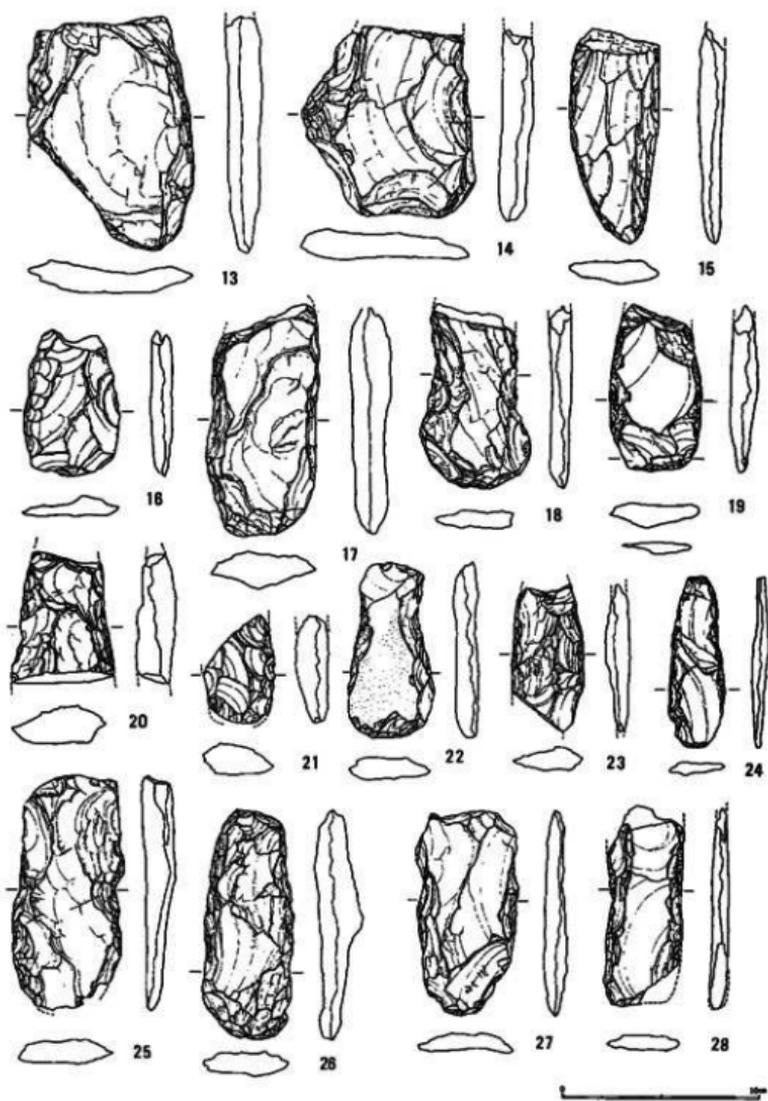
第5節 その他の出土遺物

1. 石器類

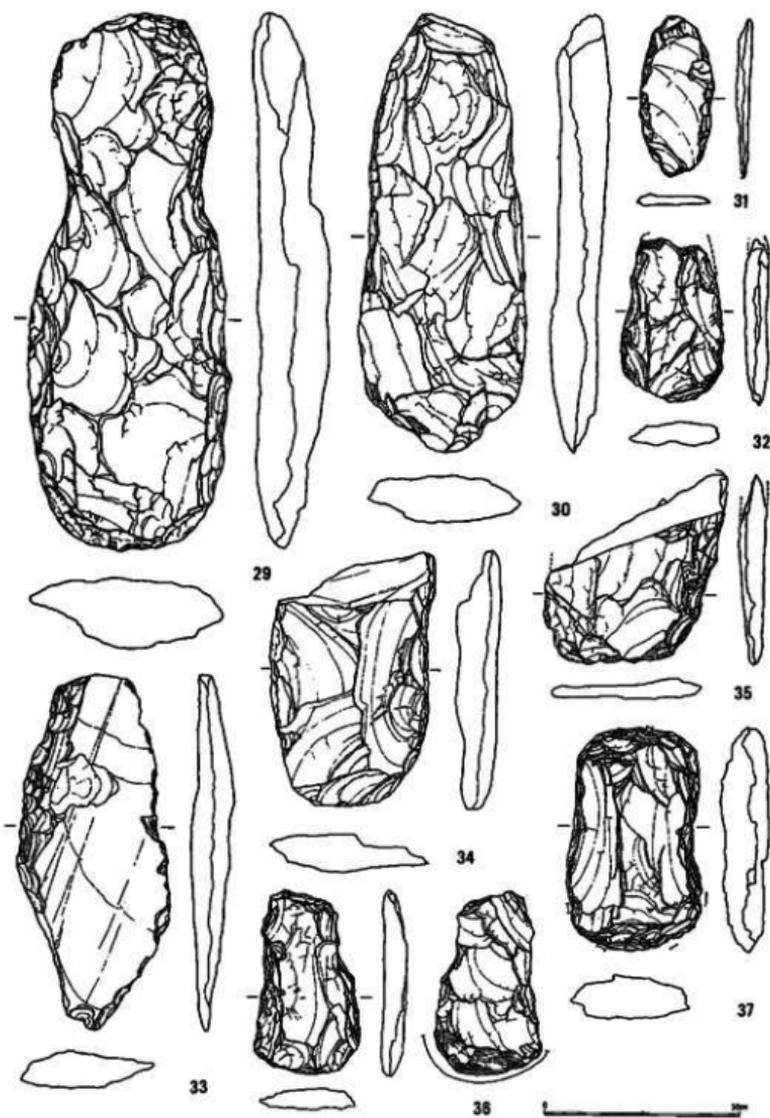
石器類は打製石斧(第54図~第59図)、碌器(第60図)、磨製石斧(第61図)、磨石・凹石(第62図~第66図)、石皿(第67図~第68図)、石鏃(第69図~第70図)、石匙(第71図)、石鏃(第72図)が出土している。それらについては一覧表(表4~表7)に示した。耳飾りと砥石については別項で取り扱う。その他の石器類(第73図)は、1と2が蛇紋岩類の石を材料とした玉斧で1は未成品で、2は刃部が欠損している。3と4は槍先形石器で4は基部を欠損している。3は粘板岩製、4は緑色片岩製。5はスクレイパーでホルンフェルス製。6は三叉状の特異な石器で粘板岩製。7は緑色片岩製の石剣破片。8と9は石鏃で8は粘板岩製、9はホルンフェルス製。



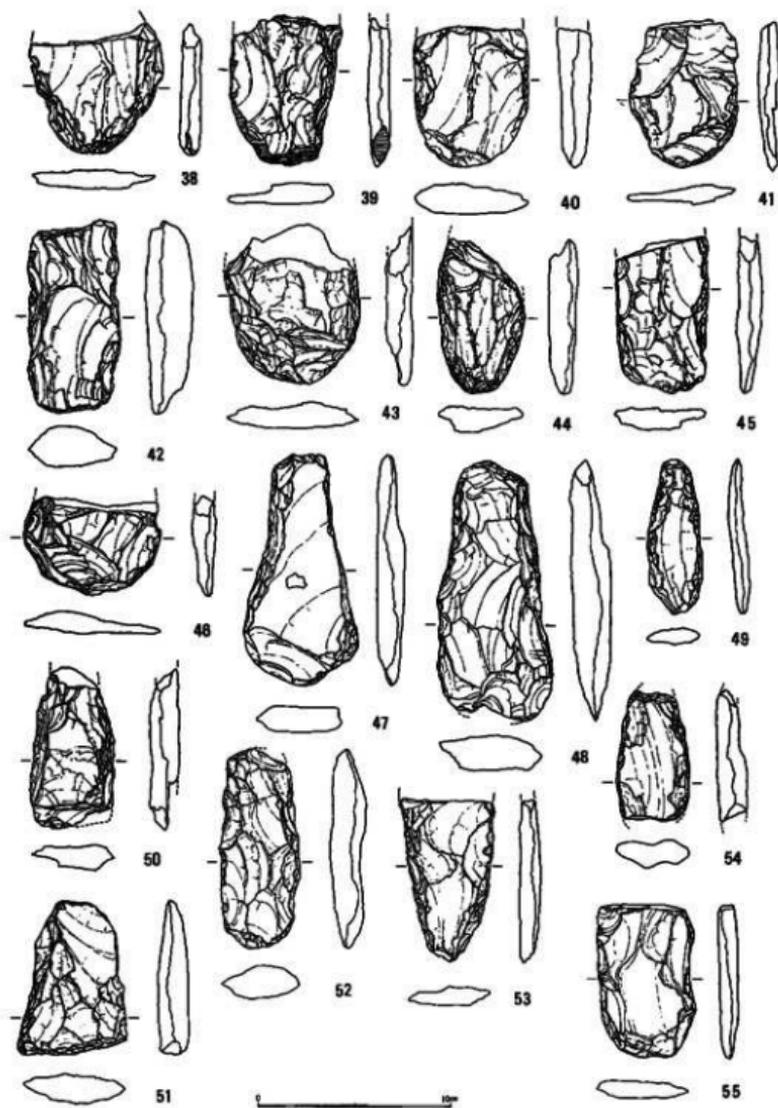
第54圖 打製石斧(1) (S=1/3)



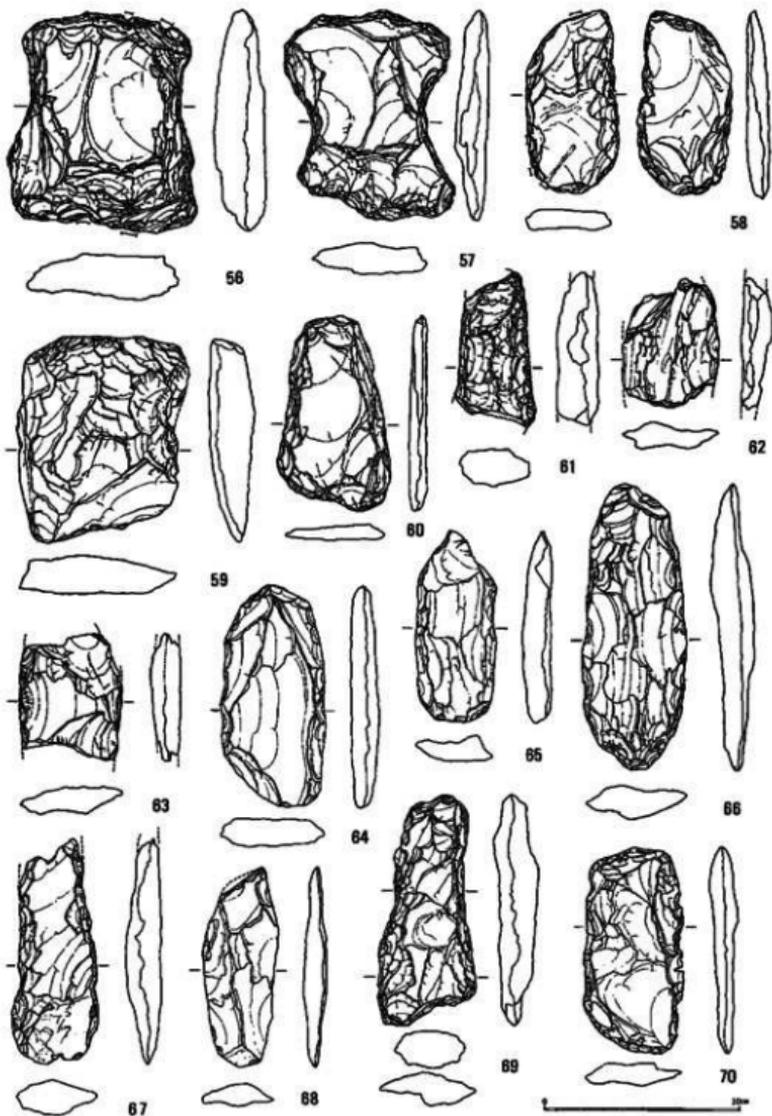
第55圖 打製石斧(2) (S=1/3)



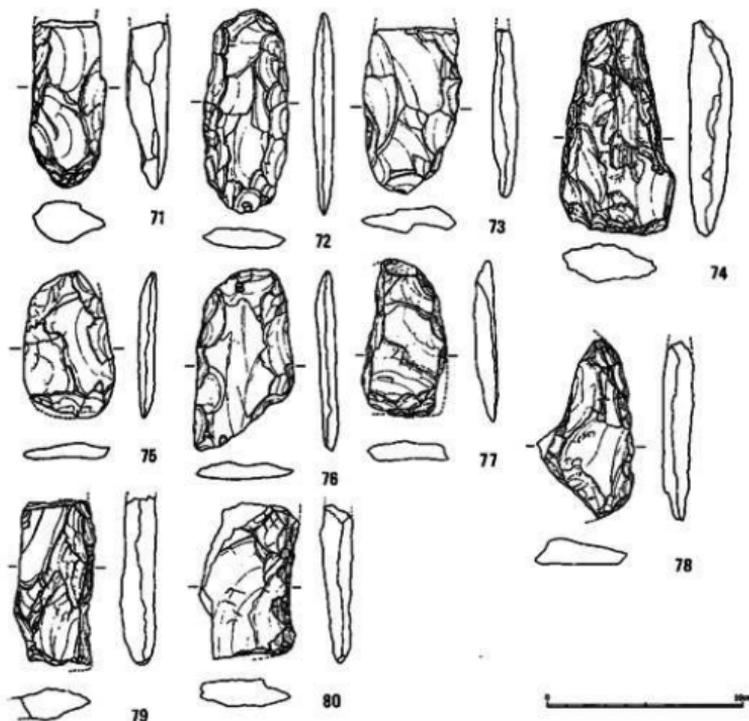
第56圖 打製石斧(3) (S=1/3)



第57图 打制石斧(4) (S=1/3)



第58圖 打製石斧(5) (S=1/3)



第59図 打製石斧(6) (S=1/3)

2. 遺構外出土器等

(1) 遺構外出土器 (第74図・第75図)

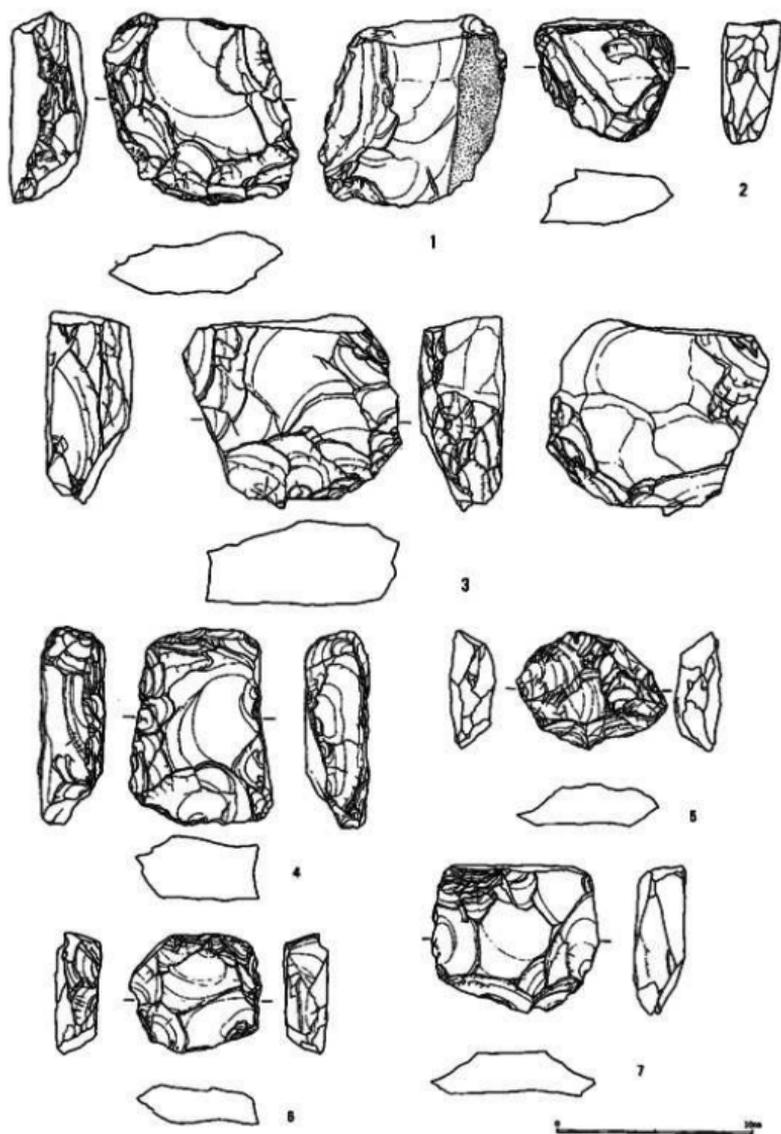
遺構外から諸磯a式土器、諸磯b式土器、十三菩提式土器、五領ヶ台式土器が出土している。13は底部に木葉痕が見られ五領ヶ台式土器と思われる。23は十三菩提式土器であるが、極めて特異な形状を示している。

(2) 小形土器 (第76図)

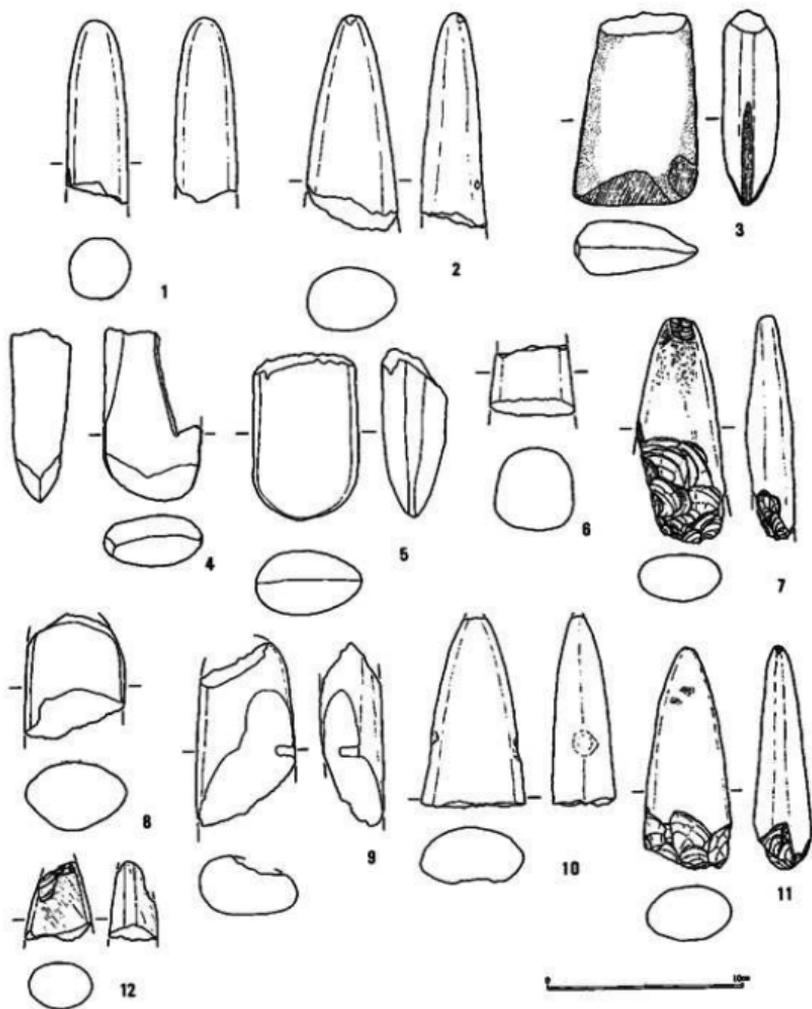
小形土器は13点出土しているが有孔土器が多い(1・7・8・10)。1は1号住居址、2は3号住居址、3は4号住居址、4は57号土坑、5・6・8は63号土坑、7は8号住居址、他は遺構外からの出土である。なお、8は外面赤色塗彩である。

(3) 関西・東海系土器 (第78図)

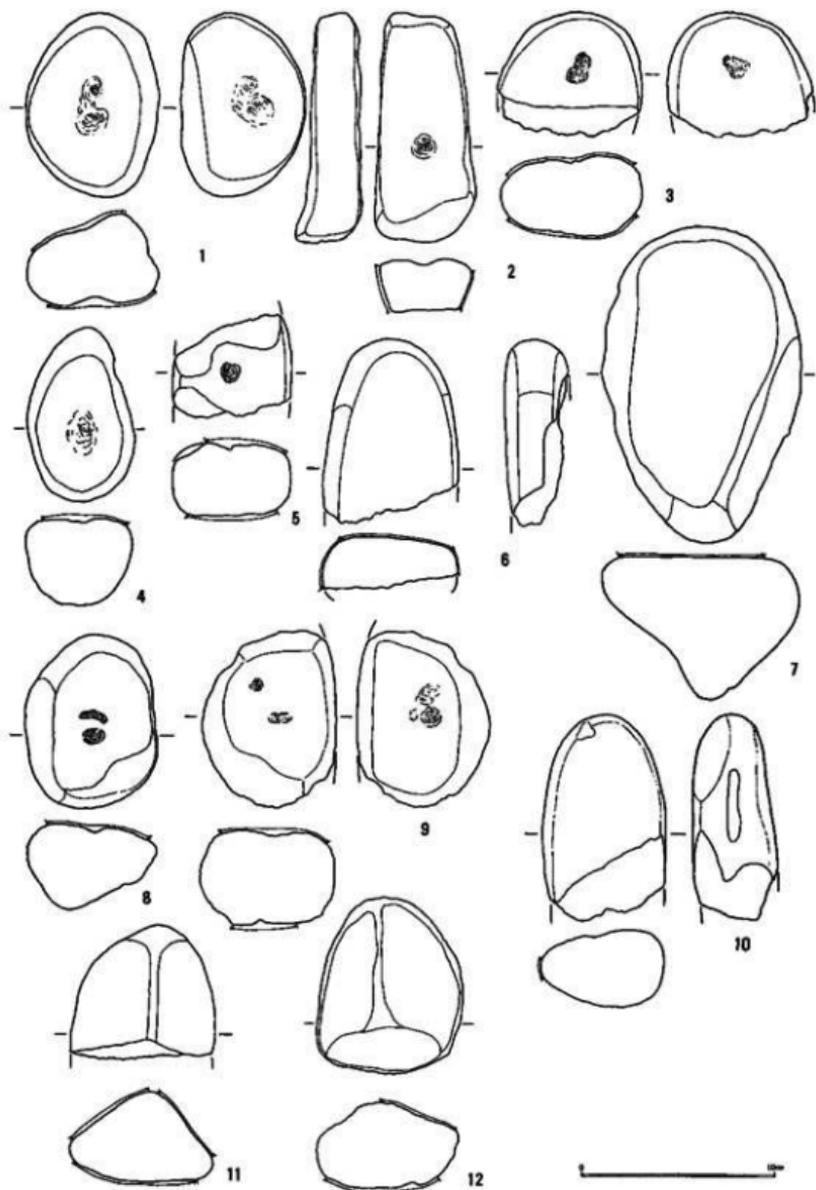
獅子之前遺跡では遺構内外で北白川下層Ⅱ式土器およびその影響を強く受けたと思われる土



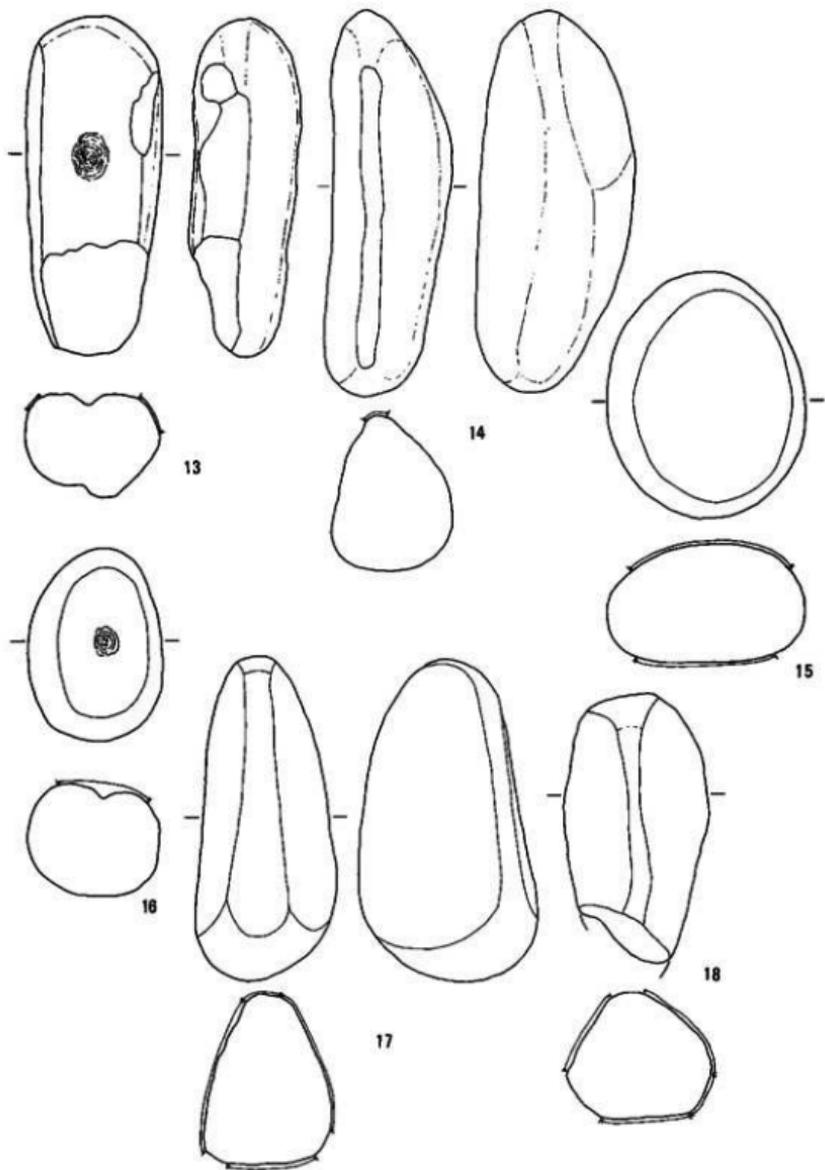
第80圖 磁器 (S = 1 / 3)



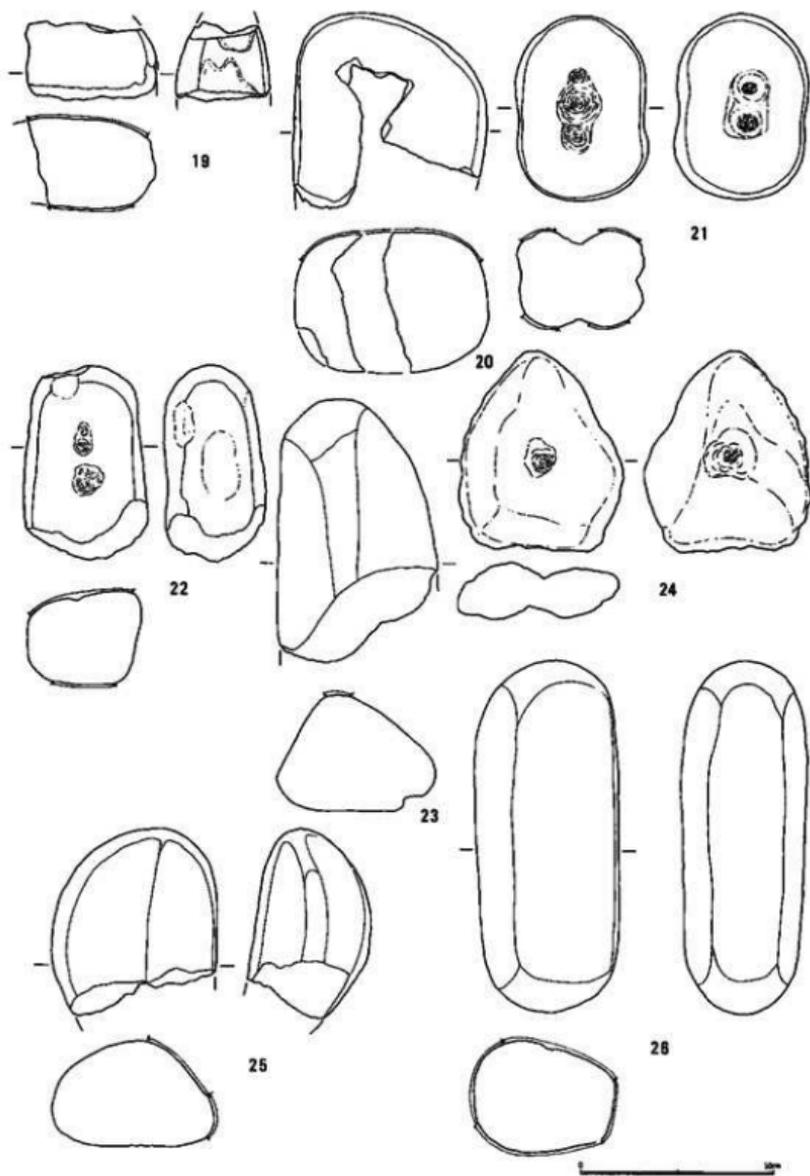
第61圖 磨製石斧 (S=1/3)



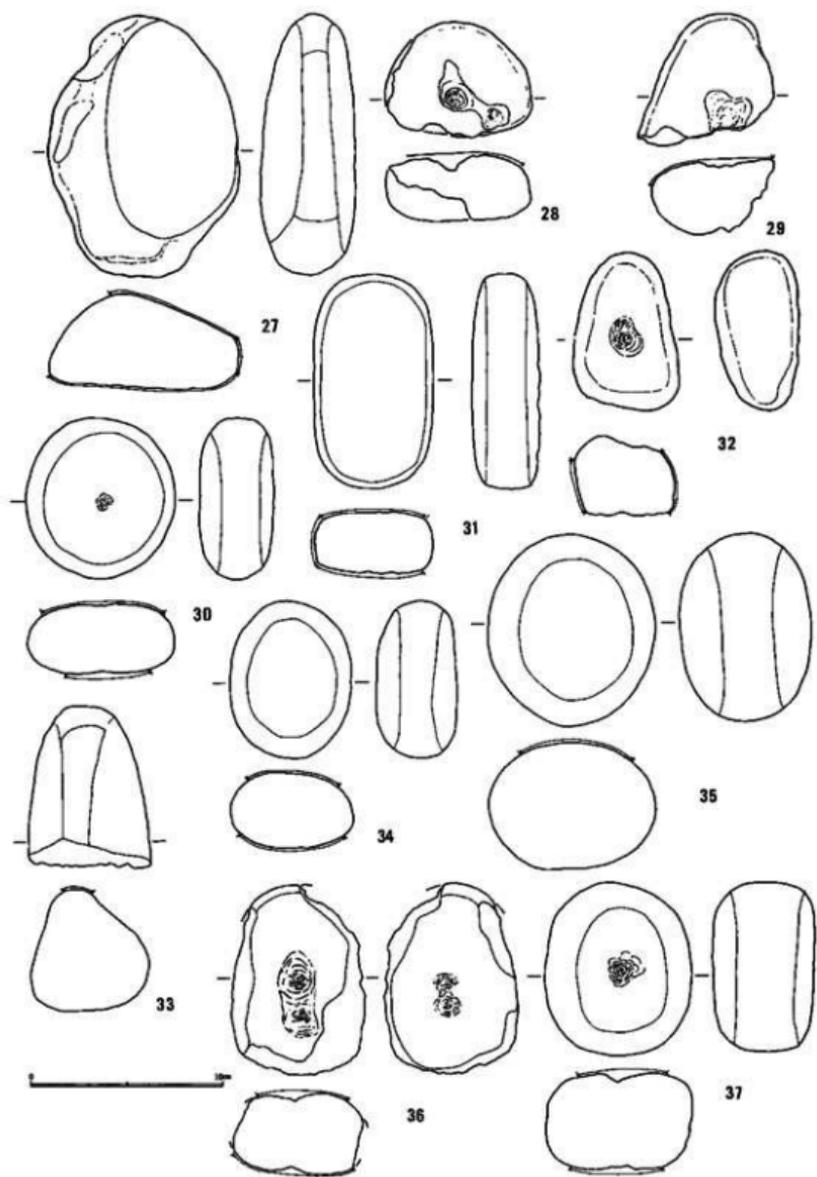
第62圖 磨石・凹石(1) (S=1/3)



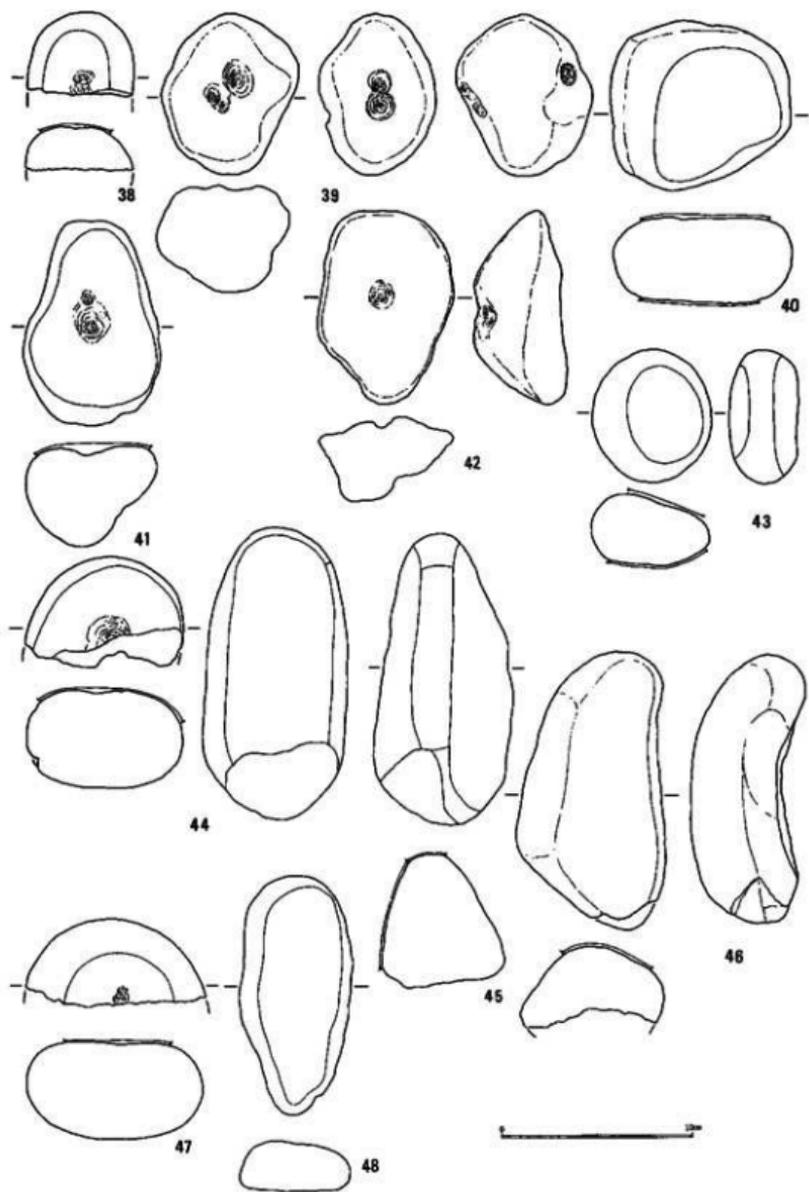
第63圖 磨石・凹石切 (S = 1/8)



第64圖 磨石・凹石(3) (S=1/3)



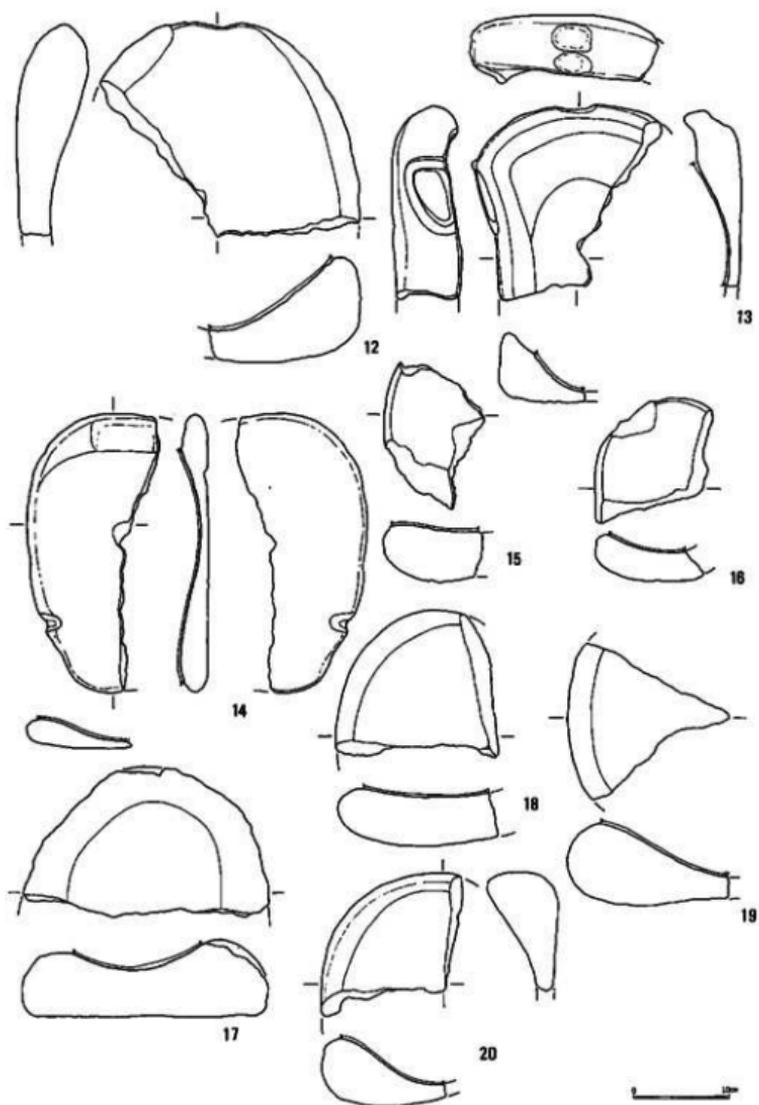
第65圖 磨石・凹石(4) (S=1/3)



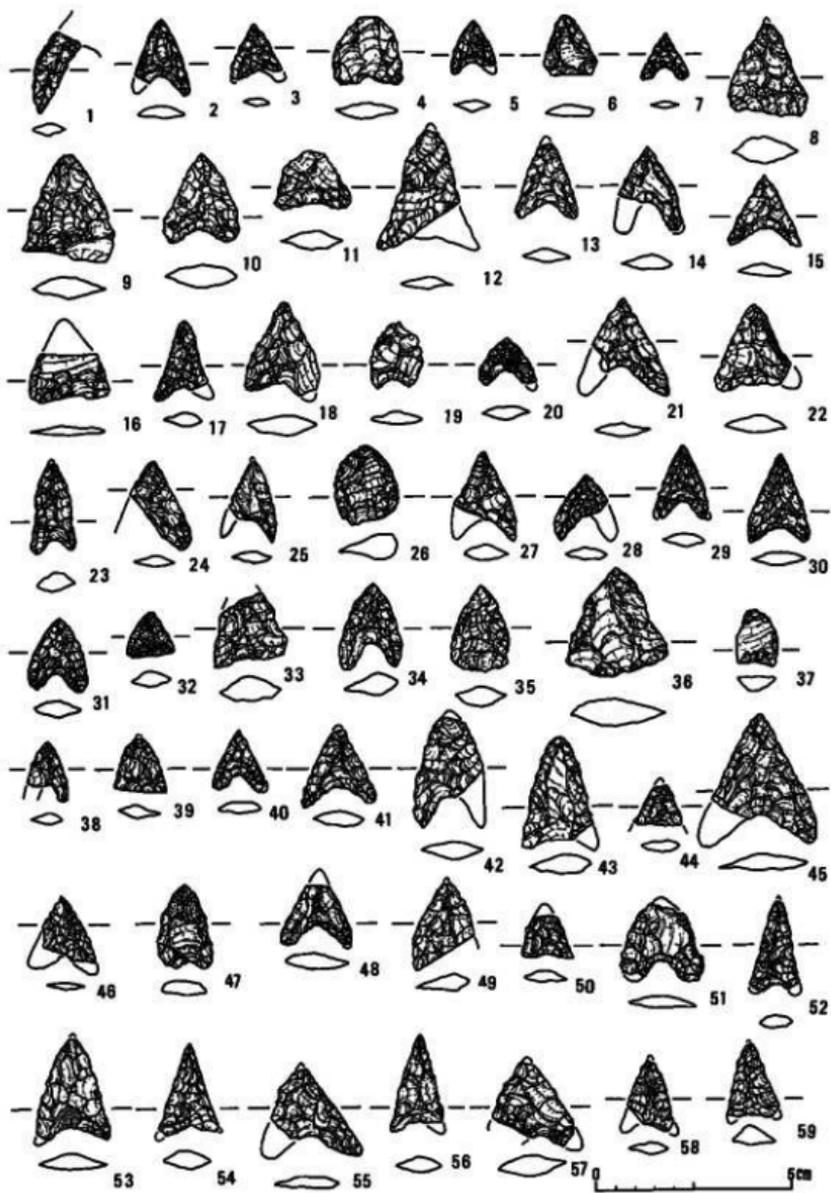
第66圖 磨石・凹石類 (S = 1/3)



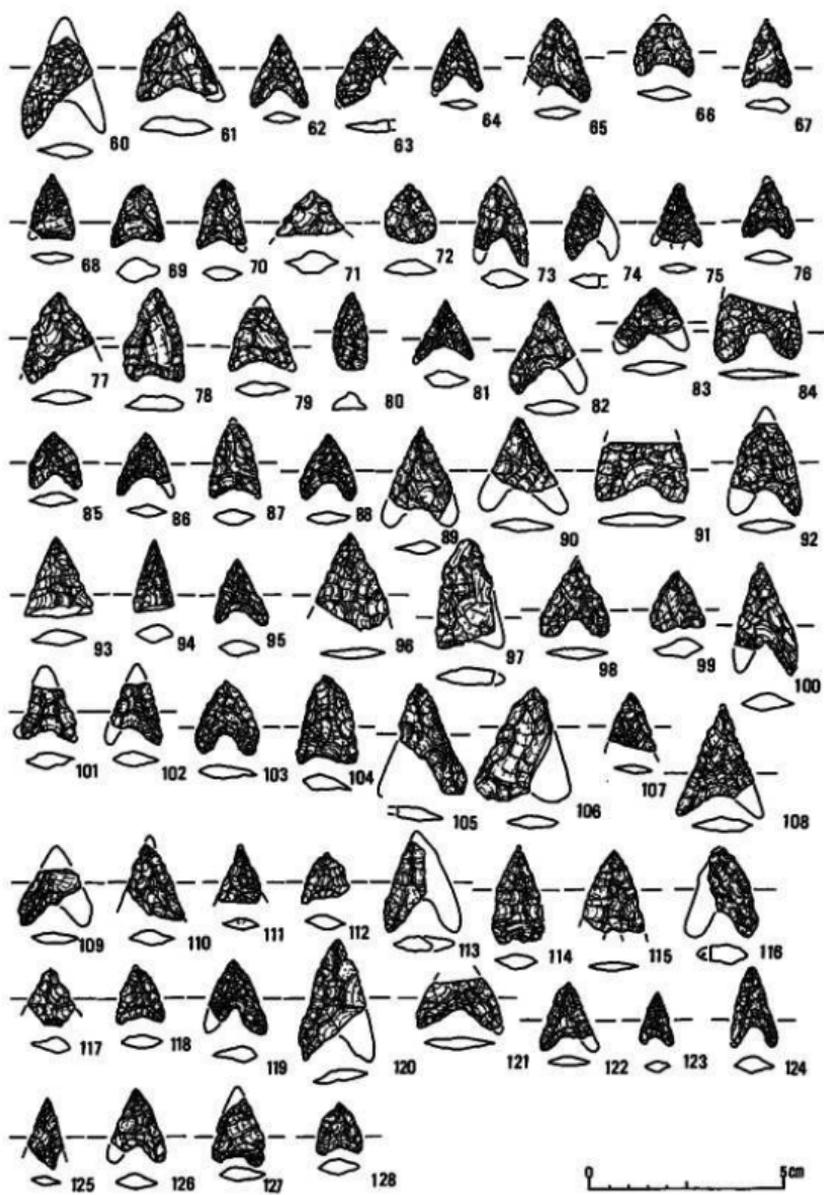
第67圖 石皿(1) (S=1/6)



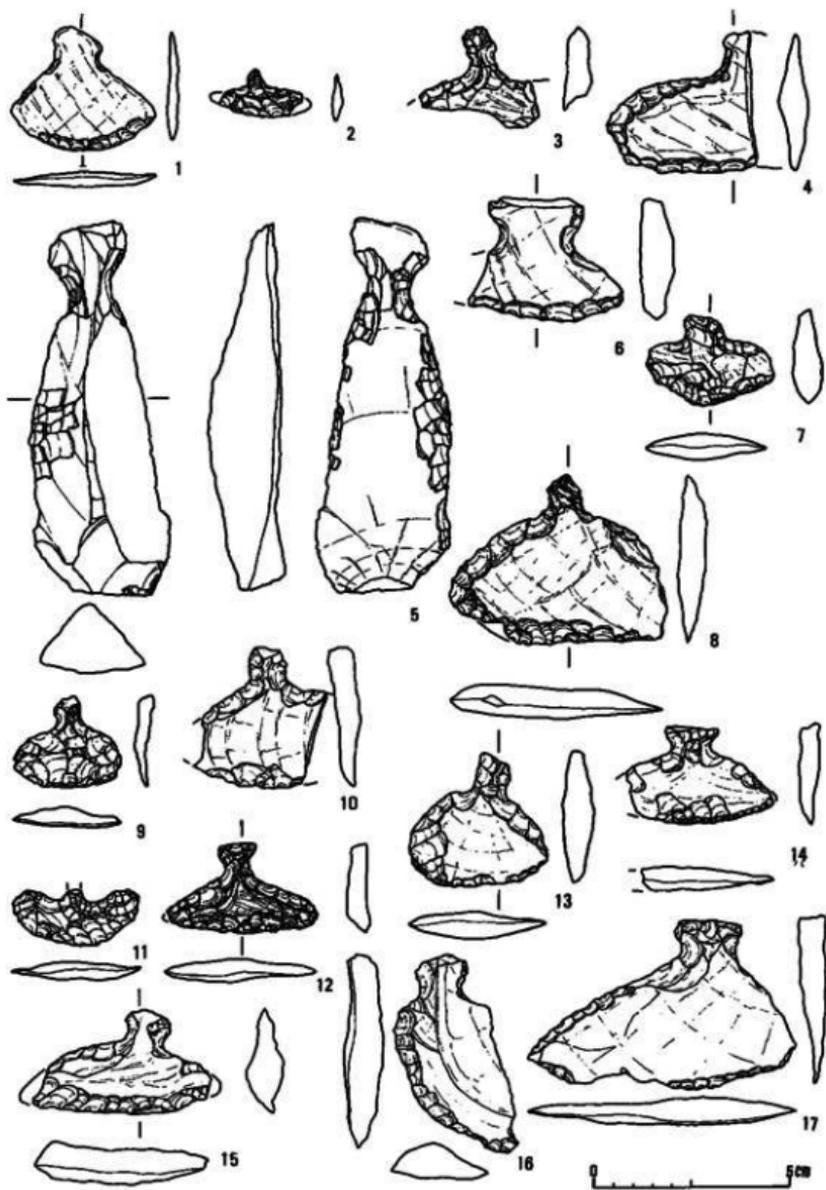
第68圖 石皿(2) (S = 1/6)



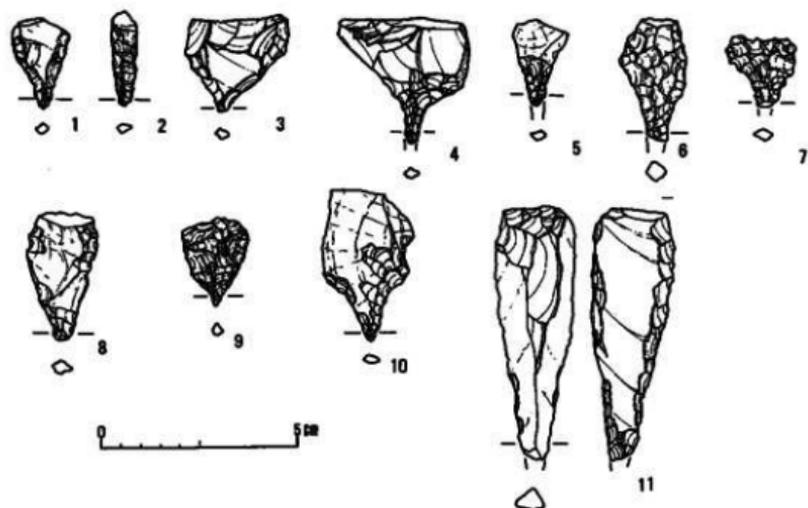
第69圖 石鏃(1) (S = 2 / 3)



第70圖 石鏃(2) (S = 2 / 3)



第71圖 石器 (S = 2 / 3)



第72図 石鏃 (S=2/3)

器片が23点出土している。文様には爪形文・羽状縄文・浮線文の種類がある。1・4・7・9・10・11・14・20の8点が3号住居址出土であり、まとめて出土している点が注目される。2は47号土坑、3は2号住居址、5は4号住居址、6は57号土坑、8・15・17は63号土坑、12は52号土坑、13は25号土坑、16は30号土坑、18・22は60号土坑、19は27号土坑、21は遺構外、23は1号住居址で出土している。なお1・3・4・6・8・13・15・16は赤色塗彩されている。

3. 土偶 (第79図)

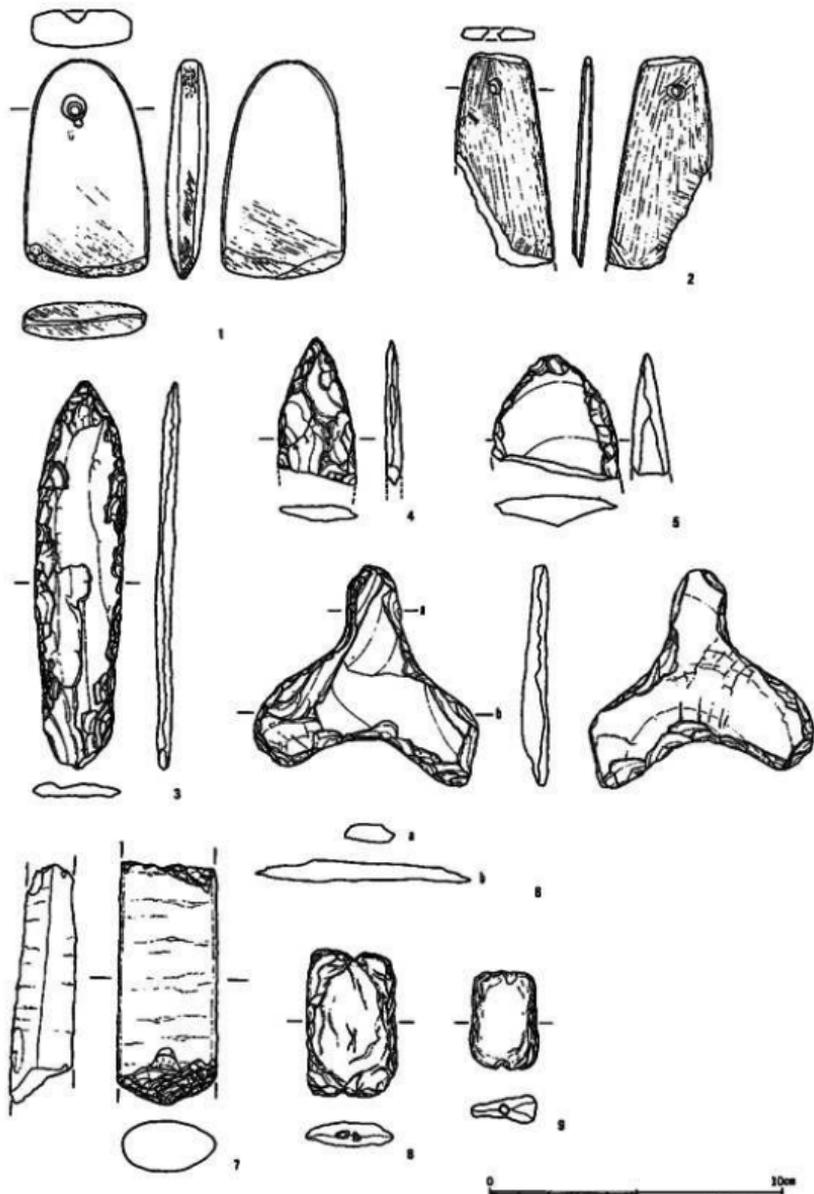
1は17号住居址、2・4はD-18グリッド、3はD-21グリッド、5・7は4号住居址、6はC-17グリッド、8・11は2号溝、9は1号土坑、10は2号土坑からそれぞれ出土している。7については土偶である可能性は低い。なお、詳細に付いては「第4章 まとめ」を参照されたい。

4. 耳飾 (第77図)

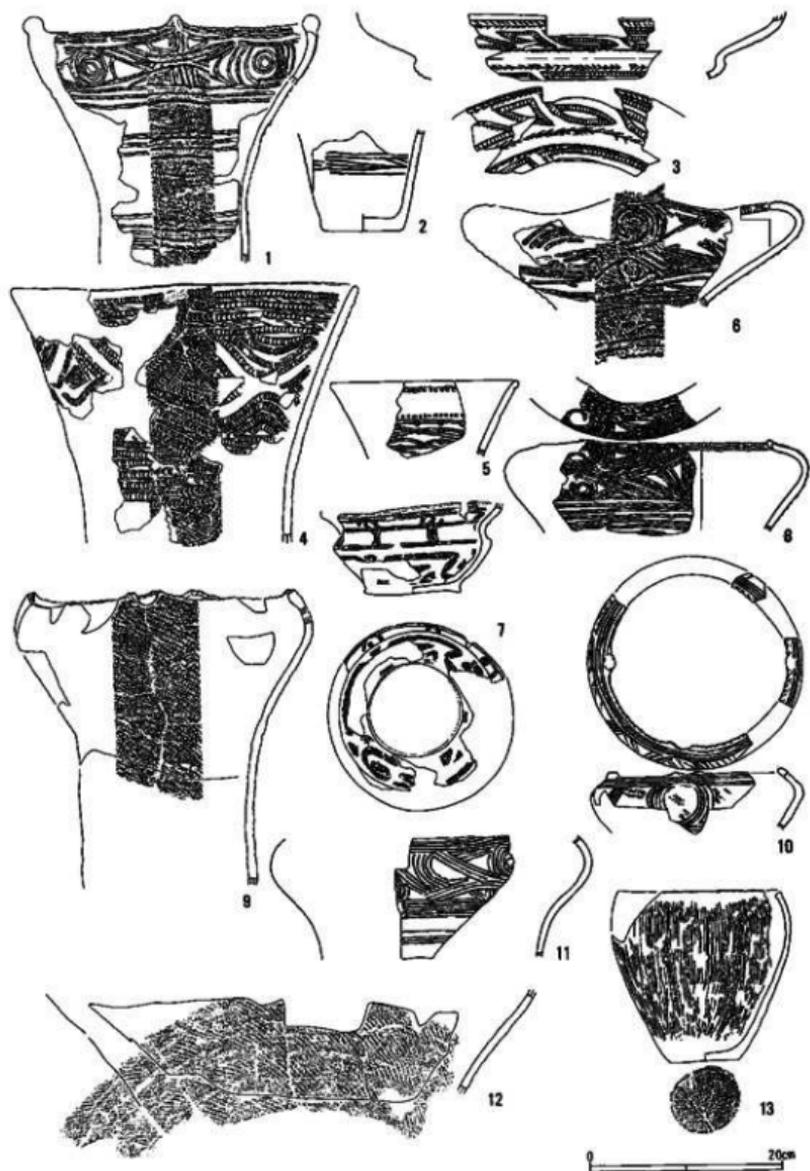
1・4が石製、2・3・5が土製である。1は滑石製、4は蛇紋岩製の夾状耳飾。2・3・5は赤色塗彩されていた夾状耳飾。1は表土、2は3号住居址、3は2号土坑、4は2号溝、5は49号土坑からそれぞれ出土している。

5. 土製品 (第81図)

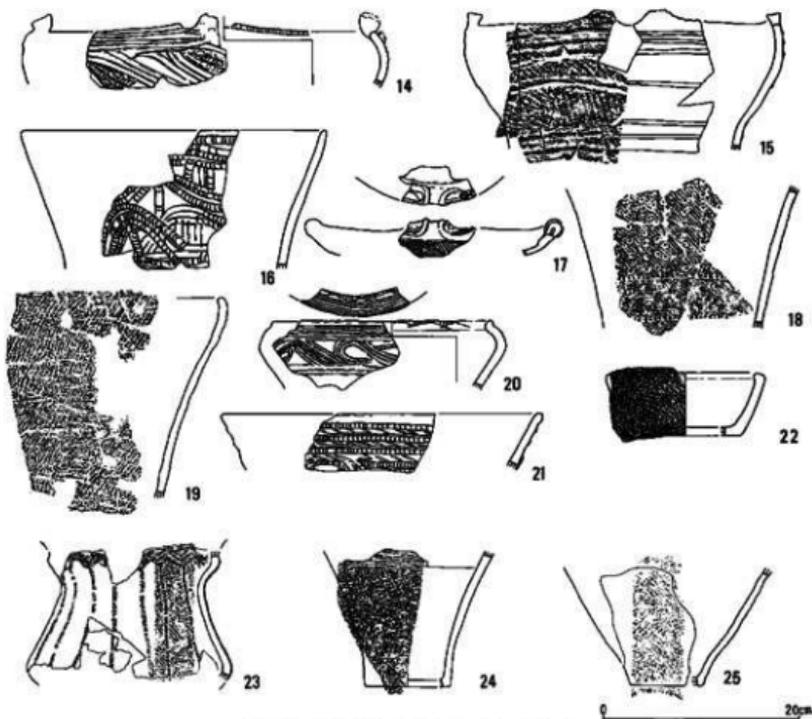
土製円板は15点出土している(1~15)。使用されてる土器片の時期は、本遺跡で確認された遺構から出土している土器と一致している。1は6号住居址、2は17号住居址、3は51号土坑、



第73図 その他の石器 (S=1/2)



第74圖 遠橋外出土土器(1) (S=1/6)



第75図 遺構外出土土器切 (S=1/6)

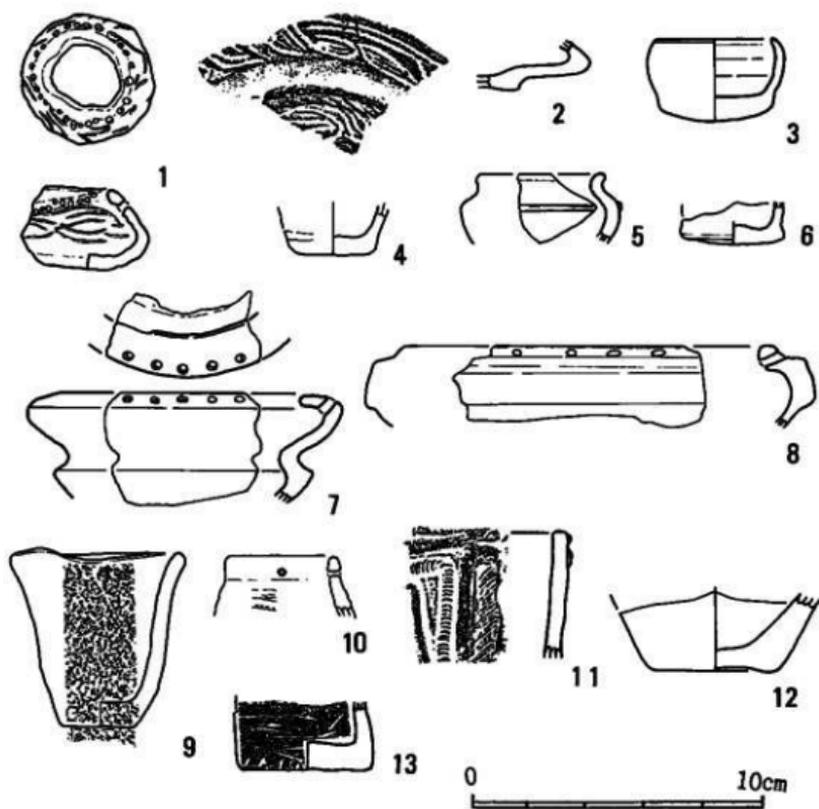
4は60号土坑、5は66号土坑、6～15は遺構外出土である。16～19は粘土塊である。16は平坦な面に押しつけたものと思われる。16は4号住居址、17は5号住居址、18は14号住居址、19は遺構外出土である。20・21は粘土玉である。20は53号土坑、21は4号住居址出土。22は土器片を利用した土製品であるが、土偶の形状を模したものではないかと思われる。57号土坑出土。23～25は獣面把手と思われる。23は29号土坑、他は遺構外出土である。

6. 鉄製品 (第80図)

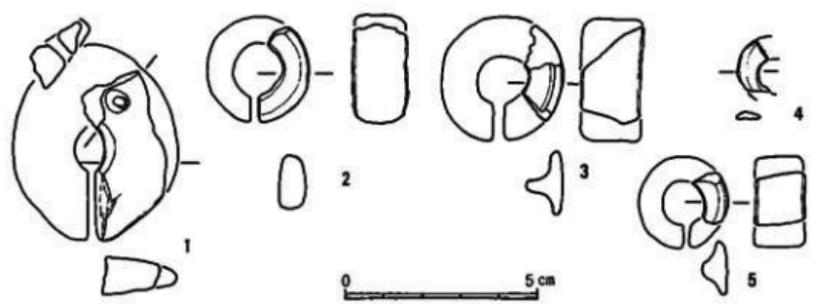
1の刀子はほぼ完形品で2号住居址床上出土。2と3は刀子の一部かと思われ、ともに12号住居址出土。4の鉄斧は2号住居址出土。5の鎌は13号住居址床上出土。

7. 砥石 (第80図)

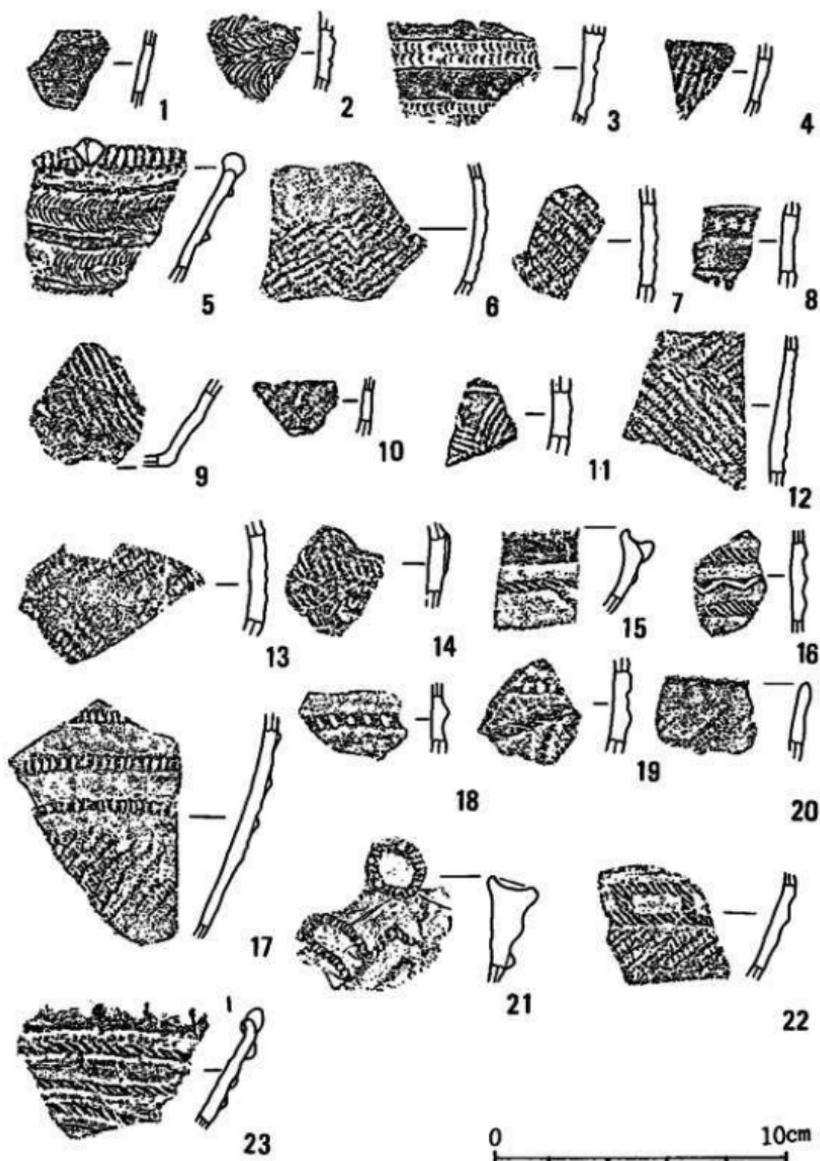
出土した砥石は5個ですべて硬質な凝灰岩製である。6は遺構外出土、図の上下面を除き他のすべての面がよく使用されている。7は2号住居址出土、図正面と裏面がよく利用されている。8は5号住居址出土、図上部に穴があいている。上面と下面が欠損しているが使用時のも



第76圖 小形土器 (S=1/2)



第77圖 耳飾 (S=2/3)



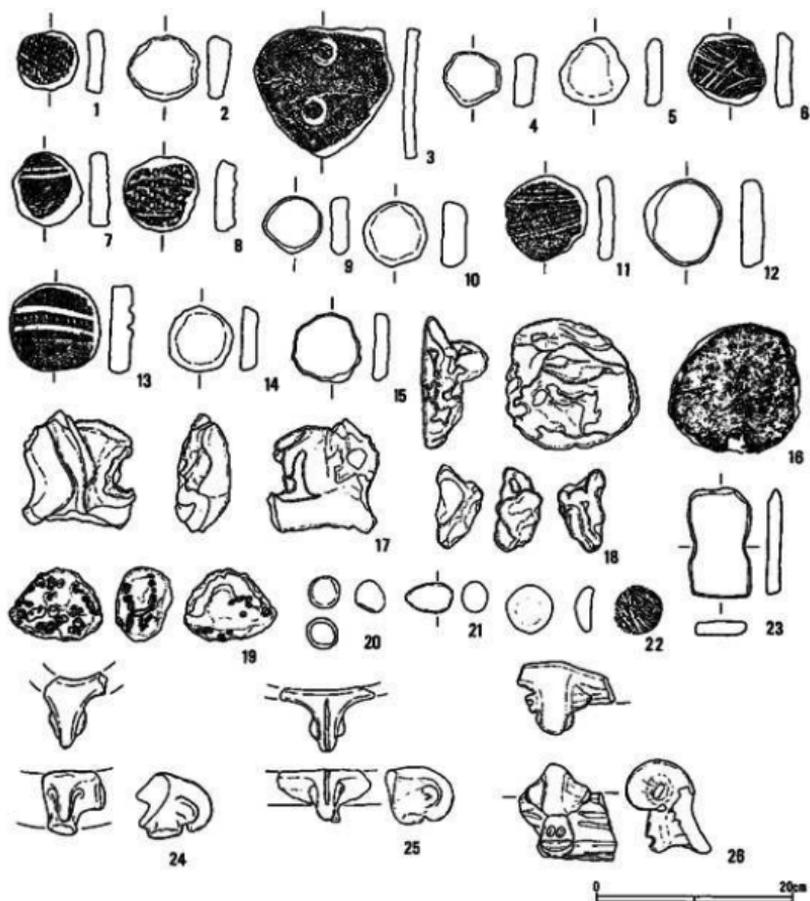
第78圖 關西・東海系土器 (S=1/2)



第79圖 土偶 (S=1/2)



第80图 铁製品(1~5)・砥石(6~10) (S=1/2)



第81圖 土製品・獸面把手 (S=1/3)

のかどうかは不明。9は遺構外出土、正面と側面の一部が特によく使用されている。10は4号住居址だが混入品であろう。上部に穴があいているが、使用によるすり減りで穴の一部が見える状態である。

第4章 ま と め

第1節 縄文時代の土偶について

1. 縄文時代前期～中期の土偶について

獅子之前遺跡では完全な形をとどめたものはないが縄文時代前期～中期にかけての10点の土偶と他に1点土偶の一部分の可能性のある土製品が出土している(第79図)。本県では当該期の土偶が本遺跡を含めて4遺跡15点と増加したので、土偶の分類を試みて説明したいと思う。なお、分類の基準については後述する。

1は釈迦堂Aタイプの土偶の下半身である。砂粒を含んだ堅い焼成で赤褐色を呈する。高さ4.7cm、厚さ1.5cmを測る縦半分に割れて出土したように、2つの粘土塊を接合して製作したものである。下腹部は両面とも指で円を描くように撫でたくぼみがある。

2は釈迦堂Aタイプ土偶の胸胸部である。高さ2.8cm、幅4.5cm、厚さ1.6cmを測る。砂粒を含み、金髪母が目立つ胎土である。胸の部分のやや細い粘土塊と両腕の部分の粘土塊の3つの部分に割れて出土した。両面とも若干くぼむようである。

3は釈迦堂Bタイプ土偶の胸部分に近似する形態である。高さ2.1cm、幅3.0cmを測る。板状である点と砂粒を含んだ堅緻な焼成から前期土偶としてよいものであろう。

4は獅子之前Bタイプの土偶とする。高さ7.1cm、幅4.1cm、厚さ1.9cmを測る。頭部から右腕にかけて破損しているが、ほぼ全体像を推定できるので前期土偶の一典型としておく。両面ともやくぼみが、くぼみの著しい面を正面としておく。金髪母の目立つ焼成堅緻な土偶である。

5は獅子之前Aタイプの土偶とする。脚部である。高さ5.5cm、足の幅1.9cm、脚部で1.8cm、踵からつま先まで2.9cm、脚部の厚さ1.9cmを測る。脚部の裏面に諸磯b式特有の浮線文を貼付している。この浮線文がなければ、中期の土偶と見間違える。粘土の割れ口部に芯の粘土塊を認めることができる。砂粒を含む、焼成堅緻な赤色を呈する土偶である。

6は獅子之前Aタイプ土偶の脚部で足の部分は失われている。高さ5.4cm、幅2.1cm、厚さ2cmを測る。5よりやや厚いが、同一個体ではないかと思われる。やはり裏面に諸磯b式特有の浮線文を施す。赤褐色の焼成堅緻の土偶である。

9はいわゆる中期後半のバンザイ土偶の腕である。高さ1.2cm、幅3.8cm、厚さ1.1cmを測る。

10はいわゆる中期後半のバンザイ土偶の腕と思われる。高さ1.3cm、幅2.8cm、厚さ1.3cmを測る。付け根部に2つの貫通孔を有する。

8はいわゆる中期後半のバンザイ土偶の腕である。胎土に水晶粒を含む。高さ1.2cm、幅3.6cm、厚さ1.2cmを測る。この種の細い円錐形の腕はいわゆるバンザイ土偶の腕と見なしてきたが、獅子之前Aタイプの全体像が不明な点、前期の土器に水晶粒を含む点、遺跡から中期後半の遺物が出土しない点などから、前期土偶の腕の可能性もないわけではない。ただし、ここでは水晶粒は含むものの、形態、胎土から中期土偶としておく。

	近畿	北陸	東海	中部・関東	東北(宮城)	東北(青森)
(草創期) 早期	 1	 2	 3  4	 13 花輪台Bタイプ  14 炭輪タイプ  17 木の根タイプ  18 花輪台Aタイプ		
前期	1 大塚南遺跡 2 近江大塚山1遺跡 3 近江大塚山2遺跡 4 近江二宮遺跡 5 近江三宮遺跡 6 近江四宮遺跡 7 近江五宮遺跡 8 近江六宮遺跡 9 近江七宮遺跡 10 近江八宮遺跡 11 近江九宮遺跡 12 近江十宮遺跡 13 近江十一宮遺跡 14 近江十二宮遺跡 15 近江十三宮遺跡 16 近江十四宮遺跡 17 近江十五宮遺跡 18 近江十六宮遺跡 19 近江十七宮遺跡 20 近江十八宮遺跡 21 近江十九宮遺跡 22 近江二十宮遺跡 23 近江二十一宮遺跡 24 近江二十二宮遺跡 25 近江二十三宮遺跡 26 近江二十四宮遺跡 27 近江二十五宮遺跡 28 近江二十六宮遺跡	 5 大曲輪タイプ	 6  9 炭輪室Bタイプ  11 炭輪室Aタイプ	 19  20  12  15 獅子之形Bタイプ  10 獅子之形Aタイプ  8  16	 21  22  23  24  25  26	 27  28

11もバンザイ土偶の腕である。高さ0.8cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmを測る。砂粒を多く含んだ赤色を呈する土偶である。

11は高杯の脚部状の不明土製品で、上半部は失われている。高さ6.5cm、幅4.9cmを測る。裾部を欠いているので厚さは不明。この欠損部に縦に2つの貫通孔を観察できる。

2. 前期土偶の変遷と分類 (第82図)

(1)はじめに

いわゆる発生期の土偶については原田昌幸の分類があるが、乳房を持つタイプと持たないタイプに大きく分類されそうである。この2系統は茨城県花輪台貝塚の土偶にすでに見られる。原田が花輪台タイプとしたものは、乳房を持つものと持たないバイオリン形を含むものである。乳房を持つものを花輪台Aタイプ(18)と、持たないものを花輪台Bタイプ(13)としておく。これに近畿地方の押型文土器に伴う神並タイプ(1)のおおよそ3タイプが早期土偶に認められよう。

前期の土偶は国内では概ね北から、円筒下層式に伴う土偶、前期大木式に伴う土偶、関東および中部地方の諸磯式に伴う土偶、例は少ないが北白川下層式に伴う土偶というように分けられそうである。ただし関東地方では、埼玉県浦和市井沼方遺跡の関山式に伴う土偶や、茨城県内畑遺跡の浮島式に伴う土偶の出土があり、順次資料が増えつつあり、空白部は埋められそうな状況にあるので、系統的連続性を追ってみたい。ただし土偶の形は時間と場所を越えて突如として現れることがあり、形が類似するからといって関連があるとは限らないのである。

(2)関東および中部地方の前期土偶

関東および中部地方の前期土偶は、前期初頭の井沼方遺跡の乳房を持つ板状土偶(19)がある。頭部がやや膨らみ突出し、腕は水平に伸びるようで、下半身は不明だがおそらくは花輪台Aタイプにつながるものであろう。内畑遺跡の浮島式に伴うものは希少な例で、諸磯b~c式の土偶が群馬県内での出土が目立つ。黒浜式期の土偶は釈迦堂遺跡に6個体あり、山梨県内では諸磯b式の土偶も数遺跡から出土している。

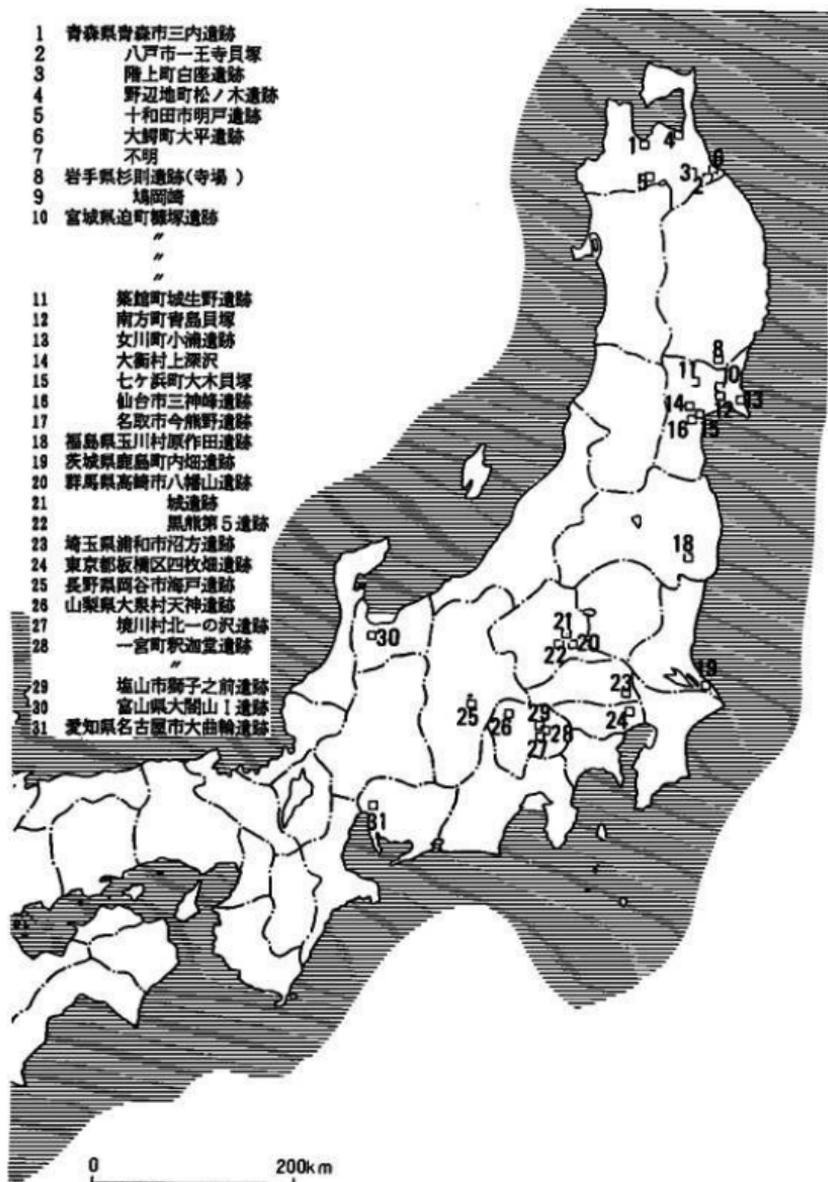
釈迦堂遺跡の黒浜式並行の土器は釈迦堂Z3式と呼ばれ、繊維を含まない薄手の縄文土器である。長野県の阿久遺跡の第Ⅲ段階の土器と同一の型式である。該期の土偶はいずれも板状であるが、3つのタイプに分類される。長方形の板を首、腰、股の部分を切り込んだような形をもつ乳房のない釈迦堂Aタイプ(11)。丸い頭、水平に伸びた腕をもち、乳房のない釈迦堂Bタイプ(9)。頭部に貫通孔をもち、腕は水平に伸び、乳房をもつ大曲輪タイプ(6)の3種類である。これに今回獅子之前遺跡で検出された有脚立像型土偶の獅子之前Aタイプ土偶(10)とおそらくは花輪台Bタイプの系譜を引くと思われる乳房のない頭部のあるヒョウタン形の獅子之前Bタイプ土偶(15)が存在するであろう。

(3)各タイプの変遷

さて、各タイプごとに変遷を考えてみよう。花輪台Aタイプの土偶は、愛知県二股貝塚(4)、埼玉県井沼方遺跡(19)、愛知県天神遺跡、富山県大間山Ⅰ遺跡(2)の段階を経て、群馬県八幡山遺跡(20)につながるものと思われる。

- 1 青森県青森市三内遺跡
- 2 八戸市一王寺貝塚
- 3 階上町白塚遺跡
- 4 野辺地町松ノ木遺跡
- 5 十和田市明戸遺跡
- 6 大崎町大平遺跡
- 7 不明
- 8 岩手県杉町遺跡(寺塚)
- 9 鳩岡崎
- 10 宮城県迫町糠塚遺跡

- 11 築館町城生野遺跡
- 12 南方町青島貝塚
- 13 女川町小涌遺跡
- 14 大衡村上深沢
- 15 七ヶ浜町大木貝塚
- 16 仙台市三神峰遺跡
- 17 名取市今熊野遺跡
- 18 福島県玉川村原作田遺跡
- 19 茨城県鹿島町内畑遺跡
- 20 群馬県高崎市八幡山遺跡
- 21 城遺跡
- 22 黒龍第5遺跡
- 23 埼玉県浦和市沼方遺跡
- 24 東京都板橋区四枚畑遺跡
- 25 長野県岡谷市海戸遺跡
- 26 山梨県大泉村天神遺跡
- 27 埴川村北一の沢遺跡
- 28 一宮町釈迦堂遺跡
- 29 塩山市獅子之前遺跡
- 30 富山県大岡山1遺跡
- 31 愛知県名古屋市中村区大曲遺跡



第83圖 縄文前期土器出土分布圖

花輪台Bタイプの土偶は花輪台貝塚から原田の言う夷塚タイプの沈線文系の埼玉県西大宮バ
イパス№4遺跡(14)などに引き継がれ、諸磯b式期の獅子之前Bタイプの獅子之前遺跡、山梨
県天神遺跡、北一の沢遺跡、釈迦堂遺跡、群馬県城遺跡の土偶の段階を経て、諸磯c式期の群
馬県黒熊第5遺跡(16)につながるものと考えられる。

大曲輪タイプの土偶は愛知県大曲輪遺跡(5)で北白川下層式土器と共に2点検出されており、
釈迦堂例(6)を含めて3点ある。このタイプは諸磯b式期の城遺跡土偶(7)に引き継がれると思わ
れる。また、孔に注目すれば黒熊第5遺跡例(8)は乳房はもたないが5つの孔がある。乳房を持
たないものでは前期大木式の宮城県糠塚遺跡(25)の土偶や中期初頭の大木式に伴う土偶にも有
孔のものが見られ、何らかの関係があるのかもしれない。

釈迦堂Aタイプ(11)も類例に乏しかったが、獅子之前遺跡で胸部部が1点、腰足部が1点出
土しており、時期的にも同一で、該期の安定したタイプであることが明らかになった。

獅子之前Aタイプ(10)は有脚立像形土偶がこの時期から存在したことを明らかにしている。
この土偶は脚の部分であるが、諸磯b式特有の浮線文がなければ中期後半の土偶と見間違っ
たほどである。

(4)円筒下層式の土偶

円筒下層式に伴う土偶は丸みを帯びた逆三角形に頭部が付き、また乳房と臍が粘土瘤で表現
される。これは型的にも安定した円筒下層式土偶である。前期大木式土偶の後半期には乳房
を持つ土偶がないにもかかわらず、円筒下層式土偶は乳房を持ち往々にして、臍を持つので
ある。

(5)前期大木式の土偶

大木式の土偶は5体が表現され、乳房を持つ杉則タイプ。形態は数種あるが、胸部にくぼみ
を有する糠塚Bタイプ、下半身のみだが有紋のあるタイプがある。大木2a式に比定される岩
手県杉則遺跡の土偶は釈迦堂Aタイプにも類似するが、明確に乳房の表現があり顔の部分がや
や膨らむのである。糠塚遺跡土偶は胸部にくぼみを持つことを特徴とする。この胸部にくぼみ
を持つ土偶は単発的に他の地域でも見られ、土偶の一つの表現と思われる。有紋のタイプはあ
るいはこの糠塚タイプの下半身であるかもしれない。

なお、長野県海戸遺跡の諸磯b式期に比定される単純な糸巻形をなす土偶(12)にもくぼみが
あり、糠塚タイプと類似した土偶表現と考えられる。

(6)まとめ

獅子之前遺跡出土の前期土偶は、黒浜式期に並行する釈迦堂Z3式期の釈迦堂Aタイプ2点
と花輪台Bタイプの系譜を引く獅子之前Bタイプがあり、全く新しい有脚立像形の獅子之前A
タイプの土偶がある。

県内では釈迦堂Z3式期の遺跡の調査例は僅かであるが、釈迦堂遺跡と獅子之前遺跡で合
わせて8点の土偶が検出されたことは、該期に土偶が多いことを暗示している。また獅子之前B
タイプの土偶は各遺跡で1点づつと数少ないが、広い分布を示している。また新しい獅子之前
Aタイプの土偶は前期土偶観を変える重要な発見である。

このような前期土偶を出土する遺跡は、山梨県花鳥山遺跡のように大遺跡では出土がなく、天神遺跡のような集落全体を掘り上げたような遺跡でも1点と数少ない。また著名な長野県阿久遺跡では全く出土を見ないなど、原田が早期の土偶に既に指摘した「土偶が特定の遺跡に集中する傾向」は、前期においても追認されたのである。(小野正文)

〔参考文献〕

- 原田昌幸 1983 「発生期の土偶について」『奈和21』
- 原田昌幸 1987 「縄文時代早期の土偶—発生期の土偶をめぐる—」『考古学ジャーナル』272
- 原田昌幸 1987 「縄文時代の初期土偶」『MUSEUM』434
- 篠原 正 1986 「金堀遺跡出土の土偶に関する一考察—縄紋時代草創期後半の土器と土偶—」『研究紀要』I 印旛郡市文化財センター
- 内田憲治 1988 「城遺跡」『群馬県史資料編』I
- 茂木由幸 1988 「黒熊第5遺跡」『群馬県史資料編』I
- 飯島義雄 1990 「縄文社会の信仰遺物」『群馬県史資料編』I
- 三宅徹也 1989 「十字形土偶」『季刊考古学』
- 名古屋市立博物館 1982 『東海の縄文時代』
- 青木義裕 1980 『井沼方遺跡』浦和市教育委員会
- 磯部幸雄ほか 1965 「愛知県知多半島南端における縄文文化早期末～前期初頭の遺跡」『古代学研究』41
- 岸本正敏ほか 1986 『大間山I遺跡』富山県教育委員会
- 山梨県立考古博物館 1983 『土偶』
- 小野正文 1987 「土偶およびその他の遺物」『釈迦堂』I 山梨県教育委員会
- 小笠原好彦 1984 「縄文時代前・中期の土偶」『宮城の研究』
- 戸沢充則編 1973 「海戸遺跡」『岡谷市史』

第2節 弥生時代の土器について

1. 縄文時代晩期～弥生時代中期の土器群 (第85図)

獅子之前遺跡では調査区北端部より縄文時代晩期末～弥生時代中期初頭の土器群が検出されている。これらの遺物が出土した地点は80号土坑(1～18)およびその周辺である。器種は壺と壺が大半であるが、破片資料のため器種の特定が困難なものも多い。以下、帰属時期と施文技法を中心に分類を行い、該期の土器を観察したい。

第I群 縄文時代晩期終末の土器

この時期に比定される資料は32の1点のみである。口縁端部に山形小突起を有し、口縁下に2条の凹線をめぐらす。頸部は無文。胴部以下の部分は欠損しているが、この種の甕では頸部がわずかにくびれ、肩部に稜を持ち、胴部下に細密条痕ないしヘラケズリを行う例が多い。中部地方では水Ⅰ式の浮線土器に伴う甕と判断される。

第Ⅱ群 弥生時代前期末～中期初頭の土器群

1類 (5～28・31・34～38)

条痕文を特徴とする土器。破片資料のため甕、甕の器種が判断できるものは少ない。条痕文の工具はその特徴から以下の1～5種に分類される(第84図)。

- 1種 二枚貝腹縁をもちいた貝殻条痕文。条間の幅は一定で、条溝は浅い。
- 2種 クシ状工具による条痕文。条間の幅は一定で、条溝は浅い。
- 3種 植物の枝茎を束ねた簡単な工具による条痕文。条間の幅は不揃いで、条溝は深い。
- 4種 ヘラ状工具による条痕文。条間の幅は不揃いで、条溝断面が「L」字状に切り込む。
- 5種 先端部の丸い棒状工具による条痕文。条溝の幅は広く、溝が深い。

本遺跡の出土土器は貝殻を使用した1種は一点も認められず、3種および5種のものが多い。条痕の方向は、縦方向・横方向・斜行など単斜条痕が多く、明確に羽状を示す資料はない。19は口縁部に指頭圧痕を持つ凸帯がめぐり、頸部に条痕を施す甕である。これらの土器は東海地



1種



2種



3種

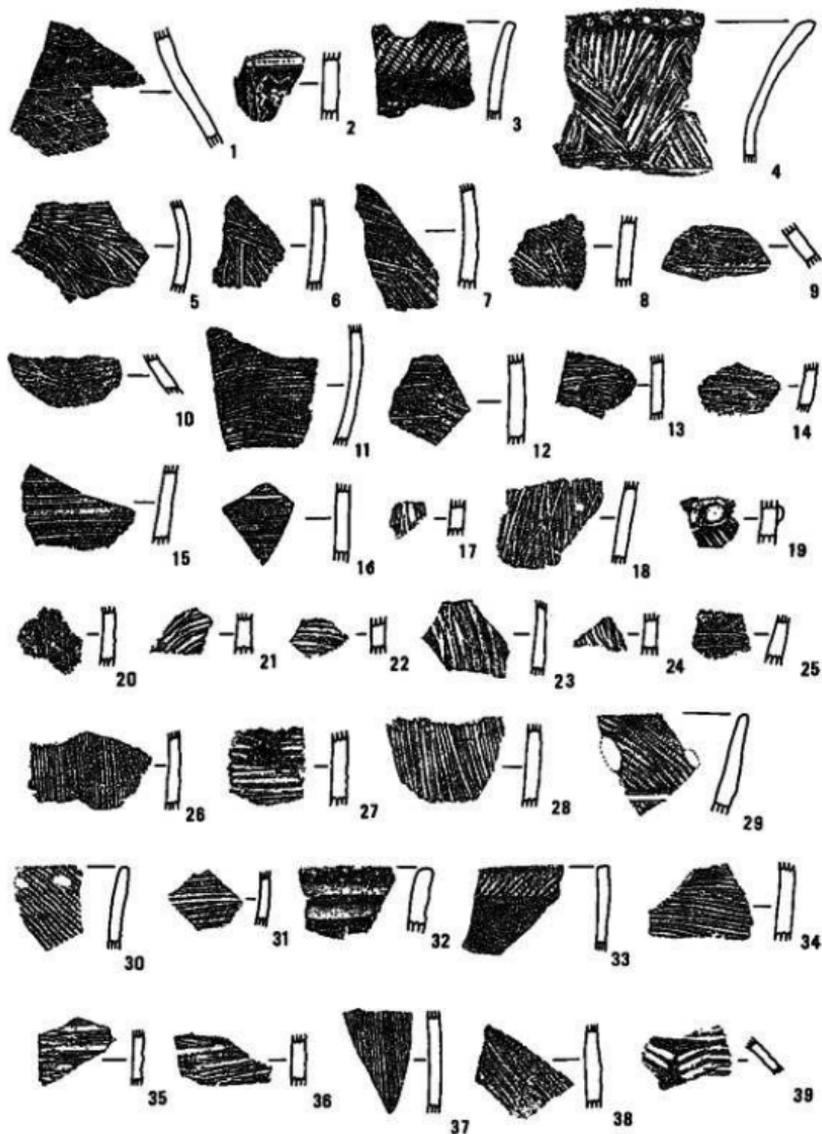


4種



5種

第84図 条痕文の分類



第85図 縄文時代晩期末～弥生時代中期の土器 (S=1/3)

方西部地域の水神平系条痕文土器の影響を受け、中部地方で独自の展開を示す土器群である。

2類 (3・29・30・33)

口縁部の縄文帯を特徴とする甕。3および33は0段3条のLR縄文を原体としている点で共通している。3は縄文下部には文様は認められず、ヘラナゲの痕跡を残す。他方、30・33は口縁部にRL縄文を施し、長円形の凹みを一定間隔に配している。

3類 (4)

口縁が大きく外反し、縦方向の羽状文をもつ甕。口縁端部にヘラ状工具による刻目がめぐる。口縁下には棒状工具による縦方向の羽状文が施文される。頸部にはわずかに横位の沈線が認められる。

4類 (2・39)

細頸型と考えられるものである。2は頸部に縦方向の隆帯が走り方形区画文を形造ると思われる。区画内部には棒状工具により波状沈線文や斜行沈線文などが施されている。39は肩部破片のみで全体の形態が不明であるが本類に含まれる可能性が高い。肩部には棒状工具による平行沈線を鋸歯状に配している。

2. 第Ⅰ群土器について

獅子之前遺跡出土の縄文時代晩期末から弥生時代中期初頭までの土器群に並行する資料は山梨県内でも近年徐々に増加してきているが、本遺跡第Ⅰ群としたもののなかには、県内では初見の資料も存在する。それらの類例を探る中で、本遺跡第Ⅰ群土器の内容について若干説明したい。

条痕文土器とした1類土器は、東海地方西部地域の水神平系条痕文土器の影響を受けたもので、中部地方でも独自の展開を示すことが近年明らかにされてきている。県内では大泉村金生遺跡A地区17号住居址⁽¹⁾の浮線文土器に伴って出土した榎王式段階の条痕文土器がもっとも古い。弥生時代前期後葉に並行する時期では、それまでの浮線文土器群は姿を消し条痕文土器が主体を占めるようになるが、甕等の器形の中に水Ⅰ式の特徴を形骸的に受け継ぐものも存在する。この時期の条痕文土器群は、長坂町柳坪遺跡⁽²⁾、敷島町金の尾遺跡⁽³⁾、都留市宮原遺跡⁽⁴⁾、河口湖町鶴の島遺跡⁽⁵⁾等で出土している。中期初頭の条痕文土器は都留市生出山山頂遺跡⁽⁶⁾、中道町米倉山遺跡⁽⁷⁾等で知られており、東海地方東部の丸子式との類似点も多い。

本遺跡の条痕文土器は弥生時代前期後葉から中期初頭の資料と判断されるが、破片資料のためそれ以上の時期特定は難しい。

2類とした口縁部に縄文帯を持つ資料は、この時期の関東地方に類例が多い。これらの甕は口縁部に縄文帯を持ち、頸部に無文帯、胴部に三角連繫文等を配する甕と考えられる。29・30の様に縄文帯に列点状の無文部を持つ例は群馬県大胡金丸遺跡⁽⁸⁾等で知られるが、列点ではなく沈線や波状沈線文となるものは群馬県岩櫃山遺跡⁽⁹⁾や千葉県天神前遺跡⁽¹⁰⁾などでも出土している。

3類の縦方向の羽状文の特徴は、水神平式段階の縦位羽状条痕文に起源を持つと考えられて

いるが、施文具が貝殻やクシ状工具ではなく棒状工具である点や、羽状文が崩れていることから後出的な要素が多い。本遺跡出土資料に類似するものは長野県緑ヶ丘遺跡(10)の中期初頭の土器の中に知られている。

4類の細頸壺は弥生時代中期初頭に発達する器種であり、県内では大泉村寺所遺跡(2)や河口湖町鶴の島遺跡(3)等で断片的に知られているにすぎない。2のように頸部に隆帯区画をもつ例は、栃木県出流原遺跡(14)、千葉県天神前遺跡(15)等で確認されている。

以上第Ⅰ群とした土器群は、概ね弥生時代前期後葉から中期初頭に比定される内容を有しており、この中でも文様構成が明確な2～4類土器は中期初頭に限定される資料と考えられる。

(中山誠二)

[註]

- (1) 中山誠二 1985 「甲斐における弥生文化の成立」『研究紀要2』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (2) 末木 健 1975 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂・明野・葦崎地内』山梨県教育委員会
- (3) 末木健ほか 1987 『金の尾遺跡・無名墳(きつね塚)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第25集 山梨県教育委員会
- (4) 前掲(1)と同じ。
- (5) 前掲(1)と同じ。
- (6) 奥 隆行 1976 『都留市の先史遺跡(上)』都留市教育委員会
- (7) 都留文化大学考古学研究会 1968 「山梨県東八代郡中道町米倉山遺跡第1トレンチ出土遺物について」『甲斐考古』5の1
- (8) 設楽博己 1983 『大胡金丸遺跡』『第4回三県シンポジウム 東日本における黎明期の弥生土器』北武蔵古代文化研究会他
- (9) 井上裕弘 1971 「群馬県岩櫃山発見の弥生土器」『考古学集刊』4-4
- (10) 杉原荘介・大塚初重 1974 『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』明治大学文学部研究報告考古学第四冊
- (11) 大田喜幸・河西清光 1966 「長野県東筑摩郡明科町七貴緑ヶ丘遺跡調査」『長野県考古学研究報告書1』
河西清光・大田喜幸 1983 「緑ヶ丘遺跡」『長野県史考古資料編主要遺跡(中編)』
- (12) 新津 健 1987 『寺所遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第27集
- (13) 山梨県考古学史資料室保管資料のなかに存在する。山本寿々雄氏の御教示。
- (14) 杉原荘介 1984 『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群』明治大学文学部研究報告第八冊
- (15) 前掲註(10)と同じ。

第3節 平安時代の土器について

1. 出土土師器の時期区分（第86図～第87図）

本遺跡は平安時代の住居址が10軒確認されており、ここでは各住居址から出土した土師器を整理し、その変遷について触れてみたい。

〔Ⅰ期〕坏・小型甕・甕が出土している。坏は底径の大きな箱形を呈し、外面下半部にヘラ削りが施され、上半部には横方向のヘラ磨きが見られる。高台付坏は身の深い大振りのものとなる。甕は球胴を呈するものと、肩部に若干の張りがある長胴形を呈するものが見られる。球胴を呈するものは、外面に縦方向のハケ調整が施される。長胴形を呈すると思われるものは、内面は横方向、外面には縦方向のハケ調整が緻密に施される。8世紀第4四半期に位置付けられる。

〔Ⅱ期〕坏・小型甕・甕が出土している。坏は底径が大きく身が深い器形で器体下半に膨らみをもつ。内外面とも横ナデ調整がみられ、内面にはみこみ部にまで暗文が施される。外面下半部、底部には糸切り後周縁部にヘラ削りが施される。甕は小型のものが見られるが、内面には横方向、外面には縦方向のハケ調整が施される。口縁部の反りは僅かに見られる。9世紀第2四半期～9世紀第3四半期に位置付けられる。

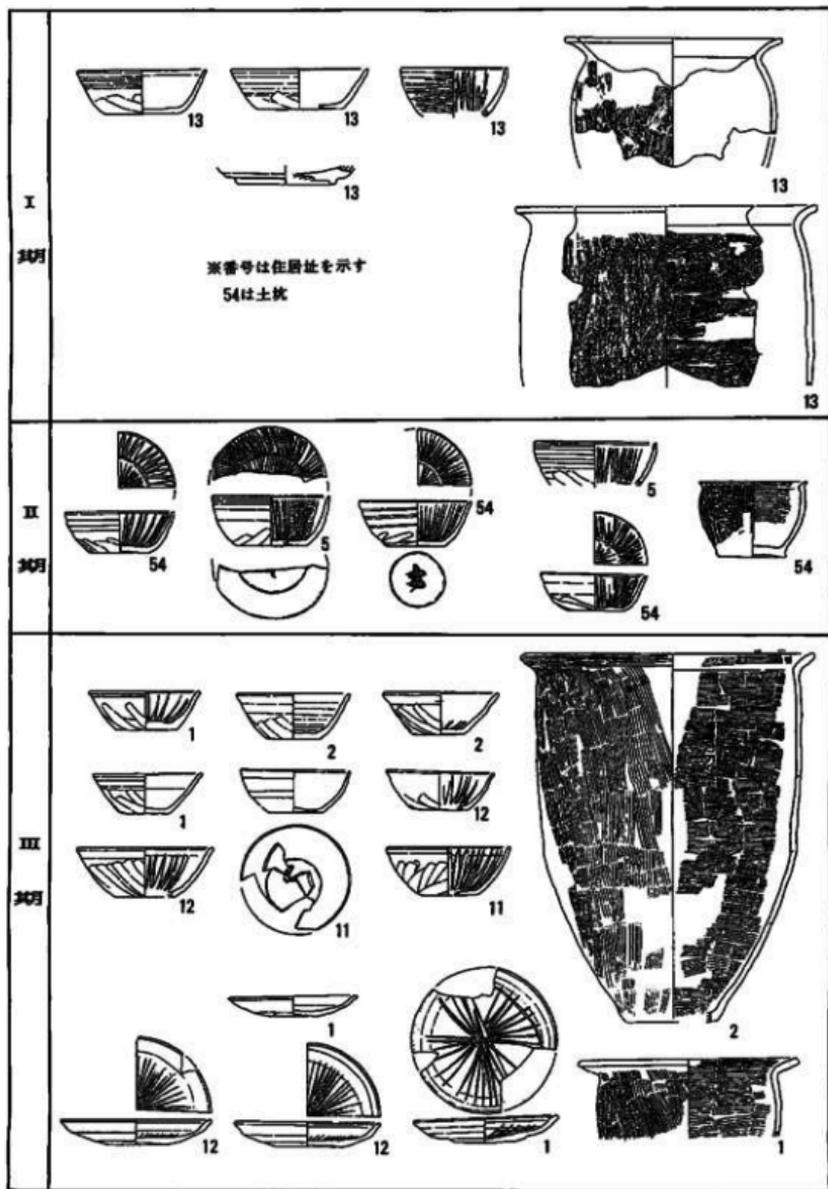
〔Ⅲ期〕坏・皿・蓋・甕が出土している。坏は内外面とも横ナデ後、外面下半部、底部に糸切り後周縁部にヘラ削りが施される。暗文は身部内面に施され、みこみ部には見られない。Ⅱ期に見られるような器体下半部の膨らみは見られず、底径はⅡ期に比べ小さくなる。皿は盤状で、大きな底部と内面にくびれを持ち、口縁部が段を作って立ち上がる。内外面は横ナデ調整後外面下半部に回転ヘラ削りが施され内面みこみ部に暗文が施されるが、ないものも見られる。蓋は内外面とも横ナデ調整、内面に同心円状のヘラ磨きが見られる。甕は長胴甕で、内面には横方向、外面には縦方向のハケ調整が見られる。9世紀第四半期に位置付けられる。

〔Ⅳ期〕坏・皿・甕が出土している。坏は内外面とも横ナデ調整、外面下半部および底部には糸切り後、全面にヘラ削りが施される。口縁は玉縁状になり底部もⅢ期に比べ極端に小さく、内面には暗文がみられなくなる。内面が内黒なものも見られる。皿は、内外面とも横ナデ後、外面下半部および底部に全面ヘラ削りが施される。口縁は坏同様、玉縁になっている。甕は口縁部が胴部に対して肥厚している。10世紀第3四半期に位置付けられる。

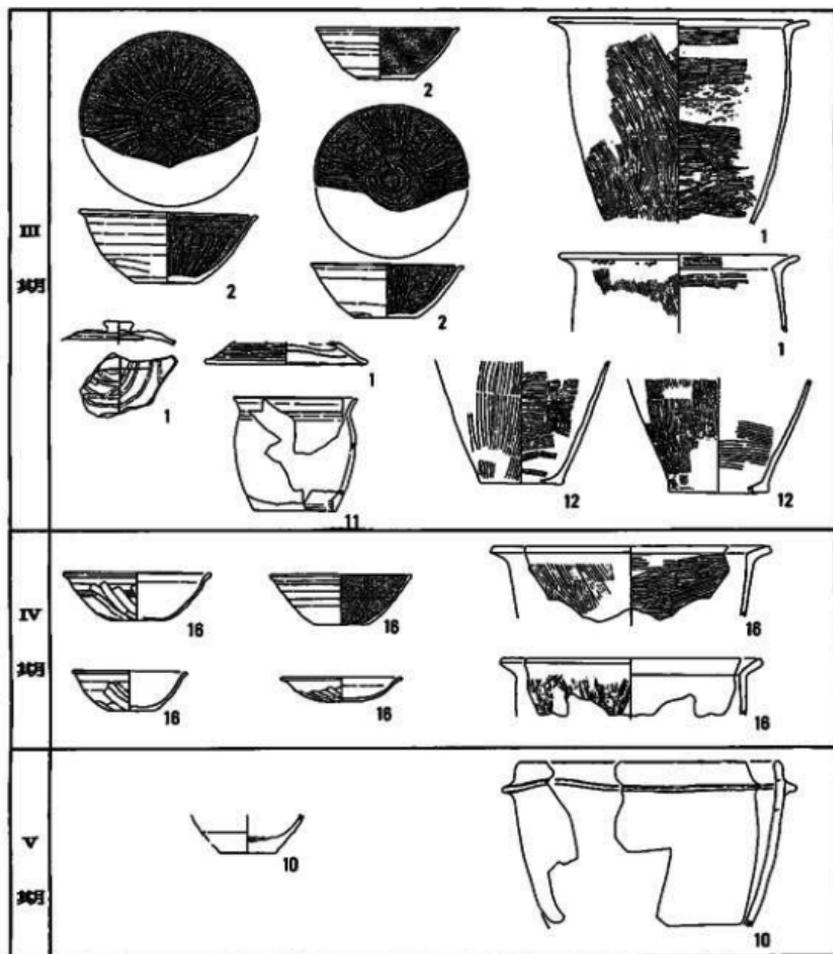
〔Ⅴ期〕坏・羽釜が出土している。坏は厚い作りで、内外面とも横ナデ調整が施される。外面下半部にヘラ削りなどは見られない。底部は、糸切り後にヘラ削りなどのようなものが施され糸切り痕は見られない。胎土は、砂粒が多く含まれるようになる。羽釜は、坏と同様内外面とも横ナデ調整が施され、胎土についても砂粒が非常に多く見られる。12世紀前半をあてる。

2. まとめ

以上のように出土土師器の時期は分類されたが、これを遺物が出土した遺構別に見てみると、



第86圖 魏子之前遺跡出土土師器類年圖(1)



第87図 獅子之前遺跡出土土器器種年表(2)

I期1軒(13号住)、II期1軒(5号住)・土坑1基(54土)、III期4軒(1・2・11・12号住)、IV期1軒(16号住)、V期1軒(10号住)となる。このように8世紀後半から12世紀前半まで継続ではないにしろ、この時期に幅広く居住していたことが確認され、いままで塩山市域において該期の遺跡はあまり確認されておらず、古代の「郷」の関係などは解明されていない。今後本遺跡周辺地域の平安時代集落の資料が増加すれば、当地方における「郷」関係が浮き彫り

にされるのではないと思われる。今後の発掘調査が期待されるところである。

(高野文明)

[参考文献]

- 坂本美夫・末木健・堀内真 1983 「甲斐地域」『シンポジウム奈良・平安の諸問題』神奈川考古14号 神奈川考古同人会
- 山梨県教育委員会 1984 『豆塚遺跡・東新居遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第4集
- 山梨県教育委員会 1985 『北瀬遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第7集
- 山梨県教育委員会 1985 『笠木地蔵遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第12集
- 山梨県教育委員会 1986 『柳坪遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集
- 武川村教育委員会 1988 『宮間田遺跡』

第4節 近世以降の遺構について

1. 道路遺構の事例とその性格

近世以降の道路遺構については、その発掘例はあまり知られていない。それは現在も継続して道として利用されている例が多く、遺跡として意識されていないためかもしれない。古代・中世の道路遺構例としては、東京都多摩市の打越山遺跡⁽¹⁾や埼玉県で『歴史の道』調査の一環での発掘例⁽²⁾などがあげられる。多摩市の打越山遺跡の例では、尾根の最上部を断面U字形に掘り込んで溝状にして、その底部に厚さ数センチほどのロームを盛って道としているもので、幅は4m前後であるという。埼玉県の例では4箇所の発掘が行われて掘割状の道路遺構が確認されている。

獅子之前遺跡では、前記の類例とは性格が異なるが、近世以降の道路遺構が確認された。まず発見された遺構が本当に道路跡であるのかどうかという問題があるが、検討の末、道路以外には考えられないという結論に到達した。その理由としては、

- ①遺構面が住居址の床面よりも硬く踏み固められている、あるいは版築されている点。
- ②遺構面の傾斜が住居址床面と比較するとかなりきつい点。
- ③硬い遺構面が一定の幅で長く連続して絶えることがない点。
- ④遺構埋土から、遺構そのものの性格を決定づける遺物が全く出土しない点。
- ⑤遺構直上の埋土が総体的に締まりがなく、現在からそう古くない時代に人為的に埋められた可能性が高い点。

の5点があげられ、これらの性格が住居址等の一般的な遺構とは異なるものであることを示唆している。以上の考古学的理由以外にも古絵図と現状との比較・検討を行うことにより、道路遺構である可能性は更に高められるであろう。

近世の道路で獅子之前遺跡発見例ほどの規模(幅)を有するのは主要な街道クラスのもの

考えられる。この道路遺構は、その時代性と地域性を考慮すれば、いわゆる青梅街道以外あてはめる例はないと思われる。青梅街道については既に県教育委員会から『山梨県歴史の道調査報告書 第9集』⁽³⁾（以下『歴史の道』という。）として報告書が刊行されているので、そこから街道の概要を書き出してみよう。

2. 青梅街道について

青梅街道は東京の新宿から杉並区馬橋・青梅・大菩薩峠・塩山市市街地・山梨市を経て甲府に至る延長約200キロメートルの脇往還であり、甲州街道に対して甲州裏街道とも呼ばれた。青梅街道の起源は慶長8年(1603)の徳川家康による江戸城の大規模修築工事に始まるといふ。つまり江戸城城壁を堅牢優美にするための良質な石灰を青梅付近に求めたため、江戸・青梅間に街道を開いたものとされる。これはあくまでも江戸側からの起源であるが、甲州側からみれば近世以前、中世の時代から甲斐武田氏にとって軍事的にも経済的（金運搬等）にも広く利用されていたことは間違いないと考えられている。

江戸時代を通して利用されてきた青梅街道も、明治時代にはいと明治8年から同11年の間に大規模な改修工事が行われる⁽⁴⁾。とくに現在の塩山市内での工事は、屈曲した部分の直線化と橋の架け替えが重点的に実行されたようである。少し時代は下るが明治21年測量の陸地測量部の地図『七里村』では、現在の塩山市の国道411号とはほぼ同じルートの道が既に完成されている。ここでは発掘された遺構とは最も強い関連性を有する江戸時代末以降の青梅街道を取り上げる。

さて、甲府から塩山までのルートの概要をみると、青梅街道は甲府市山崎三叉路で甲州街道と分かれ、春日居町を経て山梨市に入る。笛吹川を越えて山梨市小原四つ角までは狭父街道と重用されている。塩山市に入ると現在の塩後踏切の手前から塩山市上小田原の萩原口留番所跡に至る間は、北線と南線の二つのルートに分かれていた。北線は向嶽寺山門の前を通過し温泉場をぬけ袖切坂を登る。そして竹森川と重川の合流点南で千野橋により重川を渡る。南線は神田天神社・塩山市役所の前を通過し塩山駅付近から左折し赤尾橋により重川を渡るものである。いずれのルートも現在はかなり形状が変更されていることは間違いないであろう。

3. 獅子之前遺跡の道路遺構について

さて、獅子之前遺跡で発見された道路遺構の時期について考えておく必要がある。まず明治時代の陸地測量部の地図による道路の位置から見て、獅子之前遺跡の道路遺構は明治21年以前に埋められたことは確実である。次に発見された道路遺構中より出土した土製品が明治時代のものである点があげられる。最後に道路遺構の埋没状況からみると現在からそう古くない時代の大規模な土木工事により埋められたことは間違いない。これら3点から推測すれば、記録上そのような土木工事が行われたのは先にも記した明治8年から同11年の道路改修以外になく、遺構からの出土遺物等も時期的に一致している。結論とすれば、この道路遺構は明治時代以前（江戸時代後期頃）から明治11年頃まで利用されていたものと考えられる。



第88圖 明治時代の塩山 (S=1/25000)

『歴史の道』の報告書でも頻りに利用されている資料で、中巨摩郡田富町西花輪の内藤家所蔵の『甲斐国志草稿本及び編集諸資料』（県指定文化財）がある。これは甲斐国志編纂のために各村々から書き上げさせた資料集であるが、獅子之前遺跡にあたる場所が明示された古絵図も存在している。文化4年（1807）6月に地元の名主により作成された千野村の絵図である。（図版11）。江戸時代後期以降、千野村で道のルート変更が実施されたという記録等も存在しないことからすれば、獅子之前遺跡で検出された道路遺構は、現存する寺社等の絵図の中での位置などを観察すると、絵図の中に位置が表記されている可能性が高い。

この内藤家絵図は現存する寺社・道筋・橋・河川・山等が極めて正確に表示されており信頼性の高い資料となっている。先に記した青梅街道の北線・南線の別からいえば千野村の絵図に示された道筋は北線にあたるはずである。絵図の中では太い線で表現された2本の道筋が存在するが、これらは当時地元の住民にとって、まさに『本通り』とでも言える道筋であったに違いない。1本は北の山裾を通る道、もう1本は塩山の東から北上して慈徳院のすぐ北を東に折れていく道であり、これら2本は千野橋の手前で合流している。当然青梅街道の北線は、慈徳院経由のルートにあたるかと考えて間違いないであろう。

『歴史の道』では地図上に北線・南線の推定ルートが明示されている。北線では慈徳院の東側を通過するところまでは絵図と一致しているが、その先東へ折れずに更に北上した後に、一本北の道を東に折れている。「村絵図は距離や路相はあてにならないが、通過位置などポイントとなるところは比較的正確に画いているものである。」⁽⁵⁾から、この一本の道の差は大きいものであろう。絵図には慈徳院の北へ更に延びる道も細く表現されているから、青梅街道の北線について言えば、少なくとも文化年間には慈徳院を一つのポイントにして東に折れていたことは確かではないだろうか。『歴史の道』で青梅街道北線として記述された慈徳院北より一本北側の道は、絵図では太線で表現され別の本通りと思われる道筋の一部となっている。

道路遺構の青梅街道北線における位置について考えてみたい。その場合この道路遺構には留意すべき点が3つある。

- ①道路遺構が三叉路（交差点）を呈している。
- ②道路遺構が重川の川岸から数十mしか離れておらず、極めて川に近いところに位置している。
- ③道路遺構の幅（硬く踏み固められた面の幅）が2m～4mと広く、近世の道の規模としては街道クラスと思われる。

これらの3つの条件を満たす場所を千野村絵図の中に求めると、たった一つの場所しか存在しない。それは太い線で表示された2本の道筋が合流する地点（図版11中の黒丸地点）である。つまり青梅街道北線の道と千野村・小屋敷村を結ぶ道（おそらく当時の地元住民にとっては青梅街道と同等に生活上重要な道であったに違いない）の合流点が、獅子之前遺跡で検出された交差点であろう。

最後に獅子之前遺跡で確認された道路遺構と現道との関係を見てみたい。道路遺構は三叉路であり三方向に道が延びているわけである。一本は北東方向重川・千野橋方面へ、一本は南西

方向慈徳院方面へ、残りは西方向小屋敷方面へ向かっている。さて、現道を観察してみると、

①北東へは現道として重川方向へ下り、途中から川沿いに走って新千野橋の手前にでるものが存在する。

②南西へは現道の国道411号が走る。

③西へは現道として南下すると慈徳院へ、そのまま西へ向かうと旧小屋敷村にでるものが存在する。

これらの現道は先の千野村絵図の中で、獅子之前遺跡の位置の周囲を観察すると、ほぼルートが一致するものが存在しており、当時の道と現道とが強い関連性を有していることは間違いないと思われる。明治時代の大改修工事により、青梅街道およびその周辺の道はルートの変更と不要部分の埋立が行われたものと考えられる。獅子之前遺跡の周辺には今なお旧青梅街道等の古道が埋蔵されていることは確実であると言えよう。今後獅子之前遺跡で発見された道路遺構につながるものが発掘される機会があれば、近世以降の古道の実態が更に明らかにされていくであろう。

(米田明訓)

[註]

- (1) 埼玉県教育委員会 1983 「鎌倉街道上道」『歴史の道調査報告書第1集』
- (2) 東京都多摩市教育委員会の中島庄一氏の御教示による。
- (3) 山梨県教育委員会 1986 「青梅街道」『山梨県歴史の道調査報告書第9集』
- (4) 飯田文弥ほか 1978 『山梨県政百年史 上巻』山梨県
- (5) (3)と同じ

第5節 獅子之前遺跡出土植物遺残について

獅子之前遺跡の土坑(縄文前期)と住居址(縄文前期・平安)から出土した炭化植物遺残について、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察を行った。試料は16点あり、住居址からの試料が11点、土坑からの試料が4点、グリッドからの出土が1点である(表1)。

[観察結果] 実体顕微鏡による観察の結果、果実の核(A)、堅果類?(B)、球根類(C)の三種類に分けられる。

A: 試料の3~6の4点あり、4点とも10号住居址カマド跡から出土している。外形が円形~楕円形をした厚い殻状の中に楕円形をした種子状のものが含まれているものであり、果肉を食べた後の核と考えられる。外側の残りのよい試料3と6では、試料3が楕円形で、試料6は円形に近く、試料4・5は外側の殻の部分が壊れているがほぼ同じ大きさで表2のように表される。大きさに若干の差があるが、異変と考えられ、同じ種類と推定される。表面の文様ははっきりしないが、小粒のウメの核に似ている。

B：実体顕微鏡で割れ目を観察すると、比較的内部が均質の様に見えるものである。外形の保存の良いもの（試料8・13）と、破片になっているもの（試料7・11・12・14）とがある。果皮の部分が消失したドングリで、幅の広い試料7などはカバノキ科のハシバミかとも考えられるが断定はできない。大きさは表3のようになる。

C：鱗片状の構造を持ち、ユリ科のネギ属の鱗茎に類似する。試料1・2・9・10・15・16の6点ある。試料1は外形が楕円形であるが、割れ口を見ると、均質ではなく何枚かの層状構造を持つように見える。試料2は一見試料7と似ているが、やはり割れ口を見ると、試料1と同類と考えられる。試料9と10は外形から球根類と推定できる。直径は約8mmである。試料15・16は外形の保存状態が良くないが、実体顕微鏡下で鱗片状の構造が認められる。これらは県内の水呑場北遺跡、花鳥山遺跡出土土器に付着したオコグヤや釈迦堂遺跡から出土した球根状炭化物（長沢1989・松谷1989）と同類と考えられる。これらにつき走査型電子顕微鏡での観察を行ったところ、同じ構造を有し、水呑場北遺跡出土物などと同じく、ユリ科のネギ属と考えられる。従来あまり気付かれずに過ぎていた球根類が長沢氏の観察眼によって検出されていることは、注目に値する。

（松谷暁子）

【参考文献】

長沢宏昌 1989 「縄文時代におけるエゴマの利用について」『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会

松谷暁子 1989 「水呑場北遺跡出土付着球根状炭化物の識別について」『花鳥山・水呑場北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第45集 山梨県教育委員会

	遺構	時代	種別	写真		遺構	時代	種別	写真
1	4住C-1	縄文前期	C	13	9	C-19G	縄文前期?	C	18、22-23
2	4住C-16	◇	◇	12	10	14住C-1	縄文前期	◇	16-17、26-27
3	10住カマド内C-1	平安	A	1・2	11	30土C-1	◇	B	10
4	◇ C-2	◇	◇	4	12	41土C-3	◇	◇	9
5	◇ C-3	◇	◇	3	13	◇ C-5	◇	◇	7
6	◇ C-5	◇	◇	5	14	◇ C-6	◇	◇	11
7	10住C-15	◇	B	8	15	8住C-10	◇	C	15、19-21
8	◇ C-17	◇	◇	6	16	◇ C-11	◇	◇	14、24-25

表1

	外側の殻状 (mm)		内側の種子状 (mm)	
	長さ	幅	長さ	幅
試料3	13	7	8	6
試料4	(10+)	(8)	8	5.5
試料5	(11)	(8)	8	5.5
試料6	9	8	7	5

※ () の数字は覆れていて不完全なもの。

表2

	長さ (mm)	幅 (mm)
試料7	(11)	(9)
試料8	13	10
試料11	10	/
試料12	11	(8)
試料13	10	(6)
試料14	/	(6)

※ () の数字は覆れていて不完全なもの。

表3

打製石斧一覽表

()は調査標識位置 単位(cm・g)

出土位置	形 態	長 径	基部幅	刃部幅	刃部厚	重量	石 材	出土位置	形 態	長 径	基部幅	刃部幅	刃部厚	重量	石 材		
1	12号住	短棒	9.4	3.8	4.2	円形	80.0	粘板岩	41	D36G	短棒	7.8	5.2	4.6	円形	48.7	粘板岩
2	4号住	短棒	10.8	3.8	5.0	新瓦	118.2	凝灰砂岩	42	C37G	短棒	10.0	4.7	4.5	底瓦	149.7	カヌツクス
3	12号住		9.2		(6.9)	(+)	97.6	中散砂岩	43	C34G		8.3		6.1	円形	92.2	粘板岩
4	3号住	分銅	7.9	4.1	5.0	円形	47.3	カヌツクス	44	C37G		(8.1)	(4.1)	3.9	+	54.7	カヌツクス
5	12号住	短棒	14.2	3.1	5.1	+	117.1	+	45	C36G	短棒	(6.3)	(4.7)	4.5	+	62.4	+
6	3号住	+	14.1	3.8	5.8	(新瓦)	65.5	+	46	C37G		(5.2)		7.0	+	42.8	粘板岩
7	+	短棒	10.9	3.0	4.4	底瓦	101.9	+	47	B14G	分銅	12.9	3.0	6.0	+	118.2	カヌツクス
8	4号住		(7.4)			円形	89.6	+	48	C21G	短棒	(13.4)	3.8	6.0		186.1	粘板岩
9	3号住	短棒	(12.3)	7.9	7.8	+	309.4	+	49	B37G	+	8.1	1.9	2.8	円形	23.3	カヌツクス
10	1号住	+	(12.5)	8.0	7.2	+	381.9	+	50	C26G	+	(6.4)	(3.2)	4.3		56.7	粘板岩
11	12号住		(5.8)		3.8		18.6	砂質粘板岩	51	D36G	+	8.2	4.2	5.6	底瓦	79.6	カヌツクス
12	4号住		(5.5)	2.8			12.5	カヌツクス	52	C37G	短棒	10.3	3.5	3.7	円形	90.1	+
13	3号住	短棒	12.1	7.9			206.2	粘板岩	53	B32G		(8.5)	(5.0)	3.4	+	36.0	粘板岩
14	2号住	短棒	(9.8)	(8.6)	8.7	新瓦	197.2	カヌツクス	54	B90G	短棒	(6.9)	2.8	(3.5)		47.5	カヌツクス
15	3+4号住	短棒	11.1	4.4	4.2	+	76.0	+	55	A13G	短棒	8.0	5.0	4.9	円形	55.4	+
16	4号住	短棒	7.5	4.3	4.7	円形	49.4	+	56	2号溝	分銅	11.4	8.5	9.5	底瓦	341.7	粘板岩
17	2土	短棒	(12.0)	5.4	5.5	+	177.0	+	57	+	+	10.8	8.6	8.2		168.2	+
18	37土	分銅	(9.5)	(4.4)	5.7	+	76.1	粘板岩	58	+	短棒	9.6	4.5	4.6	円形	70.6	カヌツクス
19	48土	短棒	(6.6)	3.9	4.6	底瓦	61.0	+	59	試掘	+	10.4	8.4	8.0	新瓦	247.4	粘板岩
20	39土	(短棒)	(6.8)	(3.8)	(5.3)		79.7	カヌツクス	60	C37G	短棒	10.1	4.1	5.9	+	69.3	+
21	8号住		(5.6)		(3.2)		36.2	瓦 岩	61	B11G	+	7.8	(3.2)	(4.6)		87.5	カヌツクス
22	40土	分銅	9.1	3.3	4.5	円形	64.2	カヌツクス	62	C19G		(4.7)		(4.7)		47.9	粘板岩
23	75土	(+)	(7.6)	(3.9)	3.6		38.0	粘板岩	63	2号溝		(6.6)	(4.4)	(4.9)		62.1	+
24	C17G	短棒	8.9	2.2	2.3	円形	26.3	+	64	D32G	短棒	11.4	4.9	5.3	新瓦	123.6	カヌツクス
25	C27G	短棒	(12.1)	4.6	5.5	(+)	127.4	カヌツクス	65	C16G	+	9.8	4.1	4.0	円形	76.6	+
26	B36G	短棒	11.9	4.0	4.6	+	132.2	+	66	試掘	+	14.7	4.5	5.0	+	145.5	+
27	D48G	短棒	10.6	5.2	4.5	+	64.8	粘板岩	67	川跡	短棒	(11.6)	(3.2)	4.4	+	97.8	+
28	C22G	+	10.4	(3.9)	3.9		48.5	+	68	A36G		10.4	3.6	3.3	+	45.1	+
29	B38G	分銅	27.7	8.1	13.5	円形	220.0	カヌツクス	69	C37G	短棒	12.0	3.6	5.1	新瓦	128.8	+
30	+	短棒	22.5	7.1	8.7	+	672.6	+	70	C34G	短棒	10.7	4.8	5.0	+	81.9	+
31	D36G	短棒	8.2	3.2	3.7	+	24.3	+	71	川跡	+	8.6	(3.2)	3.8	円形	91.8	+
32	C17G	短棒	8.4	4.3	5.2	+	66.7	粘板岩	72	黄土	+	10.4	3.6	4.2	+	62.2	+
33	A36G		18.4	6.7	6.7		265.9	カヌツクス	73	B35G		(6.6)	(4.6)	4.4	+	69.9	+
34	+	短棒	13.1	8.0	8.9	底瓦	201.2	+	74	川跡	短棒	11.2	3.7	5.0	+	143.6	粘板岩
35	C40G		9.7		8.9	+	192.6	粘板岩	75	C35G	+	7.5	(3.7)	4.7	(+)	33.9	カヌツクス
36	C22G	短棒	9.8	3.8	5.3	円形	76.0	+	76	試掘	+	9.3	4.2	5.0	底瓦	55.5	+
37	D37G	+	11.5	6.1	7.9	+	200.1	カヌツクス	77	B11G	+	8.3	3.2	(4.2)	(底瓦)	46.4	粘板岩
38	A36G		6.0	(8.9)	4.8	円形	61.1	粘板岩	78	D19G		(9.3)		(5.0)		61.8	カヌツクス
39	B36G		7.8	(5.6)	5.2	新瓦	61.2	+	79	D11G	短棒	8.6	(3.7)	(3.7)		83.8	粘板岩
40	C23G		7.8	(5.9)	5.7	円形	184.8	カヌツクス	80	C22G		8.1	(4.1)	4.2		86.4	カヌツクス

表 4 石器計測表(1)

磨石・凹石一覧表

()は現存標高位置 単位(m・g)

出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	石材	使用期	その他
1	3号住	9.6	6.8	4.7	262.3	安山岩	2
2	+	11.9	5.3	2.7	274.8	ホルンフェルス	2
3	+	(8.6)	(7.5)	4.2	277.5	花崗岩類	2
4	+	5.8	9.1	4.4	357.7	輝石安山岩	1
5	4号住	5.4	6.2	3.8	176.5	+	2
6	+	(9.0)	7.1	(2.6)	328.8	花崗岩類 (3)	
7	+	16.5	10.3	7.4	1474.5	中粒砂岩	1
8	5・6号住	9.0	6.7	4.4	376.4	花崗岩類	1
9	+	(9.2)	(6.3)	6.0	405.5	+	2
10	5号住	(10.7)	6.4	4.0	385.7	ホルンフェルス	1
11	8号住	(6.9)	7.4	4.8	316.2	花崗岩類	3
12	+	9.3	7.5	4.5	281.8	輝石安山岩	2
13	+	17.2	6.9	5.2	904.7	ホルンフェルス	2
14	+	19.7	6.1	7.9	1300.5	凝灰角礫岩	1
15	+	12.5	10.6	6.0	1022.6	輝石安山岩	2
16	14号住	9.6	6.8	5.6	548.9	+	1
17	17号住	16.3	7.0	8.8	1303.2	花崗岩類	4
18	+	13.6	7.4	6.4	891.1	+	4
19	2号土	(4.4)	(6.7)	4.6	187.6	輝石安山岩	2
20	19号土	(18.1)	10.1	7.8	806.7	角閃石安山岩	(1)
21	20号土	9.6	6.8	5.0	442.6	安山岩	4
22	40号土	10.1	8.4	4.9	523.3	花崗岩類	2
23	43号土	13.8	8.4	6.0	996.6	+	1
24	45号土	13.3	8.4	3.9	293.3	輝石安山岩	
25	31号土	(9.6)	8.5	5.5	906.2	花崗岩類	2
26	+	19.5	7.3	5.6	1337.8	+	4
27	1号溝	13.6	9.9	4.8	848.8	安山岩	3
28	+	(5.9)	(7.6)	3.4	90.6	輝石安山岩	1
29	+	(6.7)	(6.0)	4.7	186.6	+	1
30	2号溝	8.3	7.8	3.6	390.6	花崗岩類	2
31	+	11.2	6.2	3.2	594.4	+	3
32	川跡	8.1	5.5	4.1	242.0	ホルンフェルス	2
33	+	8.6	6.4	6.3	993.9	角閃石安山岩	1
34	+	8.2	6.3	3.9	318.1	安山岩	2
35	+	10.9	8.7	6.6	942.5	花崗岩類	1
36	+	(9.9)	7.0	4.2	488.5	+	2
37	C 9 G	9.8	7.6	5.0	510.5	輝石玄武岩	2
38	D 19 G	(4.2)	5.5	(4.2)	76.3	安山岩 (1)	
39	B 20 G	8.4	7.1	5.6	944.7	輝石安山岩	
40	B 21 G	8.8	8.3	4.4	879.3	安山岩	2
41	D 21 G	10.7	7.1	5.0	496.3	輝石安山岩	1
42	C 22 G	18.1	7.0	4.1	381.0	+	
43	A 23 G	7.0	6.3	3.6	310.4	安山岩	2
44	D 23 G	5.9	8.2	5.3	943.5	輝石安山岩	1
45	C 25 G	15.2	7.8	6.8	992.8	花崗岩類 (1)	
46	C 49 G	14.5	7.8	(4.3)	640.8	輝石安山岩	1
47	D 49 G	(4.5)	9.3	(5.0)	296.4	輝石安山岩	1
48	黄土	12.3	5.9	2.6	279.4	輝石安山岩	

石皿一覧表

()は現存標高位置 単位(m・g)

出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	石材	その他
1	2号住床下	(12.4)	12.8	6.0		輝石安山岩
2	3号住	(12.3)	(8.8)	5.5		+
3	+	(16.4)	(16.7)	4.0		+
4	+	(6.5)	(12.1)	4.9		+
5	4号住	(12.3)	(7.7)	3.6		+
6	5・6号住	(16.0)	(16.5)	7.6		+
7	5号住	(16.9)	(16.1)	9.3		安山岩
8	17号住	19.1	19.0	5.0		輝石安山岩
9	+	(7.8)	(10.6)	5.8		+
10	12土	(16.5)	(12.3)	9.2		+
11	17土	(8.4)	(7.8)	4.3		+
12	64土	(11.9)	(17.0)	9.4		+
13	D 22 G	(16.2)	(19.8)	6.7		+
14	+	(16.1)	(10.8)	2.6		緑色片岩
15	C 22 G	(15.4)	(19.7)	5.6		玄武岩
16	B 14 G	(12.1)	(12.3)	3.5		輝石安山岩
17	川跡	(15.4)	(15.5)	7.8		花崗岩類
18	+	(15.3)	(17.0)	5.1		輝石安山岩
19	+	(16.4)	(16.8)	8.1		+
20	+	(12.5)	(14.8)	6.9		+

石鐘一覧表

()は現存標高位置 単位(m・g)

出土位置	形	長さ	巾	厚さ	重量	石材	その他
1	1号住	(2.4)	1.4	0.3	(1.4)	泥	溝
2	+	(2.4)	0.6	0.2	(0.7)		
3	5号住	2.5	2.6	0.3	7.4	+	
4	44号土	(3.3)	3.4	0.3	(8.0)	チャート	
5	74号土	(2.2)	1.4	0.2	(0.8)	+	
6	3号溝	(3.2)	1.7	0.4	(4.7)	泥	溝
7	A 24 G	(1.6)	1.8	0.3	1.2	チャート	
8	D 24 G	3.3	1.8	0.3	(3.9)	+	
9	D 26 G	2.3	1.7	0.3	2.1	磨硝石	
10	C 22 G	3.9	2.2	0.3	6.3	チャート	
11	D 0・A 6 G	(8.5)	2.0	0.6	12.0	ホルンフェルス	

磨製石斧一覧表

()は現存標高位置 単位(m・g)

出土位置	形	長さ	巾	厚さ	重量	石材
1	4号住	(9.5)	2.0	3.0	91.5	凝灰岩
2	12号住	(11.2)	4.7	3.2	220.3	緑色片岩
3	29号土	(9.9)	6.4	2.8	317.5	頁岩
4	44号土	(8.7)	5.9	2.4	147.5	緑色片岩
5	川跡	(8.7)	5.4	3.4	265.2	緑色片岩
6	黄土	(3.5)	4.3	4.1	199.2	輝石安山岩
7	D 20 G	(11.7)	4.8	2.4	179.6	緑色岩
8	B 23 G	(6.1)	5.1	3.6	118.8	凝灰岩
9	B 27 G	(9.2)	5.1	3.1	164.4	
10	黄土	(9.8)	5.3	2.9	217.1	緑色片岩
11	+	(11.4)	(6.4)	2.8	192.3	+
12	+	(3.9)	3.5	2.4	38.7	+

表 5 石器計測表(2)

石 織 一 覧 表

() 織付部高減換 単位(mm-g)

番号	出土位置	形 態	長 さ	巾	厚 さ	重 量	石 材	その他	番号	出土位置	形 態	長 さ	巾	厚 さ	重 量	石 材	その他
1	1号位		(2.1)	(0.8)	0.5	(0.5)	チャート		66	2号層		(2.2)	(1.7)	0.5	(0.8)	チャート	
2	*		(2.0)	(1.4)	0.5	(0.5)	黒曜石		66	*		(1.4)	1.5	0.4	(0.5)	黒曜石	
3	*		(1.4)	(1.2)	0.2	(0.4)	*		67	*		1.7	1.3	0.4	0.5	*	
4	*		1.8	1.8	0.4	1.2	チャート		68	*		(1.8)	(1.2)	0.5	(0.4)	*	
5	*		(1.4)	(1.1)	0.3	(0.3)	黒曜石		69	*		1.6	1.4	0.6	0.9	*	
6	*		1.5	1.4	0.3	0.5	*		70	*		(1.7)	(1.3)	0.4	(0.6)	*	
7	*		1.2	1.2	0.2	0.5	*		71	*		(1.2)	(1.2)	0.6	(0.7)	*	
8	2号位		2.3	2.0	0.7	2.9	チャート		72	*		1.5	1.4	0.4	0.5	*	
9	*		2.8	2.2	0.6	2.6	黒曜石		73	片跡		(2.2)	(1.4)	0.5	(0.7)	*	
10	*		2.5	2.2	0.6	1.7	チャート		74	*		1.2	0.9	0.5	0.5	*	
11	3号位		1.5	2.0	0.5	1.1	黒曜石		75	*		(1.5)	1.1	0.5	0.5	*	
12	*		(3.1)	(1.7)	0.5	(1.6)	チャート		76	B11G		(1.4)	(1.2)	0.2	(0.5)	*	
13	4号位		(1.9)	(1.6)	0.5	(0.7)	黒曜石		77	B19G		(2.4)	(1.7)	0.4	(1.2)	*	
14	*		(2.2)	(1.5)	0.4	(0.5)	チャート		78	A14G		2.4	1.6	0.4	1.4	チャート	
15	*		1.9	2.0	0.5	0.5	磁質砂岩		79	D19G		(1.6)	1.7	0.4	(0.8)	黒曜石	
16	*		1.2	2.0	0.5	1.8	黒曜石		80	D16G		2.0	0.9	0.4	0.7	*	
17	*		(2.1)	(1.2)	0.5	(0.5)	*		81	*		(1.6)	(1.5)	0.4	0.4	*	
18	*		(2.4)	(1.9)	0.5	(1.4)	*		82	D17G		(2.4)	(1.4)	0.4	0.5	*	
19	*		1.7	1.4	0.3	0.6	*		83	*		(1.5)	1.6	0.4	0.5	*	
20	*		(1.3)	(1.4)	0.4	(0.4)	*		84	C19G		(1.6)	2.2	0.2	1.3	*	
21	5号位		(2.5)	(1.4)	0.4	(1.0)	磁質砂岩		85	D18G		1.5	1.4	0.4	0.4	*	
22	*		(2.0)	(1.7)	0.5	(1.3)	黒曜石		86	*		(1.6)	(1.2)	0.3	0.3	黒曜石	
23	*		(2.3)	(1.1)	0.5	(0.7)	*		87	B19G		(1.9)	(1.3)	0.4	0.8	チャート	
24	*		(2.4)	(1.6)	0.5	(0.8)	*		88	D19G		1.7	1.5	0.5	0.5	*	
25	8号位		(2.1)	(1.2)	0.5	(0.4)	チャート		89	C19G		(2.4)	(1.7)	0.5	1.0	*	
26	*		2.0	1.6	0.6	1.5	黒曜石		90	D19G		(1.4)	(1.6)	0.3	0.7	*	
27	*		(2.3)	(1.5)	0.4	(0.7)	*		91	B20G		(1.5)	2.4	0.4	1.4	*	
28	*		(1.7)	(1.1)	0.3	(0.3)	*		92	*		(2.4)	(1.8)	0.5	1.8	黒曜石	
29	*		(1.9)	(1.4)	0.4	(0.5)	*		93	*		(2.0)	1.7	0.4	1.1	チャート	
30	*		(2.3)	1.6	0.4	(0.7)	*		94	*		(1.8)	1.9	0.4	0.5	黒曜石	
31	*		1.9	1.5	0.4	0.5	*		95	*		1.7	1.3	0.4	0.4	*	
32	*		1.2	1.2	0.4	0.4	*		96	*		(2.5)	(1.9)	0.3	(1.1)	*	
33	*		(1.8)	2.0	0.6	2.3	*		97	D10G		(2.6)	(1.6)	0.5	(1.5)	*	
34	*		(2.2)	1.6	0.5	(1.0)	*		98	*		(2.0)	1.8	0.5	(0.7)	*	
35	10号位		2.2	1.5	0.5	1.5	*		99	B21G		1.5	1.4	0.5	0.6	*	
36	15号位		2.8	2.7	0.7	2.8	*		100	D21G		(2.3)	(1.6)	0.4	(1.0)	*	
37	17号位		1.5	1.9	0.4	0.5	*		101	B22G		(1.4)	(1.4)	0.4	(0.5)	*	
38	*		(1.6)	(1.8)	0.2	0.3	*		102	C22G		(1.6)	(1.2)	0.4	(0.6)	黒曜石	
39	1号土		(1.4)	1.4	0.4	0.5	*		103	*		2.0	1.6	0.3	0.7	*	
40	*		(1.6)	1.3	0.5	0.5	*		104	D23G		2.3	1.6	0.4	1.0	*	
41	2号土		(1.8)	2.0	0.4	0.9	チャート		105	C23G		(2.9)	1.3	0.3	(0.9)	*	
42	9号土		(2.8)	(1.8)	0.5	1.4	黒曜石		106	D23G		(2.9)	1.4	0.3	(1.5)	黒曜石	
43	14号土		(3.0)	(1.8)	0.5	(1.9)	チャート		107	D24G		(1.5)	1.2	0.3	(0.5)	*	
44	36号土		(1.8)	1.3	0.3	(0.3)	黒曜石		108	D25G		(2.4)	(1.7)	0.4	(1.2)	チャート	
45	39号土		(2.2)	(2.4)	0.4	(2.3)	チャート		109	B20G		(1.4)	(1.3)	0.3	(0.4)	黒曜石	
46	41号土		(1.7)	(1.1)	0.2	(0.4)	黒曜石		110	D20G		(1.9)	(1.2)	0.4	(0.8)	チャート	
47	42号土		2.2	1.4	0.4	1.2	*		111	D24G		(1.3)	(1.1)	0.3	(0.3)	黒曜石	
48	2号層		(1.5)	1.9	0.4	(0.9)	チャート		112	*		1.3	1.1	0.4	0.5	*	
49	*		(2.2)	1.6	0.5	(1.5)	*		113	*		(2.2)	(0.9)	0.4	(1.5)	*	
50	*		(1.1)	1.9	0.3	(0.4)	黒曜石		114	B25G		(2.4)	(1.4)	0.4	(1.3)	*	
51	*		(2.0)	(2.1)	0.3	(1.1)	*		115	D26G		(2.1)	(1.6)	0.2	(0.8)	*	
52	*		(2.3)	(1.3)	0.3	(0.7)	チャート		116	D26G		(2.3)	(1.8)	(0.5)	(0.9)	黒曜石	
53	*		(2.7)	(1.9)	0.4	(1.6)	*		117	C27G		(1.5)	(1.2)	(0.4)	(0.5)	*	
54	*		(2.4)	(1.8)	0.5	(0.8)	黒曜石		118	B28G		(1.4)	(1.2)	0.3	(0.5)	黒曜石	
55	*		(2.3)	(1.8)	0.3	(1.1)	チャート		119	B28G		(1.9)	(1.3)	0.4	(0.5)	*	
56	*		(2.6)	(1.2)	0.4	(1.0)	*		120	D27G		(2.1)	(1.5)	0.5	(1.5)	チャート	
57	*		(2.2)	(1.8)	0.5	(1.5)	黒曜石		121	S 3 G		(1.5)	(0.3)	0.3	0.7	黒曜石	
58	*		(1.8)	(1.2)	0.3	(0.6)	水 晶		122	90° A 4 G		(1.6)	(1.3)	0.3	(0.4)	*	
59	*		(1.9)	(1.4)	0.5	(1.6)	黒曜石		123	90° C11G		1.4	0.9	0.3	0.2	*	
60	*		(2.5)	(1.4)	0.4	(1.0)	*		124	表土		(2.1)	(1.2)	0.4	0.5	*	
61	*		(2.3)	(2.1)	0.4	(1.6)	チャート		125	*		(1.8)	(0.9)	0.2	0.2	*	
62	*		1.9	1.5	0.3	0.5	*		126	*		(1.9)	1.3	0.4	0.5	*	
63	表土		(2.0)	(1.6)	0.3	(0.6)	黒曜石		127	*		(1.6)	1.5	0.4	0.7	*	
64	2号層		(1.6)	(1.3)	0.2	(0.2)	*		128	片跡		1.5	1.2	0.4	0.4	*	

表 6 石 器 計 測 表 (3)

石匙一覽表

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材
1	1号住居S-12	横	3.05 cm	3.7 cm	0.4 cm	4.2 g	泥岩
2	1号住	横	(1.2) cm	(2.0) cm	0.3 cm	0.5 g	黒曜石
3	1号住居S-8	横	(2.5) cm	(2.9) cm	0.7 cm	3.2 g	チャート
4	4号住居S-54	横	(3.6) cm	(3.7) cm	0.75 cm	11.6 g	泥岩
5	5号住居カマド内	縦	9.6 cm	3.4 cm	1.8 cm	44.3 g	頁岩
6	5号住居	横	(3.1) cm	(3.7) cm	0.85 cm	9.8 g	泥岩
7	5・6住居S-21	横	2.3 cm	3.1 cm	0.7 cm	4.9 g	チャート
8	17住居S-4	横	(4.4) cm	(5.5) cm	0.8 cm	21.2 g	珪質頁岩
9	川跡	横	2.3 cm	2.7 cm	0.5 cm	2.2 g	チャート
10	川跡S-13	横	(3.6) cm	(3.4) cm	0.7 cm	7.3 g	砂泥岩
11	D-17G	横	(1.4) cm	3.2 cm	0.5 cm	1.9 g	チャート
12	B-20G S-2	横	2.3 cm	(3.8) cm	0.6 cm	4.2 g	チャート
13	D-21G S-1	横	3.4 cm	3.5 cm	0.8 cm	6.9 g	細粒砂岩
14	A-23G	横	2.5 cm	(3.7) cm	0.6 cm	4.5 g	粘板岩
15	C-23G	横	2.7 cm	(5.5) cm	1.0 cm	10.6 g	泥岩
16	D-51G S-1	縦	5.1 cm	2.4 cm	0.9 cm	11.4 g	泥岩
17	表土	横	4.3 cm	6.8 cm	0.7 cm	15.9 g	泥岩

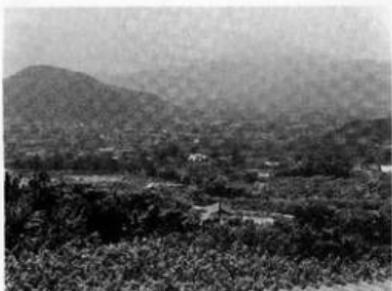
碌器一覽表

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材
1	3号住居		9.85 cm	8.8 cm	3.1 cm	430.6 g	ホルンフェルス
2	8号住居S-15		6.2 cm	7.0 cm	2.7 cm	164.1 g	ホルンフェルス
3	31号土壇S-6		10.0 cm	10.7 cm	4.3 cm	648.9 g	ホルンフェルス
4	59号土壇S-4		10.1 cm	7.3 cm	3.15 cm	356.0 g	ホルンフェルス
5	1号溝S-2		6.1 cm	7.2 cm	2.3 cm	99.4 g	チャート
6	29号土壇S-3		6.2 cm	6.7 cm	2.0 cm	120.3 g	ホルンフェルス
7	D-22G S-6		7.7 cm	8.65 cm	2.4 cm	214.8 g	ホルンフェルス

表7 石器計測表(4)



遺跡周辺航空写真



遺跡遠景（東から）



遺跡遠景（北から）



遺跡調査前（北から）



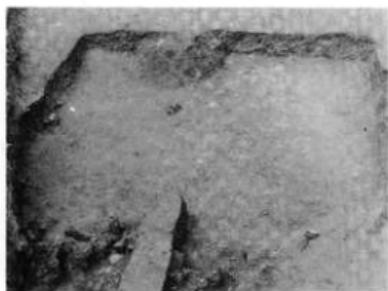
作業風景



作業風景



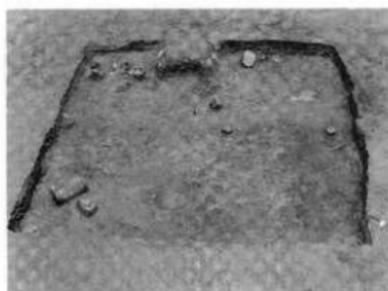
作業風景



1号住居址



1号住居址カマド断面



2号住居址



5号住居址遺物出土状態



3号住居址

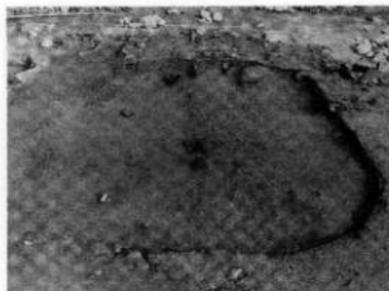


3号住居址遺物出土状態

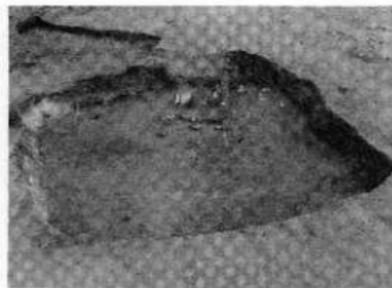
図版4



10号住居址



17号住居址



12号住居址



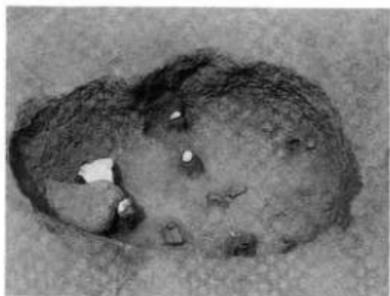
12号住居址カマド



40号土坑



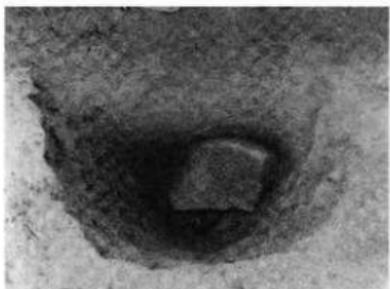
40号土坑遺物出土状態



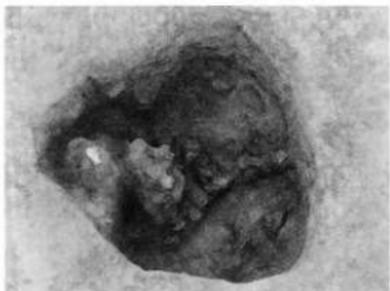
12号土坑



54号土坑遗物出土状态



64号土坑



75号土坑



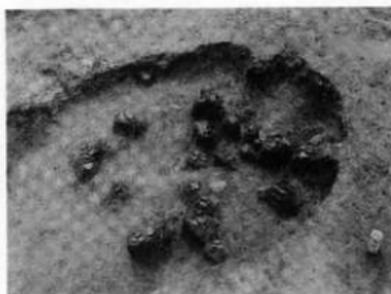
2号坑



谷部分出土打製石鏃



4号住居址土偶出土状態



80号土坑



道路遺構発掘風景



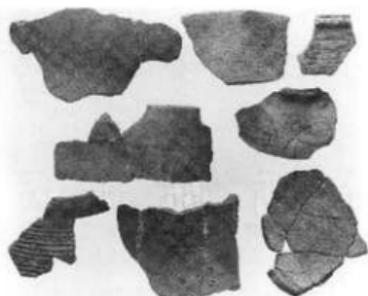
道路遺構 (南から)



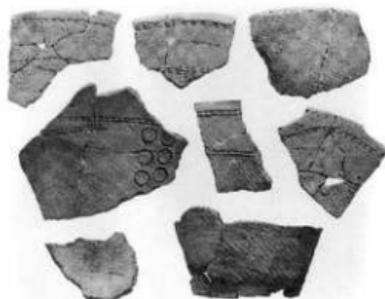
道路遺構石列



道路遺構 (北から)



6号住居址



14号住居址



6号住居址



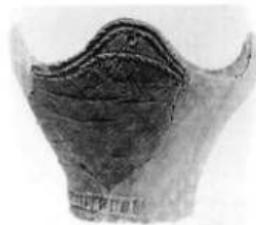
6号住居址



D-18グリッド



3号住居址



13号住居址



30号土坑



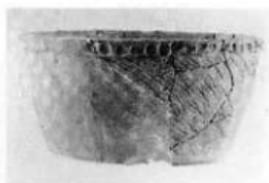
C-19グリッド



D-49グリッド



川 跡



2号土坑



川 跡



表 面 採 集



D-16グリッド



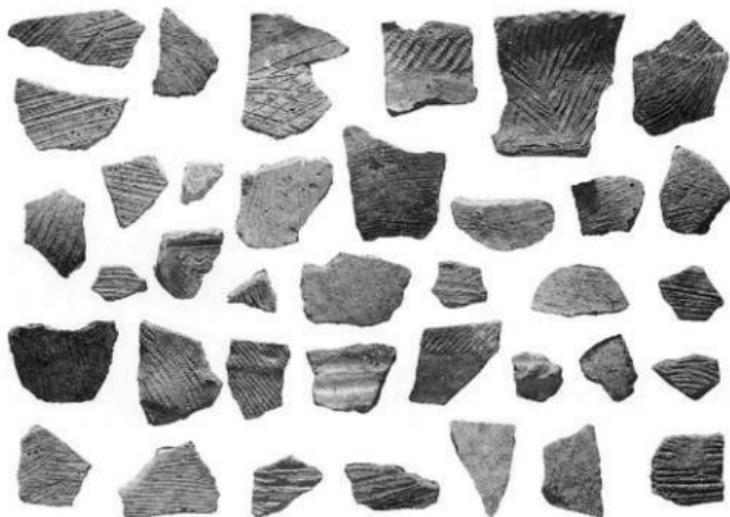
75号土坑



40号土坑



土 偶



縄文晩期～弥生中期の土器



1号住居址



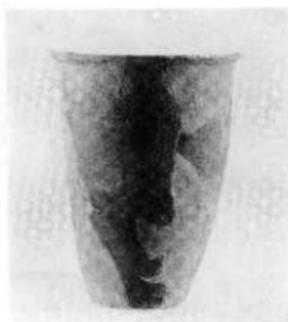
2号住居址



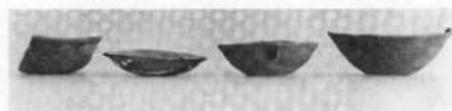
2号住居址



12号住居址



2号住居址



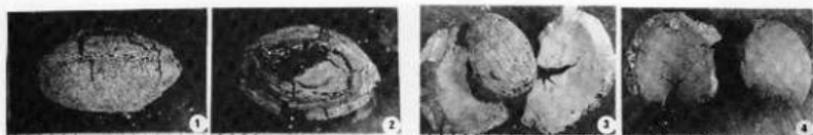
16号住居址



54号土坑



16号住居址



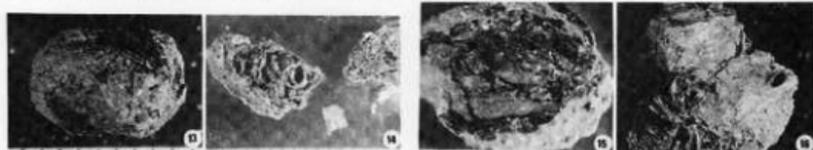
10住カマドC-13試料3 10住カマドC-13試料3 10住カマドC-3試料5 10住カマドC-2試料4



10住カマドC-5試料6 10住C-17 試料8 41号土坑 C-5試料13 10住C-15 試料7



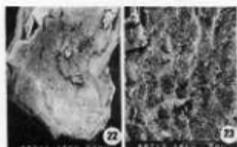
41号土坑C-3試料12 30号土坑C-1試料11 41号土坑C-6試料14 4住C-15 試料2



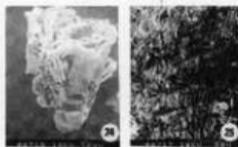
4住C-1 試料1 8住C-11試料16 8住C-10 試料15 14住C-1 試料10



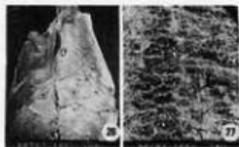
14住C-1 試料10 C-19G 試料9 8住C-10 試料15



C-19G 試料9



8住C-11 試料16



14住C-1 試料10

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第61集

しし^のまえ
獅子之前遺跡

印刷 平成3年3月25日

発行 平成3年3月29日

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曾根 923
TEL 0552-66-3881
発行 山梨県教育委員会
印刷 (有)新星堂印刷

